

研究チーム制度について

神奈川県自治総合研究センターは、神奈川県の組織であり、地域並びに自治体行政の基礎的かつ長期的な課題の調査研究を通じて職員の資質向上をめざすとともに政策形成への寄与を図るため設けられた機関です。

当センターでは、事業の一環として毎年研究テーマを複数選定し、それぞれについて研究チームを設置し、研究活動を行っております。研究チームは、県職員の中から応募した公募研究員、テーマに関連した部局から推薦された部局研究員、そして市町村及び公共機関から推薦された研究員により 8 名程度で構成され、研究員は、それぞれの部局での業務を遂行しながら、当センターに兼務となり、原則として週一日、一年間にわたって研究を進めてきております。

研究活動におきましては、既存の制度や制約をのりこえた自由な発想と新たな問題提起が最も重要な視点となります。

これらの研究の成果は、報告書にまとめ、県・市町村の各部局及び関係機関に送付して、行政運営等の参考として活用されております。

昭和 60 - 61 年度におきましては、A「民間活力の活用・導入」、B「地域教育力の再検討」、C「職員構成の変化に対応した人事システム」の 3 テーマについて研究チームが編成され、このたびその研究報告書がまとめられましたのでお届けします。

なお、この報告書は、B「地域教育力の再検討」の研究チームに係るものです。

おわりに、この研究活動に御支援と御協力をいただいた関係各位に対し、心から感謝の意を表します。

昭和 61 年 9 月

神奈川県自治総合研究センター所長

目 次

要するに言いたいことは.....	1
我々のアプローチの方法	5
第1章 地域教育力を考える	
1. 今、世の中は.....	7
2. 誌上座談会「地域教育力を考える」	9
(1) 今なぜ地域教育力が叫ばれるのか	9
(2) 学識者のとらえる地域教育力	10
(3) 地域教育力をとらえる視点	11
(4) 「地域」「教育力」「教育機能」	12
(5) 新しいコミュニティの創造と地域教育力	14
3. 言葉のパフォーマンス 豊かな地域社会の創造に向けて 地域教育力をイメージする	16
第2章 地域を耕す人々	
1. 「キビタスの会」活動と学習のリンク	21
(1) 会の誕生	21
(2) 会の特徴	23
ア. 幅広い活動	23
イ. キビタス流井戸端会議	24
ウ. 自分の場を見つける	25
エ. 学習の大切さ	26
オ. 資金、そして拠点	28
カ. 行政とのかかわり	29
キ. 地域とのかかわり	30
ク. 地域を構想する	31
(3) 展望	33

2 . 「茅ヶ崎市立小和田公民館」自分育ち	35
(1) 地球がまるごと見えてきた！	35
(2) 学習する市民	36
ア . 小和田公民館のはじまり	37
イ . 小和田公民館での学習活動	43
ウ . 表情のある公民館	49
(3) 自分史を書くこと	53
(4) 公民館とその周辺	56
3 . 「神奈川県横浜愛泉ホーム」認めあい、支えあい	62
(1) なぜ、愛泉ホームなのか	62
(2) 老人給食活動の始まり	64
中村の街	66
(3) 老人昼食会の現在	68
(4) 老人給食活動を担う人々	69
ア . 継続する力	69
イ . 学び合い、育ち合い	71
ウ . 中村地区老人給食運営委員会と地域の人々	72
(5) 老人給食活動の広がり	74
ア . 中村小学校とのつながり	75
イ . 平楽中学校の老人配食サービス	75
ウ . 中村社会福祉研究会	76
(6) 地域と共に変わってきた愛泉ホーム	77
ア . 施設の始まりと現在	77
イ . 職員	78
(7) 歩みは遅いけれど	82
4 . 「まいおか水と緑の会」 自然に親しむ仲間たち	83
(1) 農的自然を取り戻す	84
ア . コナラ、クヌギなどの植林	84
イ . 野草料理、田んぼ起こし	85
ウ . 田植、水辺の生きもの	86

(2) 会のあゆみ	87
ア. 「舞岡谷戸展」の開催	87
イ. 谷戸の公園づくりに立ち上がる	88
ウ. 市の土地使用許可、公益信託の適用	89
エ. 谷戸文化の保全・再生・創造	89
(3) まいおかの事例から学ぶこと	90
ア. 地域教育力の活性化	90
イ. 「地域」概念の問い直し	92
ウ. 地域活動への男性参加	92
第3章 活動持続力の源	95
1. 組織	95
2. 拠点(施設等)	96
3. 情報	97
4. 活動資金	98
第4章 豊かな地域社会の創造に向けて	100
1. 学習 問い、考え、創り出す	100
2. 活動 拡がる、つなぐ、暮らしをつくる	102
地域教育力顕在化のために(提言)	105
自分史ライブラリー	107
育ちあい学級	110
サークル団地	113
生と死の教育	116
街を楽しくする遊び場づくり	119
参考文献	122
あとがき	125



.....

.....

.....



“

”

「地域教育力」ないしは「地域社会の教育力」といった場合、多くの論者は今日、地域教育力が低下しているととらえ、低下した地域教育力の強化あるいは復権がこれからの課題であるという。しかし我々は、地域教育力というものは、あらゆる時代、あらゆる地域にそれぞれ固有の発現形態をとって現れ、時代とともに、地域とともに変化するものであると考えた。つまり、過去との比較において地域教育力をとらえるのではなく、今という時代の中で地域教育力の実態を把握することに努めた。

地域教育力といった場合、「地域」をどうとらえるかが問題となるが、従来の「血縁」「地縁」から「知縁」と称される「もうひとつの縁」が人と人との結びつきの中心となっている状況を踏まえ、土地の広がりとしての「地域」よりも、人間関係を中心とした「地域」の把握にポイントを置いた。

我々は地域教育力を考える上でのポイントが、地域社会に生きる一人ひとりの人間がどう主体的に生きているかを問うことにあるのではないかと考えた。つまり、一人ひとりの人間が生活をまるごととらえ直し、生活を通しての学びを深めていくことの中から豊かな地域社会が形成されるであろうと考えた。とりわけ大人自身あるいは大人相互の学びやかかわり方が地域教育力活性化の重要なポイントであろうとの観点から、大人たちの地域での活動、日々の生き方の姿勢に焦点を当て、地域教育力の現状把握に努めた。

大人自身の自己変革こそ地域教育力を考える上でのキーポイントであろうと考えた我々は、理論的検討と併行して地域の学習文化施設、地域活動グループにアプローチし、現実具体的な学習・活動の動きの中から地域教育力の内実を把握することに努めた。すなわち、地域教育力というテーマを理論レベルから研究するのみならず、地域に根ざした学習・活動を日常レベルで実践している施設、グループの生きた姿、生の声をチーム員自身の肌を通して把握することにより、地域教育力という抽象度の高いテーマを現実レベル、生活レベルでとらえようと試みた。実際には、これら施設、グループへのアプローチを通して理論の構築や修正がなされた点も多い。

アプローチすべき学習・活動施設、グループの選定に当たっては、「学習と活動との統合」「他者との共生」という視点にポイントを置きつつ、施設、グループの特性等を勘案し、最終的には地域教育力を考える上で示唆に富むと思われる次の四つにアプローチすることにした。

キビタスの会

茅ヶ崎市立小和田公民館

神奈川県横浜愛泉ホーム

まいおか水と緑の会

事例研究の対象となった四つの施設、グループのうち、「キビタスの会」、「神奈川県横浜愛泉ホーム」の二つは、通常福祉関係の施設、グループであるとされている。地域教育力をテーマにした我々の研究チームが福祉関係の施設、グループにアプローチしたのは、「他者との共生」が地域教育力を考える上でのキーワードであり、「福祉」「教育」「文化」の三者は渾然一体となって地域教育力の内実を形成するものであると考えたからに他ならない。換言すれば、地域の福祉的活動にスポットを当てることにより、地域教育力の内実が一層鮮明になるであろうと考えたからである。

1 . 今、世の中は.....

1986年、今はどんな時代なのだろう。歴史の大きなうねりの中で、現在進行しつつあるこの瞬間に意味付与をするのは不可能な事に違いないが、過ぎ去った時間と比較して考えてみるのはできないことではないだろう。

人は「安定成長に移行した」とか「低成長時代」だとか言う。確かに数字の上から見れば、経済状況にかつての活気は見られないが、どうやら高度経済成長と呼ばれた時代に身についた生活習慣はそのまま今も受け継がれているのか、日本の年間平均労働時間は相変わらず欧米諸国を数百時間も上回っている。

しかし、一方ではG N P神話の価値観は徐々に変容しつつある。若い世代では、仕事中心の生活から仕事余暇両立型志向へと移行しているのが現状だろう。昭和一桁世代に象徴されるように、がむしゃらに働き続けた世代とは違い、「仕事がすべてじゃないさ」という“ニューファミリー”だとか“新人類”だとか言われる世代もそうした時代の変化を物語っている。

今、人々は仕事も余暇も含めて自分の生活だけを大事にし続けたあまり、この社会の中で分断され、孤立化し、他の人を顧みることを忘れがちになったのではあるまいか。個人主義的傾向が人間関係の希薄さを招いているとも言えるだろう。

ましてや、この情報化社会では、たとえ家の中に閉じこもっていても、膨大な情報が入手可能になり、人とかかわりを持たなくても、当面生活に困ることはない。困ったことが起こっても、他人に迷惑をかけて“借り”を作るより、なんとか家庭の中だけで片付けてしまう方を選ぶ。あなたも思い当たる節はないだろうか。人に迷惑をかけずに生きていかれる現代人ではあるが、実は、自分の生活の範囲内ですべてを完結させてしまっているため、他の人との結びつきがわからないままにいる。わからなくとも生きていかれるのだから。しかし、その結果ますます孤立化に拍車をかけ、情報の渦の中で人々は不安に陥る。

また、長い年月をかけて構築された社会システムは今もって“個”よりも“組織”を大切にしている。そのシステムの中の一人ひとは多様な存在であるにもかかわらず、組織の中でその多様性が生かされるチャンスは少ない。このため多くの人々は、日々の生活の中に漫然とした不満や不安を抱き、葛藤を続けながら、

全体の動きに流されてしまうことが多い。

定年退職後には、仕事一筋の生活を長年続けた結果、気力を失い、生きる術をも失い“産業廃棄物”となってしまう夫や、家庭のためだけに生きてきて、自分自身がどう生きればいいのか、何をしたいのかもわからない妻もみられる。そして長年共に暮らしてきた夫婦という関係の中でさえ、気がつくとお互いを理解することができずに、結び合えていないことが露見してしまうケースもあるようだ。

孤立と不安と葛藤の中で、自分自身の生きる方向を見失い、人と結びつき合う方法を見いだせずという閉ざされた状況の中から、自殺・アル中・いじめ・中高年の離婚などの現象が最近大きくクローズアップされてきている。

あなたも「何かおかしい」「何か違う」と思いながら、感じながら、日々生活を送っているひとりかもしれない。だが人は「何がおかしくて、何が違うのか」がなかなかわからない。ただ漠然と「おかしい」のであり「違う」のである。だから自分が「何をどうしたいのか」もわからない。心のどこかで「こんなはずじゃなかった」というもやもやしたわだかまりを、自分でもそれと知らずに持ち続けているのが現代人だろう。

よしんば、「本当は自分が何をしたいのか」がわかったとしても、一般的にそれを実現するためにはかなりの勇気が必要である。ましてやあなたが今、組織人で、自分の行きたい方向が組織の進む方向から逸脱するものであればなおさらだ。今まで生きてきた道はずれて、自分自身の生きる方向を見定めて、一步踏み出す。「何をどうすればいいのか」「失敗するかもしれない」「やり直しはきかない」「先が見えない」そういった困難や不安を克服してまで一步踏み出すことがどれほど難しいか。

「もう少しの自身があれば」と思う人々が、一步踏み出す手掛りを見いだせずに挫折してしまう。こういうことが多くはないだろうか。

一方そうした日々の不安感の中から自分なりの動きをはじめた人もいる。孤立した自分の狭い役割分担の囲いの中だけでの生き方から抜け出し、他の居場所を見つける人たちだ。より確かな自己を見つめた上で、主体的に“生きる”方向を選び取り、他の人々との共生、共感の輪をつくりながら“もうひとつの豊かさ”を創造していく人たち。

今、私たちに求められていることは、いつまでも孤立して自分の中だけで生活を完結させるのではなく、「どうしたら他の人々となることができるのか、結びつくことができるのか」そうした課題を解決していくことなのではあるまいか。

2. 地域教育力を考える

(1) 今なぜ地域教育力が叫ばれるのか

- A. 「地域教育力」とか「地域社会の教育力」という言葉を最近よく耳にする
が、いつごろからこういうことが言われ出したのだろうか。
- B. 多分1960年代の終わりから70年代の初めごろだと思うね。高度成長時代が
終わり、物質的には欧米の水準に達したものの、大規模な国土開発、地域開
発により、伝統的な意味での地域はほとんど崩壊してしまった。そこで希薄
になった地域の連帯を取り戻そうという政策的配慮から地域にも教育的な一
定の役割を意図的に担ってもらおうとしたのではないだろうか。
- C. そういえば中央省庁でコミュニティ政策を盛んに打ち出してきたのは1970
年代になってからですね。そのことと符節をあわせるかのように、このこ
ろから国レベルの審議会などでコミュニティ政策、生涯教育政策の答申が次々
と打ち出されたんです。例えば、学校・家庭・地域・職場の教育的役割と連
携の重要性をうたった社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処す
る社会教育のあり方について」が1971年、青少年の社会参加の必要性を強調
した青少年問題審議会答申「青少年と社会参加」が1979年、生涯教育時代の
到来を告げた中央教育審議会答申「生涯教育について」が1981年という具合
にね。
- A. 今度、臨時教育審議会が答申の基本的トーンを「生涯学習」にすえると
言っているのも同じ系譜と考えていいのかな。
- C. いいと思いますね。ただし、新井戸端会議の提唱や地域の祭の振興という
レベルで地域教育力が高まるとは思わないし、上からトップダウン式に望ま
しい地域の在り方みたいな方向がしめされることにも問題があると考えます。
- B. 地域教育力が言われている背景は、現在の学校教育のいきづまりにあると
考えているが……。臨教審も学校教育の改革の必要性を強調しているしね。
- C. 私もそう思います。校内暴力、自殺、いじめ等いわゆる問題行動を起こし
ている背景には、偏差値、輪切りに象徴される知識偏重教育、管理主義教育
がまかり通っているからではないのかしら。
- B. 学校がいきづまってきているのは認めるが、そのことについての問い直し
を真剣に行おうとすることなしに、地域教育力に何を期待しようとしている

のか。地域教育力ということを強調する人々が、学校に期待はできないが地域なら期待できると考えているとしたら、そういう考えは地域の現実を無視したユートピア思考だな。

C. それは「地域教育力」の内実、その中身をいかにとらえるかにかかってくるのではないんですか。

(2) 学識者のとらえる地域教育力

A. では、地域教育力の内実を検討することにしましょう。文献などのとらえ方はどうなっていますか。

C. 「地域教育力」とか「地域社会の教育力」という言葉で通常語られている内容をみても、その概念は極めて多義的、包括的であり、一義的に定義づけることはできないようです。ただ共通して言っているのは、地域社会には本来独自に人間形成作用があるということ。つまり、教育は学校だけで行われるものではなく、家庭を含めた地域全体の中に教育的な働きがあるという点なんです。

イリッチは地域全体が学校である必要があると言っているし、デューイは学校の中に地域が貫徹される必要があるという言い方をしているけれど、学校を“聖域化”扱いしないという点で両者とも同じだと思う。

B. 九州大学名誉教授の矢野峻さんは、地域教育力の構成要素を 習俗、習規などの社会規範、 自然体験、社会参加体験、労働体験などの生活体験、地域集団の持つ教育力、という3層でとらえ、地域教育力を高めるのは大人の連帯であると言っていますね。(注1)又、専修大学の鐘ヶ江晴彦さんは、地域教育力を 地域の自然、文化及び人間関係の持つ教育力、 地域の諸機関、施設、活動の持つ教育力という二つの要素から考えている。(注2)鐘ヶ江さんの見解に近い言い方をしている学識者が比較的多いんです。また、東京大学の宮坂廣作さんは、地域教育力を「教育を地域社会共同のザッへ(ことがら)とする」ことだとしたうえで、生活と学習の内的関連性の回復、他者との共生の教育、学習者の主体性回復、相互教育、抽象性・観念性、概念性の克服、個性、創造性、批判的実践的知性がキー概念だと言っていた。(注3)価値概念としては「他者との共生」、方法論的概念としては「生活と学習との統合」というところがキーポイントだろう。立教大学の栗原杉さんが「朝日ジャーナル」1985年11月29日号に掲載された「ネットワーキング」の説明の中で「個に固執しつつ、共生価値へ転生していく」と述べているので

すが、これも「他者との共生」「生活と学習との統合」と同義であるにとらえてもいいのではないかと思うんです。

学識者の見解も、大別すると、「生活即教育力」というか「生活の中で」あるいは「生活を通じて」示される人間の営みの中には、意図的であれ無意図的であれ教育力が潜んで居るという立場と、子供会や社会教育施設における活動のように、生活拠点における教育主体の積極的、意図的な活動と働きかけを重視する立場の二つがあるようですね。鐘ヶ江さんの言う「地域の自然文化、人間関係の持つ教育力」は主として後者に属すると考えられますね。

(3) 地域教育力をとらえる視点

A. 学識者の見解はともかく、問題は地域教育力を「低下している」ととらえている文献が多い点だ。低下しているとなると「高めろ」となるのが理の当然で、そうなる旧世界への復帰は目前でしょう。我々としては地域教育力が見えにくい状況になっている、或いは潜在化しているという受け止め方をしたいわけです。とかく地域教育力という概念があいまいなだけに、言葉だけが行政シンボルとして一人歩きし、容易に大衆操作に使われてしまう危険性があるんですよ。

B. そうなると我々としての定義を仮説でもいいから用意する必要がありますね。地域教育力があるというのはどういう状態のことをいうのだろうか。

C. 地域にそれぞれ固有の個性が発揮され、あらゆるものにいのちがみなぎっている状態ではないかと考えますが.....。

B. 地域教育力というのは、もともとインフォーマルなところに特色がある。どんなすばらしいものでもシステム化されればフォーマルなものになる。あくまで柔軟、多様な教育的作用を考えたい。

A. そうすると、あらゆるものが地域教育力になり得るということですかね。

C. 理屈としてはなり得るでしょう。地域の人々が生活の中にある問題に気づき、それを伝えていくということ、即ち気づき合い、伝え合いという人間関係をもつことができるか否かがポイントじゃないかしら。

A. 気がつくためには、地域が開かれていること、基本的には家庭が開かれていることが必要ですよ。しかし、いまの家庭は人とつきあわなくても情報がどんどん流れてくるから家庭を開かなくても困ることはないんですよ。

B. 「自分さえよければいい」というミーイズムが支配的な社会では地域教育力は育たない。共楽共苦とまでは言わないまでも、「共育ち」をしていくた

めには、意図的に体験の共有化を図っていく必要があると思う。

A . 自分さえよければいいとは思わないが、でも地域教育力と言われると、地域の生活まで干渉されるのではないかという、何かいやな気分になる。他にいい言葉はないのだろうか。

C . さっき「共育ち」という言葉が出ていたでしょ。この言葉に置き換えられないかしら。

B . 「共育力」としたら、もっと近いイメージにならないかなあ。

A . 一語で置き換えなくても、「地域の生活や文化の中に秘められた人間形成力」というのをとりあえず地域教育力ととらえてみたらどうでしょう。その際、「人間をよくする潜在的な力が地域に潜んでいる」ことの意味を問い直して、地域の掘り起こしと創造を通し「学校の外にいわば学校ならざる学校をつくり出す」というインフォーマルな形成作用こそが「地域教育力の再検討」を行うに当たっての核心部分であるという押さえ方をしておいたらどうでしょうね。

B . いずれにしても、地域教育力というのは、意図的であれ、無意図的であれ、住民同士の相互交渉の過程の中に、人間形成作用としての力が潜んでいることを重視するわけだからそういうことでいいと思うよ。大切なことは、新しい教育の在り方を模索する一環として地域教育力というテーマが注目されているわけなのだから、そうした意味では既存の諸価値や権威に対するレジスタンスの姿勢を欠いた地域教育力の検討なら、あまり意味がないと思う。

A . そうなってくると、地域教育力が高まるためのポイントは、何と云っても子供ではなくて大人だね。大人がまず気づく、そして自己変革していく。その姿が子供に伝わっていく。或いは周囲の人に伝わっていく……。つまり、大人の学び、気づき、自己充実といった人間としての高まりが、自然に周りの人々にいい影響を与えていく。このことが即ち地域教育力ではないのかな。

C . そのとおりだと思います。自分が変わらずして相手を変えようというのは教育ではなく政治です。自分が変わることによって相手が変わることを期待するのが、本当の教育ではないかしら。その意味でも大人の生活スタイル、地域とのかかわりの姿勢を問い直すことが先決だと考えます。

(4) 「地域」「教育力」「教育機能」

A . その「地域」だけれど、日常定住の生活空間ということになると中学校区程度のエリアをいうのかな。

- B．日常生活の現場という空間概念で「地域」をとらえるならば、居住地を中心とした中学校区程度のエリアを指すことが多いようだけれど、大人（成人）の場合や、地域教育力といった場合の地域を考えると“そこに住んでいるから地域住民だ”というよりも、何らかの文化形成に携わって初めて「地域」や「地域住民」が誕生すると考えたほうがいいのではないだろうか。
- A．地域を関係概念でとらえる必要があるということだね。もう一つ、地域の現状をどう見るか。“矛盾と葛藤の坩堝”という見方もあるんだけど……。
- C．1枚岩でないことは確かだけれど、だからこそ自由で多様だとも言えるわね。かつての地域ボスが支配していた地域というイメージは、今は少ないでしょう。けれど逆に“結び手”がなくて、地域文化が育たないという面もある。みんなが平等の立場で地域にかかわりを持つことができる時代なわけですがけれど、現実には自治会活動の停滞に象徴されるように居住地域への関心は薄い。居住地域でのつきあいは「あいさつ程度、立ち話程度」がよいという統計結果も出ていますからね。
- A．でも地道に住民活動、地域活動をしているグループも少なくはないですね。図書館、公民館、地区センター、児童館など住民の学習施設、集会施設も増えてきていますし……。「地域の諸機関・施設・活動の持つ教育力」という面での地域教育力は高まってきているのではないのでしょうか。
- B．確かに学習施設、集会施設は増えてきてはいるよね。しかし、行革がらみで施設運営の民間委託や専門職員の引き上げが進んでいて、施設の増加が活動の増加にまで結び付いていない面がある。施設自体は教育機能を持っているだけで「教育力」を発揮しているわけじゃない。施設の持つ教育機能が教育力という意味でのパワーになるためには、専門職員や地域の人々の手により教育機能が引き出されることが必要だと思う。「教育力」という部分と「教育機能」という部分とを分けて考えた方がいいと思うよ。
- A．もう一つのポイントは、教育機能を持つ機関・施設の専門分化、拡散化が行われ、その結果、個々の教育機能は高まっても全体としての「統合化」が図られていないためにトータルな人間形成作用としての地域教育力にはなっていないという点ではないかと思う。それはともかくとして、一方ではまた、「生涯学習」とか「学習社会」とかという議論が盛んになされて、カルチャーブームに象徴される学習熱もみられるわけ。こうした傾向は、地域教育力を高める方向に作用すると考えていいのだろうか。
- C．自己啓発や自己開発が尊重されるということであれば、地域教育力という

点から考えてもマイナスではないでしょう。ただ学習だけでは“自己”は育っても“共同”は育たない。“自己育ち”が“共育ち”になっていくためには、学習が生活に生かされ、「活動」に発展していくこと、つまり「活動と学習との統合」が大切です。カルチャーブームは学習を“知的アクセサリー”にとらえた脱日常的行動で、あの動きの中に地域教育力を期待するのは難しいと思いますね。

A．“知的アクセサリー”という意味でだけなら難しいかも知れないけれど、でも新しい発見やつながりのきっかけにはなるんじゃないんですか。

(5) 新しいコミュニティの創造と地域教育力

A．今までの議論から言えることは、結局のところ地域教育力というものは所与の自明の存在ではなく、地域の中で人が自然や文化などへの働きかけを通して、それぞれの地域の実態にふさわしい地域教育力を創り出していくという性質のものだということになるようです。地域教育力を高めることと新しい地域の創造ということと大同小異になりますね。

B．正に地域教育力の創造と新しいコミュニティの創造は、同じ写真のネガとポジの関係にあると思います。その際、我々としては、今住んでいる地域が、1962年から始まった旧全総（全国総合開発計画）1969年からの新全総（新全国総合開発計画）、1972年以降の三全総（第3次全国総合開発計画）という大規模国土開発により、大きく変貌をとげた地域であるということの意味を十分踏まえておく必要があるように思いますね。いわゆる都市化、産業化、地域開発の展開による地域の自然破壊、文化的独自性の喪失、地域社会の共同性の崩壊などと言われる現象は、産業資本優先による利便性、効率性、快適性を追求したことの“ツケ回し”と言えるのではないのでしょうか。

A．そのことに異論はないけど、そうした地域を我々自身が選びとってきたのではないですか。多くの人々は、自分が今住んでいる地域をいい地域だと思ってるよね。

C．しかし、今住んでいるところに永住するかといえば、「もっといいところがあったら引っ越したい」と考えている人が多いことも事実ですよ。私は12年前から3LDKの分譲マンションに住んでいるけど、同じ階の8軒のうち、今でも残っているのは私のところだけです。今住んでいるところを“仮の住まい”と意識している人たちが多い状況の中からは、地域教育力は育ちにくいのではないかしら。

- A .でも、同じメンバーが地域に留まっているから地域教育力が高いかということ、決してそんなものでもないですよ。地域ボスがはびこるということもあるし……。新しく住むようになったいわゆる新住民と地の人といわれる旧住民とでは、一般的に新住民の方が地域への関心が高いんです。これはまあ当然としても、地域づくり、地域活動、地域参加のようなコミュニティ活動の例でも、自治会・町内会活動を除けば、概して新住民の方が積極的なんですよ。
- C .茅ヶ崎市の小和田公民館を拠点に学習しているグループが「地球がまるごと見えてきた!」という本を出版したので読んでみたら、大変感銘を受けたのね。どの人も日々の生活に根ざした生活まるがかえの学びこそ本当の学びであり、地域を動かすのは「人」であるということ、心の底から叫んでいる。ごく普通の市民の人たちが、あそこまで学びを深め、自己を高め、仲間を増やしていったということは、あの人たちの取り組んだ“体験学習”“自分史を綴る”という手法とともに、地域教育力を考えていくうえでの貴重な素材を提供してくれているように思います。
- B .地域教育力の課題は、正にその茅ヶ崎市の学習グループのような、新しいコミュニティを創造していく主体にふさわしい資質・能力・行動様式を備えた市民の輩出にあると思いますね。自らの足元を見つめ、生活環境の破壊を許さず、地域に生き生きとしたいのちがみなぎるような、そうしたコミュニティの形成に向けて、積極的に行動していける能動的市民が育つことができるか否か、そのことが今、正に問われているのではないのでしょうか。

(注1)「地域教育社会学序説」 東洋館出版社 1981年

(注2)「現代のエスプリ」No184

(注3)当研究チームへの指導助言 1985年12月13日

3. 言葉のパフォーマンス

豊かな地域社会の創造に向けて

今

- ・物質の豊かさ……総てを“もの”化（健康も生命も）
- ・高度情報化
消費情報（多様 豊富）情報集中化 “もの”から“こと”へ
- ・見通しがきかない 未来予測困難
- ・揺れ動いている 価値観の多様化

- ・人とのつながりが希薄
夫婦の関係も、その親との関係も、隣人との関係も
- ・メディアの中に隣人 恋人
- ・「見えない制度」に縛られる
情報 社会システム 社会習慣 常識
- ・多忙 多消費
- ・永遠の生命を希求……豊かさの頂点
- ・孤立 不安 ダブルバインド（二重拘束）
- ・複属化指向（もうひとつの生活の場を求めて）
- ・オルタナティブな生き方

まず“私”から

- ・“必要”から始まる
- ・自己を見つめる 時間軸と空間軸にそって
過去（親）——現在（自己）——未来（子供）、自己——他者
- ・生活感覚を大切にする
- ・自己表現……そのままの自分を もう少しの自身を持つために
- ・学ぶ 動く つながる
- ・伝える 体験の共有
- ・生活をまるごと問い直す 生き方 食べ方 稼ぎ方を知る

——地域教育力をイメージする——

あそぶ

- ・ゆとりある生活
- ・楽しさ 美しさ やさしさの発見
- ・喜び 広がり 解放
- ・夢を見ること 夢中になること
- ・効率・合理性・目的を忘れる
- ・生活のネットワーキング……あそびながら働く、学ぶ
- ・よく遊び よく遊べ そうすればおのずと自分とその生きる方向が見えてくる
- ・自己発見

はたらく

- ・生きることの実感 生きがい
- ・輝き 光 汗 充実
- ・自己表現 かかわりあい 自己実現

学ぶ

- ・内発的な可能性の引き出し 未発の可能性
- ・気づき 喜び 輝き 自己発見 自己実現
- ・繰り返し 意識、無意識の循環
- ・感覚 感情 感じる→知覚 認識 知る
- ・育ちあい 伝えあい
- ・権利 流されない
- ・文化の継承 新しい世界

動く

- ・自分を見つめ、一歩踏み出す
- ・“モノ”以外の時間 オールタナティブな動き
- ・自己表現 出会い 広がり
- ・鍛えあい 響きあい 高まりあい
- ・居場所 出番
- ・かかわり方 つながり方

つながる

- ・柔らかいつながり
- ・ヨコ 多方向 網の目 緩なす タタミイワシ
- ・多重心 リゾーム
- ・楽しい ゆっくり 自由
- ・多様 個の尊重 異質の共存
- ・からだで発する情報から、つながりは始まる

生きる

- ・誕生→成長→安定→衰弱→消滅（死） 有限
- ・有限な個人の生命が、他の生命との“はたらきあい”で無限に
- ・生命系の循環を断たない
- ・生きることは、はたらくこと、あそぶこと、学ぶこと 動くこと、
そしてつながること
- ・共に生き、共に育ち、男と女が良い関係を紡ぎだす

豊かな生活

- ・見方を変える つくる
- ・感じる
- ・想像する
- ・流されない 支配されない時間
- ・受け入れる
- ・かかわりあう

地域

- ・生きる場 自己発見の場
- ・根拠地 安定 安心 存在感
- ・拘束 矛盾と葛藤の坩堝
- ・隣近所、居を構える場とは限らない

豊かな地域

- ・自然をいとおしむ 動物、植物との共存
- ・人びとが自己を見つめ、他者の声に耳をすまし、生活のにおいを楽しむ 生命が息づいている
- ・ひとりが大切にされる (それぞれの目の高さ 個性 傷みを)
- ・自由 多様な個の共存 受容する
- ・急がない 待つ 関係を楽しめる 言葉が見える
- ・死を看取れる
- ・柔軟なつながり
網の目 多方向 動いている ゆるい 壊れやすい 同じ重み
出来ることを出来る形で 多重心

ネットワーキング

- ・私に固執しつつ、共生への価値転生
- ・対話と共感
- ・自立した人びとの共同行動
- ・関係 統合 連続性 両義性
- ・“私”の中のネットワーキング
矛盾をはらみつつ統合する自己
根拠地 旅
生活者 組織人
- ・生命系のネットワーキング
過去→現在←未来 <時間軸>
強者 弱者 <空間軸>

創る

- ・掘り起こす→耕す→創る→育てる
- ・時代の中で、そのとき生きる普通の人びとによって紡ぎ出される
- ・柔軟 多様 自由 豊か 楽しい
- ・相互にはたらきあいながら息づいている
- ・地域にいのちがみなぎる

人びと

- ・見つけあい 響きあい 学びあい 育ちあい 認めあい
支えあい わかちあい はたらきあい 生かしあい

活動と学習のリンク

「キビタスの会」 横浜市鶴見区に拠点を置く、今や代表的なボランティアグループのひとつである。

現在、会員53名。大半が女性である。

常に、生活感覚の中から問題を発見し、発見した問題に自ら主体的に取り組み、学習と活動を通じ、相互に理解と信頼に根ざした関係をつくりあげている人びと。そして、その活動が、自らの地域を構想し、教育力ともなっている人々。

最近よく「自立した市民」という言葉を耳にする。また一方で、「日本には真の民主主義はない（市民はいない）」とも言われている。しかし、大切なことはそんな概念や解釈ではなく、現実の生活の中でカベにぶつかったとき、生活感覚というごく自然な形でそのカベと取り組み、のりこえてきた、のりこえようとしている人々がいるということである。

そんな人々の集まりである「キビタスの会」。会の名称の由来は、次のようなことだという。

「キビタス」(CIVITAS) <ラテン語>

市民権・市民(市民のコミュニティ)・文明・都市

「市民」.....権利意識に目覚め、自覚的に社会参加する人間像

「コミュニティ」.....主体的な参加による理解と信頼に根ざす
新しい社会関係

(1) 会の誕生

ボランティアグループ「キビタスの会」は、今年10周年を迎えた。

一口に10年と言っても、広範多岐にわたる活動内容、ダイナミックな活動形態、

会の運営方法など示唆に富む点が多い。現況は後に譲るとして、「キピタスの会」の活動の下地を築き、いわば会の前身ともいえるべき「わかめ文庫」について触れてみよう。

「わかめ文庫」は、1969年4月に数名の母親たちによって始められた「地域巡回文庫」に端を発する。当時、子供が小学生であった簡照子さんらが、PTAの学級懇談会の中で、テレビっ子問題が話題となったのをきっかけに、子供たちにいつでも本が読める環境をとということから、30冊の本をみかん箱につめ、志を同じくする4～5人の家を2週間ごとに巡回することから始めた。

やがて、地域で急速に文庫の輪が広がっていく。当然、大勢の子供たちが集まってくる。それでは、ハイキング（秋）を行おう、キャンプ（夏）を企画しよう。子供たちばかりでなく、親も学習する必要がある。それなら母親クラブで、婦人学級で、児童文化講座（いずれも行政の補助金が出ていた）でというように活動も雪だるま式に拡大していく。

ところが一方で、本の不足や活動拠点の確保に悩むことになる。本の購入資金は、毎年11月3日（文化の日）に「わかめ文庫バザー」を開催することによってまかなった。しかし、拠点の方はどうしょう。

そんなとき、“横浜の市電が廃止される”というニュースを知る。1971年3月のことである。市電な



ら子供のための図書館に最適ではなかろうか。さっそく市へ払い下げの要望を出し、初めは色良い返事をもらえないものの、たび重なる折衝の末、ついに無償で一台もらい受けることができた。土地も

近所の地主さんから、これまた無償で提供され、おまけに周囲には、市費により遊び場（ブランコ、シーソー、砂場etc.）まで設置され、1972年9月2日、“わかめ文庫市電図書館”が開館することになる。

この「わかめ文庫」の活動に見られる、生活の中から問題を見つけ、自ら問題に取り組み、行政をはじめとして利用できるものは貧欲に利用し、しかも行政の足りない部分は自分たちで動くといったダイナミックな活動形態は、後の「キビタスの会」の基本姿勢として引き継がれている。そして、それにもまして大きな財産となったのは、活動を通して他のさまざまなグループと知り合えたこと、さらに、地域に障害を持つ子供たちが大勢いることを知ったことにある。

「わかめ文庫」の活動も軌道にのった1975年、横浜市が区単位で社会教育の学習会を開くことになり、鶴見区においては、9月から11月にかけて「鶴見区婦人教養セミナー」が、“教育と福祉”というテーマで開催された。そして、このセミナーで学んだ仲間が、「学習とボランティア活動をともに」ということから、半年ほどの準備期間を経て、1976年4月2日に誕生させたのが「キビタスの会」である。

セミナーの企画・運営を行う運営委員会の段階から区内のPTA活動、子供会活動、文庫活動やボランティア活動の経験者が加わったこと、また、参加者の中にダウン症児を持つ母親がいたことが、内容を具体的にし、ともすれば敬遠しがちな福祉の問題を身近に感じるために大きな役割を果たした。

「キビタスの会」は、設立当初からボランティア活動をその活動の中心にすえることとなる。

（２）会の特徴

ア．幅広い活動

「キビタスの会」を一言で説明するのは難しい。地域文庫、障害児保育、活動の拠点づくり、一人暮らし老人への給食サービス、老人ホームづくり、障害児・者の人々への給食サービスや作業所・活動ホームづくり、障害児のための布絵本づくり、その他送迎や活動についての手助けなどを行い、さらに、福祉の心について普及するためのコンサートや映画会、大バザールなど、その活動は本当に多様でダイナミックである。これらの活動を通じて「キビタスの会」の人々は、よ

り心豊かに力を寄せあって、健常者も障害者も、そして老人も共に生き合え、豊かな文化に触れ、創り合える地域を目指している。

会長の簡さんは、「精神的にも肉体的にも健康で住みやすい地域をつくること」が会の願いだと述べている。この会の活動を知ると、人々の具体的な活動を通して、人々の暮らし方や生き方がその方向に向かい、こうした地域づくりが可能になることを実践から示していると感じられる。つまり、人々の健康や地域の住みよさは、人々の具体的な行動を通して、実体のあるものになるということである。また、「相手の欲することを、欲するときにかかわりただ奉仕してあげるのではなく、相手の力の及ばないところをお手伝いする。そして自立できるように、自分を変え周囲を変えていくように関係をもつことを大切にしたい」と……。奉仕の受け手を弱者としてのみ位置づけるのではなく、共に生きる人とみているのである。これが「人間関係」ということだと思う。

また、「キビタスの会」の活動は、はじめから活動の領域が広がったのではなく、1976年の発足から10年、活動や学習を通じて必要なことへの対応を行う中で、解決に向けたさまざまな営みが積み重なるうちに、気がついたら多くのことをこなしていたというのが正直なところのようである。

「キビタスの会」は、必要な活動について、“この指とまれ”方式で、やれる人がやれる範囲で無理せずそれぞれの活動を継続させている。“この指とまれ”方式、人間関係、拠点づくり、そして活動資金への配慮などが、「キビタスの会」の活動を広げ、持続させ、地域に根づく原動力となったのではないだろうか。

イ．キビタス流井戸端会議

「キビタスの会」の動きは、外からみえるダイナミックさとは逆に、気負わず自然体である。毎週1回の障害者の地域活動ホーム「ふれあいの家」での給食サービスを見学したが、副会長の南山類子さんをはじめ、担っている人々は、近所のおばさんがちょっとお昼をつくりに来てくれている、という雰囲気である。障害者の人々とおしゃべりをし、一人ひとりに何げなく気を配り、時には苦言を呈し、ひき売りの八百屋さんへの買物につきあっている。「キビタスの会」の人同士も週に一度の顔合わせを楽しみ、活動の話、自分のこと、家族のこと、障害者の知り合いの近況などおしゃべりを楽しんでいる。そして、その話の中から新

たな活動の必要性や具体化が話題になる、という趣である。その話題の広さ、展開の早さは、女性ならではの生活感覚と言える。こういうやり方はきちんと活動について論理的に話したい人にはまどろこしさを感じさせるかも知れないが、地域の生活にとって肩ひじ張らないこうした気軽な、だが、しっかりと物事を前向きに進めていく「井戸端会議」はとても大切に思える。活動のために個人があるのではなく、個人があって活動が形づくられるという基本は、こうした自分の事情が口に出せる雰囲気にあるし、人々の心を前向きにさせる 自発的活動へ向かわせる 大きな要素になっていると言える。

ウ．自分の場を見つける

簡さんは、企画・渉外を主に担っている。簡さんと話すと、すごいエネルギーとバイタリティを感じる。さまざまな人々とのつながりの広さ深さを感じる。よく動く人である。「これ」と的が絞られれば、実現に向けて積極的に動く。現実から出発した考えだから、具体的である。このことは、簡さんに限ったことではなく、「キピタスの会」の人々に共通に言える。生活感覚の中から問題を発見し、自分のできることを見つけ、個々人の責任で協働しながら活動を継続する。その中で生まれる課題をのりこえる力も培われていくのだろう。

リーダーというのは、高みに立って指導をしようとする人ではなく、その人の動き 言葉や行動 を通して、他の人々の考えや行動に影響を与え、活動の継続や発展に力になる人のことではないだろうか。「キピタスの会」の人々は、自分たちはささやかなことをしているだけだと言うが、その「ささやかなこと」が、連なり継続され、地域の大きな力になっていると言える。

副会長の渡辺淑子さんは、活動が長続きする理由を、自分ができるところを探し自分の場を見つけることだという。「自分の場」とは、やることに楽しみを見いだせる場であり、大変さをのりこえられる場である。渡辺さんは、視覚障害児のための触って見る布の絵本づくりを中心に活動され、他の障害児にかかわる活動グループなどに絵本づくりの講師として招かれている。こうした活動を通じて培われた力をグループ間で伝え合っていくことは、活動全体の本当の活性化につながり、更に多くのリーダーが育つ契機ともなるのである。

自分の場を見つけ、自分の責任で動き、複数の人々が協力して活動を長く継続

するという事は、人間関係に配慮し活動の活性化を図る多くのリーダーがいるということである。

エ．学習の大切さ

「キビタスの会」は、1975年の横浜市鶴見区の社会教育講座「鶴見区婦人教養セミナー」での出会いがきっかけで生まれた。横浜市の委託方式による講座は、地域の人々が学習の企画・運営を自主的に行うものであるが、このときに運営委員として企画・運営を行った人々を中心に発足した。

このセミナーのテーマは「教育と福祉」であり、参加者の中にダウン症児をもつ人がいたことから、障害児の福祉に取り組むことになった。障害児の送迎や自主訓練会のボランティアなど、援助を求める声に応じて活動を始める。そうする中で、ある一人暮らしの老人の「寝床にアリいっぱい事件」が契機となって、老人問題へと活動が広がった。この事件から、一人暮らしの老人が人々とのつきあいがなくなるにつれ、生活に対しても興味を失い、人間同士のつながりが希薄になりがちであることを知る。そして、半年かけて、老人の心理や現状について学んだり、或いは老人給食の見学会、保健所栄養士を交えての学習会などを行い、1977年10月に「老人給食会」が始まる。「キビタスの会」の老人給食は、そんなところから、人間関係を大切にしたい活動で、病気になれば、掃除・食事・買物などの助力、入院した方へのお見舞い、家族などへの配慮などと、きめ細かいもの



となっている。人間関係を大切に
するということは「キビタスの
会」の基本姿勢とも言える。サー
ビスの受け手と担い手が出会い、
語り、時間を共有していく中で活
動は「義務」でなくなるのではな
いか。

給食を配達していた老人の中で
「キビタスの家」へ出向いて来る
人が増えたことや、「給食会」の
後も老人たちがなかなか去り難く
話しこんでしまうということはそ
んな暖かい人間関係を求めている
ことと思われる。

「教育と福祉」の学習から「キ
ビタスの会」が発足し、福祉のボ
ランティア活動へつながり、活動
を通して見えてきた課題を学習す
ることによって、活動が広がった
り新たな活動が具体化されたりし
てきた。学習と活動が相互に作用
しあい、人々とのかかわりや社会
を見る眼を拓けさせてきた。「キ
ビタスの会」の活動と学習が、個
人の生活実感に即した身の丈に合
った形で行われてきたことも、学
習と活動の相互作用を高めてきた
と言える。

【キビタスの人々の学び】

1975年9月	鶴見婦人教養セミナー（各4回）
11月	「教育と福祉」、「人と社会」
1977年2月	福祉講座（2回）
9月	「子どもの心のしくみ」他
1978年10月	実践講座
1979年3月	「家庭看護法」老人看護他（12回） 「老人の体と心について」他（3回）
1978年11月	学習講座（3回）
12月	「婦人の社会参加 一母の自立・子の自立」他
1979年4月	学習講座（3回）
5月	「老人の心と身体」他
1980年5月	成人教育学級（5回）
12月	「福祉社会建設に果たす市民の 役割とは」
1980年9月	老人問題シンポジウム（2回）
2月	「高令化社会の到来と婦人の ライフサイクルの変化」他
1980年11月	つまみ生涯教育セミナー（3回）
1981年2月	「シルクロードを旅して」他
1982年3月	ボランティア講座
12月	「働いて・生きる女性をめぐる」
1983年7月	生涯教育学級（5回）
10月	「くらしの見直し」
1984年2月	婦人のつどい（2回）
1985年11月	生涯教育講座（3回）
1986年1月	「住みよい街づくりをめざして 地域福祉とは」

(注)自主企画及び企画・運営に参加したものを主に
上げた。キビタス会員が別の活動を通じて参加し
たものもある。鶴見区での学習・文化・福祉に関
することなど、キビタスの人々は様々にかかわり
をもっている。

オ．資金、そして拠点

「キビタスの会」の活動の大きな特徴は、拠点づくりと資金づくりである。活動が継続し定着するためには活動しやすいことが大切であると考え、そのために設立当初から映画会やチャリティコンサートなどによって、活動や拠点のための資金づくりをすすめてきた。「わかめ文庫」を通じて地域に根をはっていたので、これらの集いには多くの善意が寄せられ、文庫で育った若い人々のボランティアなど、たくさんの“キビタス応援団”ともいべき人々が活躍してくれる。また、



活動や集会を通し新たな協力者も現れた。横浜大通り公園で行われている“さわやかバザール”も会社社長の渡辺憲正さんからの協力の申出がきっかけではじまった。大きなイベントでもあり、開催にこぎつけるまで大変な苦勞をのりこえ実現させたそうである。こ

のイベントは、1986年までに9回行い、「キビタスの会」の大きな資金源となっている。また、このバザールは、多くの障害者団体などとの出会いの場ともなっている。「キビタスの会」では、当初から会の活動については、会員は身体と時間を奉仕し、会が実費を負担するという方式をとり、ボランティアをするために経済的な負担がかかるということのないように配慮している。資金づくりによって会員は動きやすくなり、会としての活動の拡がりや拠点づくりなども実現させてきたと言える。

「キビタスの会」は、初めは簡さんの自宅を会合や老人給食づくりの場としていた。しかし、「給食会」に出向いてくる老人の増加や、障害児と健常児との統合保育の場であり自主訓練会である「エンゼルの会」の訓練の場を確保するという意味もあって、拠点づくりが計画され、土地を提供してくれる人、支払いは後

でいいからと建築を申し出てくれる人など大勢の協力が得られ、1979年12月にプレハブ2階建、40坪の「キビタスの家」が生まれた。この拠点は、会の活動だけでなく、地域の人々も利用できるように配慮されている。

その後も、鶴見区内の養護学校の卒業生のための作業所づくりや、障害者の人々の作業所「ふれあいの家」建設にも簡さんを中心に力を尽くし、特別養護老人ホームづくりも実現させてしまう。特別養護老人ホームは地元医師会との協力で作られ、建設場所は「キビタスの家」の場所であったため、「キビタスの家」は近所のマンションに移転した。

「キビタスの家」は、さまざまな活動のいわば港である。月1回の定例会が、出港していた船の戻る目安と言えるだろうか。つもる話しを伝え合う場となったり、提案を出したり、おしゃべりをしているうちに、自然と次の活動が具体的にになり、やる人が名乗りをあげるという形で、自分たちの身の丈にあった活動につながる場となっている。定例会だけでなく必要なときはいつでも集まれる場として、拠点は重要な場である。

しかし一方、特別養護老人ホームは施設規模が大きいこと、或いは運営において制度的な制約もあり、地域の人々がつくった施設という意味での特徴があまり出ていないことは残念である。施設の性格や基準などから難しいことなのかも知れないが、地域の人々が柔軟にかかわれるような面が拡大されることが望まれる。

カ．行政とのかかわり

「わかめ文庫」の拠点として、横浜市の市電払い下げの際、粘り強く交渉し、ついに「市電図書館」をつくることのできたときから、「キビタスの会」の人々は、活動の中で行政とかかわりを持っている。「キビタスの会」の人々は、市民としてやるべきことと行政の責任領域とを具体的に提示しながら行政に対応してきた。例えば、障害児のための作業所建設などでも、障害児の親たちと共に、作業所建設に向けて資金集めや土地探しなど、建設のために必要な要件を整えて、行政に対して援助を求めるというやり方である。言葉で言うのは簡単だが、身体を使い、知恵を出し合い、多くの人に声をかけても成果はほんの少しというのが、こういう活動の常なので、「キビタスの会」の粘り強さと、共感する人々を生んでいく活動のありようによって実現してきたのだと思う。

「キビタスの会」に対する行政側の対応は、初めのうちは、「キビタスの会」の人々が何のために来ているか分からないという状況にあったが、「キビタスの会」として必要と思えることは行政に伝えていき、必要な援助を求めることを続けてきたという。そして、その中で行政ではできないこと、市民たちがやった方がよいことも見えるようになったという。例えば、老人給食を始める際の行政の対応は、鶴見区全域を対象としないならやらない方がよい、不公平になってしまう、というもので、「キビタスの会」の活動に否定的であった。市民感覚では、ある地域でやったことが他の地域に波及していけばよい、と考えられることが、行政ではなかなか認められないという。老人給食について、行政は公平性という行政の観点から対応したが、「キビタスの会」の活動は、この対応に対して別の在り方を示しているといえないだろうか。食べることに意欲がなく、人ともかわからず、暮らしが荒れていく人の心への配慮を、市民たちが給食サービスという形で行おうとする意味は大きいと思う。「キビタスの会」の動きは老人給食にとどまらず、特別養護老人ホームづくりまで視野を拡げ、実現させてしまった。

市民の発想は豊かである。行政は、市民に学ぶべきである。こうした市民の力、活動を評価し、積極的に支援し、更に拡がるよう考えていくべきであり、行政自身が画一的でない、必要に応じた対応を行っていく柔軟性を持つべきである。

「キビタスの会」の人々は、行政に携わる人に対し、次のように望んでいる。

市民の声をきく耳をもつ。判断すべきところは判断する。市民に迎合するのではなく、必要なことはきちんと言う。広い視野で全体像が見えるよう、ボランティアなど市民活動をやった方がよい。

キ．地域とのかかわり

「キビタスの会」は、学習活動を通じて個人個人が結びつく形ででき、熱意をもって福祉豊かなまちづくりと取り組んだが、最初のうちは、地域の自治会などからの反発も大きかった。しかし、粘り強く福祉に関わる活動の必要性を実践を通して示し、かつ、反発している人々とともに動くときには大変な部分を受け持ってやりきることで、周りを納得させてきたと言える。例えば、横浜市が1974年に提唱した「福祉の風土づくり」運動において、「キビタスの会」は鶴見区での委員会に参加した。その際、福祉の心が根づくためには広報が大切であると考え、

また、委員自身が具体的に動くために新聞づくりを提案し、その事務局を担った。この新聞づくりを通して、動く楽しみ、つくる楽しみを知り「キビタスの会」の活動を理解してくれるようになった委員もいるという。キビタスの名称の由来でもある「市民のコミュニティ」づくりは、このような人まかせにしないことが基本であるだろう。

また「老人給食会」を始める際には、地区民生委員と連絡をとるなど、地域のさまざまな力を寄せる配慮をしている。「キビタスの会」は、必要によって動き、他の人に対して押しつけがましくない。だから反発していた人が、ある日、活動費を寄付してくれるなどということも起こり得るのだろう。その話をするとき、簡さんたちは、心から素直に喜んでいる。そんな気持の伸びやかさが、地域の人々に少しずつ伝わっているのだろう。

ク．地域を構想する

簡さんは今、ボランティアセンターづくりを構想している。地域の人々からのSOSを受信しボランティアへとつなげるセンター、SOSの内容とその状況を把握し、どういうボランティアがどうかかわりをするのがベターかを判断する、つなぎ役となれるボランティアセンターである。また、文化の面でも地域の人々が共有し、伝え合う場を設定（例えば、在日朝鮮人の方に講師になってもらい、言葉だけの講座にとどまらない朝鮮語講座など）するセンターである。人々がお互いのもてる力を発揮し合い、地域の人々の福祉や文化が豊かになるようなセンターである。

地域の文庫活動という、子供たちの心の豊かさを求める活動　いわば文化活動から始まった「キビタスの会」は、障害児と健常児との統合保育、障害をもつ人々や老人が地域の人々と豊かな人間関係をもっていきいきと生きるための福祉活動、そして人々は豊かな文化にふれた方が心豊かに生きられる、暖かい心もそういうところから生まれるという考えから、音楽や詩などの文化活動まで幅広い活動を行っている。

そういう中から、人々が豊かに生きる地域づくりに向け、福祉・文化・学習（教育）を統合した形で、ボランティアセンター構想があると思う。地域の人々が自らの力を地域に還元し、伝え合い、人々のつながりがゆるやかに広がって

いったならば、また、自らの意志と責任で協働していくことが広がっていったならば、人々はずいぶん楽に生き合える関係をつくっていけないのではないのだろうか。

「キビタスの会」は、この10年の活動を通じ、子供たちや家族の生き方・考え方に影響を与え、地域の人々にも多くの影響を与えている。10年前、誰があ場所に「キビタスの家」が建ち、更に特別養護老人ホームに変身することを予想しただろうか。暖かい、誠意のある行動は、人々の心を動かすものであることを実感する。「キビタスの会」の人々に会っていると、気のいい、なつかしい、頼りがいのある「おばさんたち」（敬意をこめて）と話す居心地のよさを感じ、つい長居してしまう。「キビタスの会」は、そういう集まりである。



総合保育を行う
「エンゼルの会」



(3) 展望

「キビタスの会」 今年で10周年を迎えた。さまざまな試行錯誤があった。しかし、大事なのは一人ひとりの心であった。たがいに助け合い、その心を何倍にも表現する仕組みとして「キビタスの会」があった。

5周年目の会報に、中村喜久栄さんが次のように書いている。ちょうどプレハブ2階建の「キビタスの家」が完成したころのことである。

自主ボランティアグループ「キビタスの会」には形がないのである。個の集まりであるから、会をみなで支えているが、会の力に頼ったり、すがったりできない。活動の状態や内容により、丸くなったり、三角になったりする。(中略)いつも行動する中で、何を優先させていくか、時間も人手もない。役割の分担もない。誰も教えてくれない。教えてもらえるものでもない。自分でカベにぶつかり、傷つき、方向づけ、判断していく。(中略)

過渡期にあった会の実態である。この動きの不規則な中で、福祉の心を、自分を見失いかけた仲間が多いと思う。

私自身そうであった。先頭を走った人は、外圧を真正面に受けながらも、目的に向かって必死であった。ともに走った人も、内部批判を受けた。引っぱられた人も、何がなんだかわからず、とにかくついていった人も、ともに、自分との戦いであったと思う。

被害者意識が先行するのも仕方のないことかもしれない。しかし、「誰の所為」ではなく、「私の責任」と考えたい。

実践活動のすさまじさと確かさを知った仲間である。だからこそ、これから安定期に入るであろう会にとって、みんなで話し合い、誰もがかわれる運営に、期待がもてるのではなかろうか。

さらに5年を経た現在、「キビタスの会」は自然体だ。とてもおだやかな川面を眺めているような気がする。一人ひとりに静かな自信が感じられる。しかし、水の奥底には急激な流れをひめているのかもしれない。

これまでに培った経験をもとに、より確かな実践を積み重ねていくことだろう。

そして、より地域のコーディネーター的な役割を求められるようになるだろう。そのとき「キビタスの会」は、どのような会になっているだろう。

しかし、大事なものは“キビタスの心”である。



キビタス会の人々

最後に、簡会長の言葉を引用しよう。

ボランティアには交代のときがある。ちょうどタンポポの胞子が飛び散り着地したところに芽が吹くように、会員一人ひとりが新しい感覚で新たな出発をするのです。それは「キビタスの会」を引き継ぐのではなく、あくまでも新しい誕生と言えるでしょう。そのとき私は実践者から一番困難であるところの“ともしび”の火つけ役として、よき経験者として生きていきたいのです。それが私のやすらぎなのです。

「茅ヶ崎市立小和田公民館」

自 分 育 ち

(1) 地球がまるごと見えてきた！

「地球がまるごと見えてきた！」という本が昨年の夏（1985年8月）に刊行され、その表紙絵となった版画と、ちょっと変わった標題が印象的であった。

この本は、6年前の1980年5月に茅ヶ崎市に初めてできた市立小和田公民館に学ぶ人たちが、その学習を発展させた「茅ヶ崎常民学舎」の編によるもので、ここで学ぶ市民たちのうちの26人の“自分史”を綴ったものである。「あとがき」から言葉をひろうことで、この本にこめられたものを伝えることができるだろう。

みんなで書きはじめて二年あまりの歳月が経ちました。書いてはなおし、また書いての日々を重ねて、いま、ようやく一冊のかたちになります。（中略）本を編みあげて思うことは、私たちは、本当に多くの人たちに支えられながら生きているんだな、ということです。そしてまた、だれにも今日まで生きてきた歴史があり、ことばでは言いつくせないものを、心の中にかかえているのではないかということです。（中略）公民館が縁となって茅ヶ崎にひろがっている学びは、暮らしの足元をみつめ続けています。地球の中の、たったひとつの点でしかないひとりひとりの人間であっても、その暮らしの足元を深くみつめていくと、そこに、地球がまるごと見えてきた私たちでした。（中略）どこの街にもいる、ごく普通の生活をしている私たちが、学び、仲間をつくる、そして共感のもてる社会をつくっていくのは、可能なことでなければなりません。そこには、どんな障害があったとしても、……………

今、子供たちの教育の荒廃について盛んに論議され、どうやらその問題の所在は、病んだ大人たちの社会にこそあるようだとされている。この社会を侵す病は、最も力の弱い老人や障害者、そして子供たちの所へと襲ってきているのではないだろうか。

私たち大人の社会こそなんとかしなければいけないと思い悩む今、この本を作った、どこの街にもいるごく普通の人たちに、そこにどんな障害があっても仲間たちと共感の持てる社会を作っていかなければいけないという思いを实らせた学習とはどのようなものであったのだろうか。暮らしの足元をみつめていった学習から「地球がまるごと見えてきた！」とはどのようなことであったのだろうか。それを追うことで、私たちは、子供たちが豊かに育っていく地域の新しい担い手たちの姿を、本当の意味での豊かな地域社会を創造する市民たちの姿を見ることができると思う。



小和田公民館で今も書き続けられる文集

(2) 学習する市民

小和田公民館は、茅ヶ崎市の第一号公民館として1980年に設置されているが、その背景には、学習する市民たちによる「公民館づくり」運動があった。この運動のきっかけとなったのは、子供連れでも学びたいという市民たちの「思い」であり、その「思い」がひとつの結集したエネルギーとなりながら、市民学習グループ「公民館について勉強する会」、さらに「公民館づくり」運動へと発展しそれを実現させていった。

ア．小和田公民館のはじまり

公民館がないころの茅ヶ崎市では、自治会館や農協などを会場に社会教育課の事業が展開されていた。1971年には、委託形式の地域成人学級(注1)が開始され、その中に「あしかび学級」などがあった。

「あしかび学級」はP T Aのサークルから生まれた郷土史研究グループで、茅ヶ崎を知らない新住民が、茅ヶ崎について知り子供に話せるようになりたいとの思いから始められていた。この「あしかび学級」の担当者が、後に小和田公民館の職員となる鈴木敏治さんであった。社会教育を一生の仕事にしたいと考えていた社会教育課職員の鈴木さんにとって、「あしかび」との出会いは、いわば初めての仕事であり、ここから市民とのつながりも生まれ、学習したい人を援助していく中で、いくつかの学習グループが生まれていった。これらは、後の市民学習グループの基礎になり、結果的には「公民館づくり」運動の原動力にもなっていく。

また、そのころ、市内各地に家庭文庫や地域文庫も生まれていた。地域文庫活動としてひしめま文庫を発足(1974年)させた西山正子さんらが市の社会教育課主催の市民教養講座に参加するようになり「公民館づくり」運動へと大きく動き出していくことになった。

公民館づくり運動のきっかけ

「公民館づくり」運動のきっかけとなったのは、「児童文化の現状を探る」(1975年1月～3月)という市民教養講座に子供連れで参加した西山さんが、保育しながら受講できる講座に関心を持ったことであった。

この講座の最終日に、茅ヶ崎には公民館がないという話が社会教育係長からあり、それを受けて参加者のひとり、渡辺保子さんが「公民館について勉強しましょう」と、講座通信「ごろべえ」で呼びかけている。この時、西山さんら多くの参加者は、自治会館と同じだと思っていたため、公民館自体にはあまり興味を示さなかった。

ところが、次の市民教養講座「家庭教育」(1975年5月～9月)が、西山さんらの文庫がある菱沼自治会館で開催され、文庫の仲間が大勢参加し、小さい子供

連れ参加も10人くらいあって、保育についてなんとかしなくてはと動きだしたのである。市にお願いすれば保育もやってくれるのではと子供をおんぶしながら、社会教育課に出かけて行くが、「他市は、公民館があって、その中に保育室があるからできる。茅ヶ崎市には、公民館がないからできない」と言われる。「じゃあ公民館があればできるんですね（子供連れでも学ぶことが可能になる）」との思いから、公民館をつくってもらいましょうと、要望書をつくり1400余人の署名を集めて、市長と教育長に持って行くが、スムーズには実現しなかった。

これまでも公民館建設の請願や陳情は1960年、1963年、1973年に出されているが建設にまでは至っていなかった。

公民館について勉強する会

西山さんらは、行政の厚い壁に挑むには継続的な運動が必要であり、まず公民館について勉強しなければと「公民館について勉強する会」（1975年11月4日）をつくり市民学習グループに登録したのだった。市民学習グループとは、地域成人学級を発展させた形で、市の社会教育課の市民学習グループ育成委託事業(注2)として1975年に開始されたものである。

「公民館について勉強する会」には、子ども会、親子映画会、子ども劇場、母親クラブ、PTA、文庫、消費者運動、自然保護運動などさまざまな活動をしている人々が集まってきた。

「公民館について勉強する会」は毎週火曜日に開かれ1983年3月まで8年間続いた。そのなかで職員もいっしょに学んでいった。この会員のひとりであった渡辺さんは、「私にとって、公民館をめぐる学習と運動はなによりの自己開放と自己確立の場であったと思っている」「すこし動いてみると、いろいろなことがみえてくる。そしてどんどん行動はひろがっていく」と述べている。職員の鈴木さんも、次のように語っている。「市民と職員が四つに組めることによって、お互いの成長があったと思うのです。公民館とは何かを学ぶことを通して、市民も私も、戦後社会の精神は何かを学んできたと思います。公民館こそが地域の民主主義を育てる場だということ学んだのです。」

一方、社会教育課の中でも1974年～1975年に独自の公民館についての調査はされていた。

公民館をつくる会

西山さんらは、「勉強をすすめていくと、公民館とはどういうものかが判ってきて、勉強だけではダメだ、行政の方に公民館はこうあるべきだということを言っていかなければいけない」と、学習に裏づけられた運動体として「茅ヶ崎市に公民館をつくる会」（1976年4月）を発足させた。

そのころ、子供会などからも公民館建設の陳情が出ていて、運動の輪はさらに広がっていった。会員には、市議員などもいて、いろいろな意見を聞きながら学習を深め、市長交渉を持つようになった。

「茅ヶ崎市に公民館をつくる会」の機関紙として「息吹き」が創刊され（1977年1月）、会の活動報告と公民館の宣伝をする一方、市内各地の教育文化活動を紹介しながら、諸々の感想など人々の声を伝えている。

「つくる会」は、学習の延長線上に運動があるとして、公民館づくり運動を展開していった。その機関紙「息吹き」は新しく茅ヶ崎に集った人々を結びつける役割をも果たしている。1985年4月で100号を数え、現在も毎月500～600部発行され、定期購読者は全国各地に及んでいる。

公民館づくり運動と学習活動の広がり

「茅ヶ崎市に公民館をつくる会」のメンバーは公民館づくり運動とともに、学習活動を続け、さまざまな活動を展開していった。その中でも次の三つの活動から、その広がりについて見てみよう。

・茅ヶ崎ふだん記グループ

「地域に残る言い伝えの教育力」（1977年）の講座では、「つくる会」のメンバーでもあり、「ふだん記」運動にも加わっていた上篠磨美さんが「自分史」づくりについて話している。「ふだん記」運動は、文章を書くことを通して生活を見直していこうという運動であり、これに共鳴した鈴木政子さんらは、「ふだん記茅ヶ崎グループ」を作った。そして、このグループは茅ヶ崎市だけにとどまらず全国にある「ふだん記」グループとつながっていった。その中で、鈴木政さんは今住んでいる「茅ヶ崎」をしだいに意識していっている。

・茅ヶ崎常民学舎



茅ヶ崎常民学舎の授業風景
“夜の7時に始まり、9時に終わる”

「地域・くらし・そして『私』の発見」(1978年)の講座では、遠山常民大学主宰講師の後藤総一郎さんが“自分を知り、地域を知り、日本を知ることは”というテーマで話しているが、自分史を書くことが人類史にまでつながる、という後藤さんの言葉に大感激した鈴木政子さんは、戦争体験を綴

った自分史『あの日夕焼け』を書く決心をしている。他にも、この言葉に感動した人は多かった。この講座をきっかけに「茅ヶ崎常民学舎」への動きがみられた。

一方、この講座では子供連れの参加者が中心になり、講座参加者からのカンパやボランティアに支えられて、自主保育が始められ、西山さんらはボランティアとして参加している。一回目の講座が終ったあと、どうい保育をしていくかが話し合われ、茅ヶ崎方式と言われる講座保育の芽生えがみられた。

・茅ヶ崎の保育を考える会

「子育てと『私』の自立を考える」(1979年)の講座では、“今、子育て最中、文庫がきっかけで様々な活動にひろがっている西山正子さんの体験発表”があった。子供連れの参加者が大勢あり、熱気につつまれた講座であったようだ。ここでは講座保育の是非について活発に論議されている。この講座の通信「かよい路」には「まず、子供連れのお母さんが交替で保育したら」といった意見のやりとりがあり、専任保育者と子供連れの母親が一回ずつ交替して保育にたずさわる中で、保育そのものを学習の一環として学んでいった。この講座から高月雅子さんらを中心に「茅ヶ崎の保育を考える会」(1979年7月)が生まれ、1980年から市民学習グループとして種々の学習を積み重ねていくのである。

高月さんは、茅ヶ崎市に1977年に移り住んでいるが、「人との出会いがほしくて講座に出ていったことから、公民館についての学習が始まりました」「保育を

通して、講座を通して、公民館づくり運動を通して、茅ヶ崎に点々と知り合いができて、困ったときに相談ができるようになったのは、大きな支えでした」と述べている。

小和田公民館の設置

今まで紹介してきたような学習や運動を続けて、その運動と行政の歩み寄りですら1980年に茅ヶ崎市第一号の小和田公民館がつくられた。その後、1982年に第二館（鶴嶺公民館）、1983年に第三館（松林公民館）、1985年に第四館（南湖公民館）がつくられていった。「市民が公民館を求める、それを行政が受け止める、そして実現していくというのは、民主主義の世の中では、ごく普通のことであるわけですから、職員としては、運動の中には入っていきませんでした。運動が孤立しないための配慮をし、運動の正当性をどこまでも主張してきました」と職員の鈴木さんはそのときの立場を述べている。「市民が運動を起してきたという以上に、行政の責任として公民館はつくらなければならない、ということも誰にたいしても発言していた」という職員としての鈴木さんの存在は、市民にとっても行政にとっても大きな力であったと思われる。

注（1）地域成人学級・・・1971年に茅ヶ崎市社会教育課では、これまで地域婦人会に委託していた2～3学級の委託婦人学級や、PTAに委託していた家庭教育学級を改め、やはり委託形式の地域成人学級を6学級始める。地域成人学級は、非公募、委託限度2年の限界もあり、1975年から始まる市民学習グループ育成委託事業に発展的に吸収されていく。

（2）市民学習グループ育成委託事業・・・1975年に始められ、市内在住の成人10名以上、年間20時間以上の継続的な学習グループに、3万円以内の委託費を出し、グループは「広報ちがさき」で年度毎に公募している。市民学習グループは1年毎の契約である。初年度（1975年）は10グループであったが、1983年度には35グループにまでなっている。

小和田公民館のできるまで（1960年～1980年）

年 月	運 動	活 動	学 習	行 政 の 事 業	こ と が ら
1960年と 1963年	茅ヶ崎市立公民館建設に 関する請願				
1970年		西山正子 家庭文庫 開始			鈴木敏治 社会教育課へ移動
1971年				地域成人学級 開始 あしかび・あらぐさ学級	鈴木担当
1973年	小出地区公民館の建設に関 する陳情（小出子ども会）			市民教養講座 開始	年間4講座 ひとり2講座担当 市の中心2つ 離れた所2つ
1974年		西山正子 地域文庫 開始			
1975年 1月～3月 5月 9月 10月	浜須賀地区に地域公民館の 早期建設を求める陳情		市民学習グループ 「児童文化」で応募 ↓ ↓ 「公民館について勉強す る会」に変更 (11月4日から毎火曜)	市民教養講座(1月～3月) ←「児童文化の現状をさぐる」 市民教養講座(5月) ←「家庭教育」	通信「ごろべえ」 公民館があれば保育可能と言われ る
1976年	茅ヶ崎市に公民館をつくる 会 発足	教育と文化を考える茅ヶ崎 市民の会 発足	←	教育問題講座(5～6月)「子 どもの教育とPTAを考える」	
1977年	公民館をつくる会 機関誌 「息吹き」発行 図書館づくり運動 開始	→茅ヶ崎文庫連絡会 結成	市民学習グループ 「茅ヶ崎・本の会」	市民教養講座 「地域に残る、いつたえ の教育力」	「自分史」づくりについての話が でる
1978年			市民学習グループ 「ふだん記」 ←	市民教養講座 「地域・暮らし、そして 「私」の発見」	講座準備会が設けられる 渡辺保子自分史を語る 自主保育 鈴木 社教主事発令
1979年		保育を考える会 発足 子どもの本を読む会 発足	茅ヶ崎自由大学 開設 (9月)	市民教養講座 「子育てと「私」の自立」	通信「かよい路」 自主保育 西山正子 自分史を語る
1980年				小和田公民館 設立	

イ．小和田公民館での学習活動

教育講座の特徴

学習する市民たちによる公民館づくり運動と行政の歩み寄りで、待望の茅ヶ崎市第一号小和田公民館ができた。その開館記念行事（1980年5月17日～5月25日）のテーマは“茅ヶ崎の公民館の歴史ここにはじまる”であった。活気に満ちたいろいろな行事の中で後藤総一郎さん（遠山常民大学主宰講師）の「地域の歴史を学ぶことのすすめ」の講演があり、ここから12人の世話人を中心に「茅ヶ崎常民学舎」発足（1981年1月）へと動き出す。また、「市民が公民館に期待するもの」という談話会もあり、「公民館について勉強する会」の渡辺保子さんらが体験発表をしている。

この時の教育講座「くらしを綴ることの歴史に学ぶ」（1980年5月29日～7月17日毎週木曜日）では 書くことによる「私」の成長を求めて と題し「茅ヶ崎ふだん記」グループの鈴木政子さんが話している。

以下簡単に教育講座のテーマと講座通信を紹介すると次のようになる。

	テーマ	講座通信
1980年	「くらしを綴ることの歴史に学ぶ」 書くことによる私の成長を求めて	「ひらく」
	「今、私が生きること、子供を育てること」	「はぐくみ」
1981年	「自分史のすすめ」 「地域でともに生きる」	「あゆみ」 「邑」
1982年	「サークル活動のすすめ」 仲間とともに生きること学ぶこと	「かかわり」
1983年	「家族 その新しい芽生えを考える」	「きずな」
1984年	「もう少しの自信をもちたい」 生活体験からの出発	「すすむ」
1985年	「人の一生」 かみしめてみよう歳を重ねる意味	「白い道」
1986年	「気になる子どもの現在、未来」	「未来」

これらの講座の特徴として、テーマ設定が地域や生活に根ざしていること、学習する市民たちの体験発表が組み込まれていること、必ず話し合いが含まれていること、講座が開かれる毎に「通信」を発行していることなどをあげることができる。

小和田公民館教育講座 テーマ「自分史のすすめ」(1981年)

日 時	学 習 内 容
5・26 (火)	自分史を綴る・その歴史と現状(1) 自分史を綴ることの大事さをその歴史の流れのなかでたどります。 講師は横山宏氏(国立教育研究所)
6・2 (火)	自分のことを語る 参加者が参加の動機を含めて自己紹介します。
6・9 (火)	自分史を綴る・その歴史と現状(2) 講師は横山宏氏です。
6・16 (火)	どうやって文を書き始めるか 自分史をどこから、どんなふうにかきはじめられるのか、その知恵を参加者みんなで出しあいます。
6・23 (火)	文を書く日頃の心がまえ・私の場合 簡潔な文をかき続け、時には新聞、雑誌に投稿している主婦西山正子さん(市内菱沼在住)の体験発表。
6・30 (火)	朗読・詩や俳句で綴る自分史 誰でも文が書ける。本が出せる。自分史をかこうという“ふだん記全国グループ”より出版されている『海は私の絵本』(海端俊子著)『ある紙芝居』(荒川すみ子著)を参加者有志で朗読してみます。
7・7 (火)	自分史がめざすもの 自分史は、今ブームといえます。単なるはやりで終らせないためには。
7・14 (火)	講師は後藤総一郎氏(明治大学ほか民衆の学問の場で講師)です。 この講座の発展をさぐる。 参加者で話しあいます。

市民とともに学ぶ職員

小和田公民館で学習活動が続けている人々は、その続けている理由を職員の人柄、姿勢に共感することが多いからだという。このことは、市民とともに学び行動する一面を指しているとも思われる。小和田公民館の教育講座に参加したことがあるが、職員も一番前で一緒に受講していたのが非常に印象的であった。講座の準備や役割等を事前に十分に準備し、あとは受講者とともに学ぶ姿勢をとっている。市民とともに学び行動することが小和田公民館の職員の大きな特徴であろう。

地域に根ざす

地域とかかわろうとする人々が少なくなっていると言われる今、徹底的に地域にかかわろうとする職員の鈴木さんの姿勢には一種のすごみさえ感じる。その姿勢と気迫が受講者を引きつけることになっているのかもしれない。「地域の中に、人との出会い、学ぶきっかけを多面的に、徹底的につくり続け、その結果生れる地域文化を公民館は大切に育てていきたい・・・地域を発見する、自分を発見する、仲間を発見するという掘りどころが公民館なのだ・・・発見するということは、感動的な出会いの中ではじめて可能で・・・発見してしまえば次にどういう地域を、自分を、仲間を、そして学びをつくっていったらよいか模索する必然的な発展がある・・・常にひとりひとりに内発するものに働きかけることを心がけてきた・・・」と鈴木さんは言う。

講座通信・・・書くことの必要性

地域や仲間や自分を発見する感動的な出会いを可能にするために、自己表現や感性を大切にすること、そのひとつの方法として”書く”ことをすすめてきている。



小和田公民館の大きな“力”講座通信

講座通信の形で受講者に講座の感想などを書いてもらうことが、1975年から手がけられて以来、毎回の講座で通信を出し続けている。通信をまとめて文集にしていく作業が参加者有志でなされ「ごろべえ」「ひろがり」「であい」「かよい路」「ひらく」「はぐくみ」「あゆ

み」「邑」「かかわり」「きずな」「すすむ」・・・などそれぞれ130～250ページ程の記録になっている。これらを読むと、地域の人々の学びあい育ちあいの広がりが非常によく伝わってくる。つまり、講座に参加していない人へも学びや体験を伝えていくことが、“書く”ことを通して可能であることが実感できるのである。

文集を通して、「公民館だより」を通して、全国各地との交流も生まれ、「第五回小和田公民館まつり」には、秋田県若美町の“なまはげ”が友情参加している。“地域に根ざせば地域を越える”ということが、“書く”ことを通して浮かびあがってきている。

書くことの条件づくり

通信の第1号は講座参加への動機を書いてもらうこと、全員にたとえ一行でもよいからと書くことをすすめている。結果的には8割以上の方が書くという。自己表現活動を大事にしたいという鈴木さんは、書くことも自己表現なのだから他と比較することなく自分らしさがどれだけ出せたかという観点からみていくこと、だからうまい、へたには関係ないという。鈴木さんの「完全でなくていい」「あなたがもっているそのままがいい」と言うことばで何かやってみようという気になった松本順子さんがいるが、ほとんどの人が同じような気持で一歩踏み出していくようである。

いつでもメモ用紙を用意しておき、思ったこと感じたこと疑問点などをその場で書くことを原則とし、原稿は通信を発行する程充分に集るといふ。鈴木さんは

書かない人がいてもいい、それもひとつの自己表現なのだから・・・と柔軟な姿勢を持ち合せている。

新人優先

新人優先というのは、はじめて講座に参加した人がひけめを感じないような雰囲気をつくり、まとめ文集をつくる世話人や講義や体験発表のテープおこし、保育の会の世話人などできるだけ新人にやってもらうこと、そして経験者は新人の手助けをすることをいう。どの講座でも参加者の7・8割は新人であり、新人が新人を生みだし学びあい育ちあいの裾野は広がる一方であるらしい。

市民ひとりひとりの社会教育

講座に魅力的なテーマがつくことで今まであきらめていた何人かは子供連れでも参加するかもしれないとの思いから「地域・暮らし・そして『私』の発見」（1978年）が開かれている。そこには、団体依存の社会教育観でなく市民一人ひとりのための社会教育観が見られる。社会教育は一人ひとりが幸せに生きるためのものであると鈴木さんは言う。多くの人があきらめながら人生を送っているが、あきらめるばかりでなく人はみなこの生きている事実のすばらしさをうたいあげていい。「心の開放」とか「学び」という事は、しがらみから無縁になっていくことではなく、しがらみの中でどうやって個を育てていくかが重要であり、しがらみの中での学習を通してはじめて「共同」が生れるのではないか、つまり生活の中で学ぶということは、生活から切り離して学ぶのではなく、生活をかかえながらなのだと言う。

実際に、この講座のテーマにひかれて子供連れで参加した高月さんは、生活をまるごとかかえた学びについて、次のように語っている。「学ぶということはその人ひとりだけで学ぶことではない、子供もいて、夫もいて日々の生活をして、そういう中で学ぶのだから自分をとりまくさまざまな関係から切り離して学ぶことはできない。」

大人の学び・・・体験を伝えあう

「公民館では、とりわけ大人たちが生活まるがかえの学びをつくって欲しいし、

地域を育てる学びにしたいって欲しい・・・学びあいをつくっていくというのは、仲間の体験に学ぶということではないか・・・」と、講座の中に必ず市民の体験発表が取り入れられている。

西山正子さんの「子育てと私の自立を考える」（1979年）、鈴木政子さんの「書くことによる私の成長をもとめて」（1980年）、佐伯昌子さんの「子育てしながら私も育ちたい」（1980年）「茅ヶ崎の保育を考える会」の人々の「子供が小さくても社会をもちたい」（1981年）、高月雅子さんの「仲間の中で育つ私」（1982年）・・・などその他いろいろな人々の体験発表が毎回の講座に取り入れられている。

また、一言でもよいからと参加者全員が、語りあう場が設けられている。

子供が育つ

講座の一方で、子供連れの参加を可能にしながら、保育にあたること自体を学習の一環としている。講座保育を専任保育者に任せるだけでなく母親も交替で保育にあたること、母親と子供を講義室と保育室に無理に引き離すことをせず、子供が自然に親と離れ他の子供たちといっしょに遊べるようになるのを待つ、というのが茅ヶ崎方式の講座保育であり「茅ヶ崎の保育を考える会」などと連携しながらの講座保育がすすめられている。「子供を育てるのは、とりあえずは親の生き方であるので、子供を保育室に入れるのも講座の部屋に入れるのも参加者しだいとする。学びの場に子供がいても認めてあげてほしい。」そして「わが小和田公民館は地域に子育ての力をよみがえらせる拠りどころになりたい」と鈴木さんは言う。

学びあい育ちあい・・・地域教育力

教育講座について「知識を提供する場でなく、生活そのものを問い確かな生き方を模索し、そういう人たちが連帯していく地域を築く」ことをめざし、その方法として自己表現活動のたいせつさをあげ、講座通信（書くこと）や、市民の体験発表としての形をとりながら、地域の中で学びあい育ちあいの輪が広がっている市民を小和田公民館では見ることができる。

市民学習グループの「公民館について勉強する会」や「茅ヶ崎の保育を考える

会」そして『あの日夕焼け』の本、「茅ヶ崎常民学舎」やその中から生まれた『地球がまるごと見えてきた!』の本など、これらは市民の学びあい育ちあいの広がりの結果である。そして、その結果からさらに広がりを生むという学習と活動のリンクがみられる。学習グループから市議員（西山正子さん）さえも生みだしている。その他いろいろな活動がなされている。これら小和田公民館での学びあい育ちあいの広がり、地域教育力としてとらえることができよう。

公民館には遊びも必要

小和田公民館では、教育講座だけでなくさまざまな活動の展開がある。そのひとつに「公民館には遊びも必要、どうせ遊ぶなら大きく遊んでみたい」とのことで「茅ヶ崎こわだ映画村」がある。映画そのもののおもしろさを共有していく場をつくること、ジャンルを固定化しない、地元をたいせつにするという主旨のもとで市内在住の映画評論家山根貞男さんらが講師となっている。

小和田公民館の事業の展開は、地域の生活のリズムに合っていること、公民館に縁のない人も引きつけること、初心者を対象（新人優先主義）とすることの中で、生き生きとした表情のある公民館をつくりだしている。

ウ．表情のある公民館

小和田公民館に行くと、ロビーにあるテーブルを囲んでいつも誰かしらが話し込んでいる。自治会のスポーツグループの資料づくりであったり、学習グループの打合せであったり、高校生らしき4～5人が話し合っていたりする。お年寄りがブラリと来てイスに腰掛けていることもある。ロビーから見える庭の砂場では小さな子供たちがはしゃいでいる。母親が学習をしている間、そこで遊んでいるのだ。ロビーの壁には、公民館で活動するサークルの絵であろうか、毎回違う絵が数枚かけられている。その絵を見るのも楽しい。掲示板には、サークル活動の紹介や案内のチラシがところせましとならび、棚には、講座のお知らせなども置かれ、自由に持っていけるようになっている。ロビーには畳コーナーもあって、気軽に座ってみたくなるような雰囲気があり、たくさんの人に利用されているらしいのがよくわかる。

公民館で学ぶ人たち

小和田公民館で学ぶ人たちを紹介しよう。

・自分育ち

公民館のロビーで、絵のサークルが終わったばかりの藁科裕子さんにお会いした。藁科さんが、小和田公民館にかかわりだしたのは、PTAの広報委員を担当することになり、公民館のミニコミ講座に参加したことから始まる。「公民館だより」の編集メンバーになったり、主催事業に参加したり、グループ「彩」（水彩画）、常民学舎、歩記の会、公民館をつくる会、「息吹き」・・・と活動範囲の輪は広がっている。現在もいろいろな活動をしている。なぜ、そんなに活動の輪が広がっていくのかとの質問に対し、職員が存在が大きいからと言う。このような答えは、小和田公民館で学習している人に共通したものであり、職員の在り方について考えるヒントを与えてくれそうである。

ところで、公民館で学習することについて、藁科さんは「カルチャーめぐりをしてきたが、今は違う。カルチャーセンターでは聞き放しであったが、ここでは、書くということがあり、次回には文集（通信）ができています。書くことで自分を見直し、高めていける。「公民館だより」の編集員として、取材し記事を書くために公民館に行くことが多くなったし、また活動範囲も広がった。その中に主催講座の参加もあったのです。物を知る楽しさ、つらさはあるがやはり見えた方がいい。政治は生活であると、今は責任を持っていきることができる。常民学舎での学びは、ストレートには入ってこないが、2～3年たつうちに新聞の記事につ



いつも盛りだくさんの“掲示板”

いて、生活の実感とのズレを感じるなど、新聞を見るとき構造的に物がみえるようになり、子供の世代まで考えるようになったが、学習すればするほど、気持ちの中で地域の人とのズレを感じることもある。やってあたりまえのことを、あたりまえでなくやりすぎなどとレッテルをはられたりもする。ほんとうの意味での民主主義が育っていないからだと思う。また、行政と話し合う機会があるが、単なるセレモニーになっている面があり、意見をいうことで浮き上がってしまうことがある。このような学習と活動のジレンマはいつも感じていることであるが、人のためにやっているのではなく、自分のためであることが基本であると気づき、他人の目が気にならなくなった。今、いろいろな人と共存していくことがテーマである」と言う。そして、長男（18歳）と学習したことを討論する中で、自分の学びをさらに深めたり、絵の仲間が藁科さんの活動に理解を示してきたのがうれしいと言う。

生活をまるごとかかえた学びについて、例えば、PTAをやらされたと思うのではなく、どうせやるなら積極的に楽しくやりながら、そのなかで主体的に学んでいくことが大事であると言う。藁科さんの話を聞いていると、何事にも前向きに、主体的に生き生きと活動しているのが、実によく伝わってくる。

藁科さんは、「茅ヶ崎に来て、自分にめざめ、地域にこだわり、人とかがわる楽しさを経験しています。それは、自分育ちではないかと思っています」と『地球がまるごと見えてきた！』に書いている。

そして、今、「受身の学びから、自分でテーマを持っての学びに入ることで、初めて自分のものになるのではないだろうか」と、常民学舎での学習活動の中で茅ヶ崎の職人の精神史をまとめてみたいと意気込んでいる。

・生活をまるごとかかえた学び

「『くらしを綴ることの歴史に学ぶ』（1980年5月）という案内を手にし茅ヶ崎で初めての公民館、初めての講座、小さい子供連れで参加したい人のために保育の部屋を用意します。その文字が目にくいこんできた」と言う松本順子さんは、この講座に参加したのだった。「その内容は今まで東京や横浜に出かけて受講したどの講座よりも私を揺り動かしたものとなった。・・・この講座によって、ありのままを書き続けるということが生活記録であり、自己改革の

原点にもなると知らされた時は、書くということを見直し思いだった」と述べ、「ここはカルチャーセンターとは違う。講座の重みというか、人との出会いが重なっていく、そうするとほかで自分が受けてきたものが、ものすごくむなしくうわつらにみえてきた。」と言う。そして、公民館での学びや出会いから、いろいろな活動にかかわりだしていく。

常民学舎でお会いした松本さんは、「子供を戦争に送りたくない」という思いのもとに、学習を深めていっているという。教養のためだけの学習については、子供が成長してからでもよいと思う。子育て真最中だからこそ、生活まるがかえ（夫、子供）の中で学習することの必要性があるのだと言う。仲間とともに、夜9時すぎまで学習していることもあるが、夫との関係や子供との関係の中で、それができる状況をつくりだしてきたと言う。それがいわゆる生活をまるごとかかえた学びの一面であろう。

また、常民学舎での学習場面では、ぐずっている子供をかかえながらも学習に参加している人がいたが、松本さんら受講者からは暖かく応援する雰囲気伝わってきた。まさに生活をまるごとかかえた学びあいの関係がみられた場面であった。

松本さんは今、公民館での学びを話しの通じにくい地域活動の場で、いかになしとげるかを実践中である。パートをやりながら、PTA活動、常民学舎、公民館での学習活動など楽しそうに忙しく飛び回っている。

・人と人が会う

鈴木政子さんは「地域に残る言い伝えの教育力」（1977年）の講座に参加したことから、「ふだん記茅ヶ崎グループ」の中心メンバーとして、公民館だよりの編集員として、常民学舎の世話人として公民館とのかかわりを深めていった。公民館での学びを、「学びあいが、助け合いというところまでいっている。茅ヶ崎は、講座が終るとさっと文集ができる。まとめたものを読んでもらうというのが力になっている。そして、書けたのは、信頼関係があるから。・・・仲間というのは私にとって非常に大切であり、かけがえのないもの。一人ではひろがらない、成長できなかったのではないか。もしちょっとでも伸びられたとしたら、仲間や家族があったからです。家族のなかで、ものすごく楽な状態で学んでいくという

ことは望んでいない。夫との切磋琢磨があったり、子どもとのゴチャゴチャがあったり、そうしながら学んでいくことが本当に学ぶことだと思っている。それが、より自分に身につくことだと思っている。そんなに易々と整えられたうえで学ぼうとしたってそれは自分のものではないんじゃないか」と言う。

「いっしょに学びはじめた仲間たちも、書き、読み、話し合い、学習範囲を広げていき、自分を変えていっているその姿に、私はよりいっそう励まされ、感動する。・・・『人と人とが会う』そして『理解しあう』ことのすばらしさを感じる。これが生きていく上での根源かもしれないと考えるようにもなった」と書いている。本屋のおかみさんとして生活しながら、『あの日夕焼け』などの本を書き続け、東京などあちこちの公民館で、自分史関係の講師としても活躍中である。

・ひろがり

「公民館づくり」運動から生れたと言える市会議員の西山正子さんは講座保育について「地域に帰っても、助けたり助け合ったり、預けたり預け合ったり、というのがあたりまえとなってすごく広がってきた。親にとっても、子育てを話し合えるからいい。また、子供が大きくなってもみんなが知っていてくれるというのは、子供もうれしいみたい。赤ちゃんの時から知っているので他人の感じがしない」と言う。

また、「他人の子供でも、どなったりするという関係ができてくる」と高月雅子さんは言っている。高月さんは、公民館での学びについて「無理がなかったということ、書くことで周りとかかわれたこと、人との輪が広がったこと、書くことで責任が持てたこと」をあげている。そして、「公民館がなかったとすると現在の自分はなかった」とさえ言っている。

(3) 自分史を書くこと

小和田公民館では“書く”ことを大切に考えている。書くことは一人ひとりの成長につながり、書いたものを講座の中で発表しあうことが、人々の学びあいを生むと考えている。そういう中で、何を書くかということが必然的に“自分史”を書くことに発展していったという。人々は“自分史”として何を書くのだろうか。1981年の小和田公民館の教育講座「自分史のすすめ」をまとめた文集の中か

ら、“小自分史”の題名のみを紹介する。

私の戦後史< 公報の届いた日 >

母への手紙

馬と大福餅

父の写真

結婚十年をふり返って

学徒動員の頃のこと

母からの手紙

変遷

「ともに生きる」こと

子に贈る歌

(文集「あゆみ」)

どの文章も400字詰め原稿用紙で10枚前後のもので、中には5枚程の短いものもある。題名だけを紹介したので、内容については想像してもらえないのだが、一つだけ説明を加えると、「馬と大福餅」は筆者が青春時代を送った軍隊での生活を書いたもので、毎日の手入れと世話が仕事であった軍馬と、空腹をうめるためにひそかに手に入れた大福餅の話からこの標題が採られている。ここに紹介したもの以外にも、その内容に戦争の体験を書いたものは多い。その他、父や母のこと、幼いころのことや若いころのこと、わが子のことなどとさまざまである。自分史とは思い出なのである。父や母のことを書きながらも、まさしく“私”の思い出であり、つまりは自分自身のことを書こうとしているのではないだろうか。“私”自身と対話しながら、自分を確かめ、誰かに向かってそんな自分を語ろうとしているのではないだろうか。何かを“書く”ということが自己を表現すること以外の何ものでもなかったのだろう、そんな風にも思えるのである。

自分史を書くことの一つの意義は、自己を表現することにこそまずあるのである。私たちは、自己を表現するすべも喜びもいつのまにか忘れてしまっていたのではないだろうか。同時に、ものを感じとり、私のものとして受け止める“感性”さえも失いつつあるのではないだろうか。それこそ、私たちにとってかけがえのないものであったはずなのに。

ここで鈴木敏治さんの言葉を借りよう。彼は自己表現をもつことについて次のように語り、小和田公民館では書くこと以外にも、版画や写真、そしてイラストと多様な方法でその実践を試みているという。

人間は、何かを表現したい気持でいっぱいなのではないか、それがにぶってしまっているのが今という時代ではないかとも考えています。だからかもしれませんが、自己表現をもちはじめた人たちは、確かに人間が変わったようにみがかれてみえます。何よりもよく感じるようになり、よく考え、ものごとをよくみるようになり、他人の立場を理解していくようになる、そんな変化がうまれているようです。

(『地球がまるごと見えてきた!』P.231)

自分史を書くことの意義は、自己を表現することの喜びのみにとまらず、現代に生きる私たちにとって、それ以外にも多くの意義をもっているようである。よく感じるようになり、よく考え、ものごとをよくみるようになったとき、人は思い出を語りながらも、歴史とその時代の社会に規定されざるをえなかった自分を、またその延長線上に現在の自分を発見することができるだろう。自分史を綴ることが、歴史をとらえかえし、自分の明日をより確かなものとする問いかけともすることができるだろう。現に今、自分史ブームとさえいわれる背景には、昭和という誰も経験したことのない激動の時代を、20世紀の終わりに生きるものとして、ふりかえり、その意味を明確にとらえなおし、何かの形で、自分たち自身のもので次代へ残しておきたいという思いがそこにはあるのではないだろうか。初めに紹介した“小自分史”の中に戦争のことを書いたものが多いのも、私たちの経験したこの大きな悲劇を、私たち一人ひとりの“思い出”としてけっして忘れることのないようにという願いが、未来へ向けて込められているのである。小和田公民館で書かれ、語られた自分史は、自分を見つめなおし、自己を表現することの喜びを見つけながら、さらには、仲間と体験を共有することで、かけがえのない私たち自身の自分史として地域の中に残されていくのだろう。その時、一人ひとりの抱えていたさまざまな問題が地域の課題として人々に自覚され、課題解決へ向けての大きな力ともなるのではないだろうか。

過去の体験としての歴史を、自分のものとして一人ひとりがとらえなおし、次の世代へと書き残していく。何よりも、現代に生きる私たち自身が決して流され

ることのないように、自分の感性で、時代を社会をしっかりと見つめ、明日をより確かなものとするために問い続ける。それが自分史を書くことの意義である。たとえどんなに短い自分史であっても、一人ひとりの自分史を仲間と共にいくつも書き続けていくことが、大きな意義となるのである。

(4) 公民館とその周辺

私たちは、これまで地域の公民館での学習と活動の様子を茅ヶ崎市立小和田公民館の事例から紹介してきた。この小和田公民館は、住民たち自身の手で生まれたものとも言え、また住民たちの手によって今日まで、地域の中に根ざした公民館として成長してきたとも言えるだろう。しかし、その一方では、同じように公民館の周りに住む人たちの中にも、公民館にかかわることのできない人たちや、無関心でいる人たちも大勢いることだろう。地域の中に公民館のない所さえもあるだろう。そんなことも含めて、私たちにとって公民館とは、どう考えられるものなのだろうか。

ところで、公民館に関することを定めている社会教育法の中では、その目的として、次のように書かれている。

公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。

(第5章 公民館 第20条(目的))

また、同法の第3条では、国及び地方公共団体の任務として、“すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するよう……”云々と述べているが、ここからは社会教育自体の目的を読むことができる。この二つの条文の中から、“実際生活に即する教育”の部分に注目しながら、少し考えてみよう。

ここで、小和田公民館の学習活動を振り返ってみたい。1980年の開館から現在まで、1年に1本から2本の割合で開催されている教育講座のテーマ(P43~44

参照)だけを追ってみてもわかるように、子供のこと家族のこと、生活の身近に直面している課題を取り上げながら、ただ単に実際生活に即する教育というものの以上のものを目指している。“生きる”ことの意味や、成長することの意味を、積極的につかもうとしている姿勢が強く感じられる。人々は、公民館での出会いを通して、自分を、仲間を、地域を発見しながら学んでいっている。鈴木さんの言葉をそのまま借りると、教育講座の目的も次のとおりであった。

大人が、人間として成長していく、発達していく、自分をみがき、表現し、本当に自立していくことを、事業の真正面にすえてみたいと思いました。あらゆる人たちが公民館とかかわれるようにしたいけれど、とにかくは、大人の成長を真正面にすえた事業として教育講座を考えました。

(前掲書 P.211)

社会教育施設としての地域の公民館の役割を、人との出会いや、自分の成長、生きることの意味を見つめなおすという、現代に生きる私たちにとって、基本的に重要なものとして意味づけようとするとき、今公民館について考えようとするならば、公民館にかかわれない人たちや無関心な人たちをさえも、その範囲に含んだ問題へとつながっていかざるを得ないのではないだろうか。

次に紹介するのは、鈴木さんが、小和田公民館の開館を目前に控えて、地域を歩き回っていたときの話である。

朝、それも通勤時間に国鉄茅ヶ崎駅に立ってみることにしました。すると、働き盛りの男たちを中心に、ものすごい量の人たちが、まるで電気掃除機にチリが吸い込まれるように改札口に吸収されていく、そんな状態を見たのです。それから南口駅前からバスに乗って公民館にむかうと、目につくのは、女(主婦)、年寄り、子どもたちなのです。昔から、弱い者の代名詞といわれてきた人たちです。市外に出て行く働き盛りの男たちのことも気になるけれど、まずは、昼間、町にいるこの人たちを、公民館活動の中心に置いてもいいの

ではないかと思いました。

(前掲書 P.208)

7月のある日の午後、小和田公民館のロビーで鈴木さんと話をしたことがあった。公民館事業の対象として、どうしてもっと、子供や青年を取り入れようとは思わないのかと質問したのだが、彼も以前、自分の家の庭に小さな小屋で、いつでも子供たちが遊びに来られる、本の置いてあるたまり場のようなものを作りたいと考えていたことがあったそうだ。しかし、あるとき、大人たちのことに気づくと、もう子供のことなどがまっぴらに思ってしまったという。毎日を追われるようにあくせくと送り、何かをあきらめてしまっているような顔の大人たちのことこそ真剣に考えなければいけないと。青年たちについては、本気で何かを求めて公民館にやって来たときには、いつでも手をさしのばすけれども、今の青年たちを見ていると、やはり何か甘えているような気がする、そんな話もしてくれた。話をしている、やはり子供のことは気にし続けていること、頭から現代の若者を否定しているのではないこともよく分かり、本当に人間の好きな人だなと感じたものである。

小和田公民館では、子供や青年たちのことを決して忘れていないわけではないが、今、最も心配しなければいけないのは大人たちのことではないかというのである。確かにそうなのだろうと思う。しかし、働き盛りの男たちに公民館へ足を向けさせることができるだろうか。また、日曜日でさえ夜の遅い電車で塾から帰ってくる“忙しい子供”たちを、公民館は呼び入れることができるだろうか。青年という、彼等や彼女等に向けて、地域の公民館はどんな信号を寄せられるのだろうか。

小和田公民館に足を運ぶ人たちの多くは、女たちであり、主婦たちである。カルチャーセンターへ通うのと同じ気持で来る人もいるであろうし、切実に何かを求めてやってくる人もいるだろう。そんなさまざまな動機から始められた学習が、どんな風に実のっていったかは、これまでに見てきたとおりであった。彼女たちがそのように学習を通して成長していった理由は何だったろうか。鈴木さんも言うように、地域に残された彼女たちは弱い存在でもあり、まだまだ男性中心の社会にあって、何らかの疎外のうちにあったのだろうか。結婚して会社をやめ、家の中だけで時間を過ごす毎日、自分だけが社会から取り残されていくような不

安にもさらされるだろう。核家族の家庭の中で、子供と二人きりの生活が育児ノイローゼをうむこともあれば、古い家のしがらみの中で、嫁と姑の関係で悩むこともある。しかし、彼女たちが、一歩外へ踏み出し、学習をつうじて、自分を見つめなおし、社会を見つめる視軸をしっかりと持つようになったとき、女という位置からこそ見えてくる社会の欠点や歪みがあったのではないだろうか。子供を産み、子供の感じる傷みを自分の体を感じることでできる母親だからこそ、わが子を戦場へなど行かせてはならないと、その感性でしっかりと言い切ることができ、子供たちの未来へ引き継ぐべきものとして、今の社会を考え、疑問や警報を発しながら、自ら活動しようとするのではないだろうか。

生活の本物の豊かさを培う文化、それを地域社会の中で創造していくための源であろうとする小和田公民館にとっても、そこで学ぶ女たちにとっても、男たちの参加が今もとめられているのではないだろうか。なぜならば、本物の豊かさを追うことは、女性の感性だけに任された課題ではないからだ。公民館へ通う主婦たちを、カルチャーセンター通いと同じに見る男性も多いだろう。実際、おけいこごとの場を提供しているだけの公民館や、事業の切り売りをしている公民館もたくさんあるようだ。しかし一方で、最初から楽な状態で学ぼうとすることなど望んでいない、夫との摩擦や子供とのゴチャゴチャの中で学んでいくことが本当に学ぶことだと考えている主婦たちの、その学習への姿勢や生活への問いかけの意味を、男たちはもっと知るべきではないだろうか。男たちが、働くということの意味を問い直し、人間としての本当のゆとりを取り戻そうとしていくことが求められているのではないだろうか。

小和田公民館のすぐ前に、松浪小学校という、まだ木造部分の残る古い小学校がある。午後3時ごろになると、ランドセルを背負った小学生たちが何人もやって来る。図書コーナーの本が目当てであったり、ただ寄り道の習慣になっていたりと、なんとなくたまり場になっているのだろうか。また、保育室の中や、庭で遊ぶ幼児たちのいることもあれば、母親に連れられて来て、ロビーや階段をかける子供たちもいたり、そのガヤガヤとした雰囲気は、小和田公民館の活気をかもし出す一部にもなっているようである。地域の中に、老人や子供たちが勉強したり、何かに真剣に取り組んでいる姿を横目で見ながら遊んだり、たむろしたりする場所があることは、いままで学校の中だけに預けられていた教育を、もっと広

い外へと広げていくことができるだろう。残念なことに、小和田公民館で青年たちの姿を見かけることはほとんどなかった。たった一度、“赤貧チルドレン”というバンドグループが、講義室の隅で、ギターとドラムだけの3人で練習しているのを見学させてもらったことがあるが、設備もあまりなく、それよりも、もう少し多くの仲間たちが自然に集まってくる場所で、ワイワイガヤガヤとやっている方が彼等には似合っているような気もした。青年たちにとっては、公の施設として、地域の中に活動の場を設けることは、非常に難しいことなのかもしれない。これらの問題を認識しつつ、今の小和田公民館の事業について鈴木さんは次のようなことを話していた。

あまり無理をせず、とりあえずできるところからやっけて行こうと思っている。公民館へ通い続ける妻たちの姿を見ているうちに、男たちも少し変わるかも知れない。実際に、彼女たちを見る目が変わってきているようだ。そんなことによっても、公民館に実際に足を運ばない人たちへも、公民館は何らかの信号を送ることができると思う。

公民館の周囲にはいろいろな人たちがいる。地域の中の一つの施設に過ぎない公民館。しかし、この“公民館”というものにあえてこだわってみることで、自分たちの暮らす地域について考え、私たち自身の生を問い直すことができるだろう。男たちや青年たちも含めて子供から老人までがいて、互いに認め合いながら成長していける公民館であることが望ましいのだが、それは長い時間をかけて私たち自身が地域の中に育てていかなければいけないものである。



公民館に集まってくる大人たち、そして子供たち



「神奈川県横浜愛泉ホーム」

認めあい、支えあい



(1)なぜ愛泉ホームなのか

横浜市南区に1962年設立された神奈川県横浜愛泉ホーム（以下愛泉ホーム）は、隣保施設（セツルメントハウス）として地域に根ざした福祉活動を展開してきた。ここでは「ゆりかごから墓場まで」という言葉を実践するかのよう、乳幼児及び学童保育、青年のロックバンドグループ、障害者の作業訓練、働く婦人の学習会、老人の趣味の会などあらゆる年齢の人たちがさまざまな活動を展開している。そしてそれらが網の目のように関係し、影響しあっている。愛泉ホームの職員は自らの活動を「地域福祉力が高まるための援助」と称する

私たちは「地域教育力の再検討」を行うにあたり、こうした人々の活動と、その拠点である愛泉ホーム職員の実践に見られる地域福祉力（コミュニティ・ケア）

の高まりをみていくことにした。それは老人や障害者等、現代社会では生きていくにくいと言われる人たちが自分の居場所を持ち、いろいろな人とかかわりながら生きているこの愛泉ホームと中村の町の中には、私たちが求めている人々の姿を見ることができるとは違いないと思ったからである。

さらにもうひとつの理由としては、いま私たちにとって自分の中の弱い部分や見つめたくない部分、そして社会的に弱い立場にある人々のことをきちんと見つめる機会を持つことがとても大切なことなのではないかと考えるからである。それは言い換えれば「人間らしく生きる」ということを、弱い部分、見つめたくない部分に視点を当てて問い直してみるということである。

現代社会は都市化、産業化が進み、発展、成長の中により大きな価値を認め、衰退や停滞というマイナス部分を切り捨てていくといった傾向がある。そうした社会では、障害、貧困、老い、死などのように、今見つめなくてもすんでしまう問題はますます隅に追いやられ、覆い隠されてしまいかねない。

しかし“赤ん坊”として生まれ、“老人”として死んでいく私たちは、「人間の一生は重度心身障害児の状態が始まって、重症心身障害者の状態で終る」（『地域をたがやす』金坂直仁著）という言葉が語るとおり、人の手を借りなければ生きていられない存在なのであり、そう考えると障害も、老いも、死もけっして他人ごとではない。しかもそれははるか彼方にあるものとは限らない。

また私たち一人ひとりがそれらのことに直面している人の痛みに気づくことが、共に生きる社会を築くための第一歩になるのではないかとも思うのである。

この事例研究に際し私たちは愛泉ホームの様々な活動の中から、“老人”に視点を当て、特に「老人給食サービス活動とその広がり」について見ていくことにした。それは“老人”は社会的に弱い立場にある人であり、そして老いは誰もがやがて体験するものであるし、高齢化社会の到来が必至と言われる現代日本社会にあって、老人の生きていかれる地域づくりは、避けては通れない課題であろうと考えたからである。

私たちは老人とかかわり続ける活動の中から、人の痛みを自分のものとして生きる人々の自然な姿を見た。そして人が自分らしく生きながら支え合い、弱者が生きていかれる地域の住みやすさと楽しさをも見たのである。

(2)老人給食活動の始まり

五月晴れの日曜、昼下がり、愛泉ホームの講堂には、爽やかな汗と、ひとつのことを終えた充実感が満ち溢れていた。年に一度の老人給食の資金集めのためのバザーが、今終わったところだ。

「目標20万円のところ、今日の収益金は34万円を越えました。御苦労様でした」との発表に一齐に拍手が鳴り響く。

反省会の会場であるこの講堂には、中、高校生からお年寄りまで、愛泉ホームを利用して活動している人たち、中村地区に住み、このバザーの時だけお手伝いに来る人、遠くから来る大学生など約120人程の人々が集まっている。皆バザーのボランティアとして精一杯動き回った人たちだ。中には日ごろ愛泉ホームで訓練をしている障害を持った青年たちの顔も見える。丹精込めて仕上げた作品を他の人が認め、買ってくれたことが、この青年たちの明日への力に大きな弾みをつけているようだ。笑顔が輝いていた。

愛泉ホームを拠点とする老人給食サービス活動は、今年10周年を迎える。しかしその歴史は愛泉ホームがつくられた1962年にさかのぼるといえる。



当時の中村地区はドヤの密集したいわゆる「スラム街」の様相をし、そこで生活していたのは日雇い労働者をはじめとする低所得層の人々がほとんどであった。貧しい生活の中、その日その日を生きるのが精一杯で、子供を産んでもその子た

ちの教育やしつけには全く無関心な親も多く、子供たちは、毎日路上で遊ぶだけで、手や顔を洗うことさえ知らずにいたという。

“陽の当たらぬ場所に陽を当てる政策”を推進していた故内山岩太郎県知事はこうした状況を憂い「浮浪者や労働者などを風呂に無料で入れてきれいにし、その間に着ているものを全部無料で洗濯してあげ、さっぱりした気分で帰してやる」（『愛泉ホーム物語』）ための施設「愛泉ホーム」の設立を計画した。最初は大規模浴場を中心とした施設を予定していたが、浴場組合の反対など様々な障壁にぶつかったため計画を変更し、小さな浴場を持つ4階建の施設として1962年8月1日に産声を上げたのである。

開館当初のホームの目的は「生活に困っている人と共に生き、その生活の向上のために援助しよう」というもので、安く入れる浴場、洗濯設備、低価格の食堂、理髪店、売店などを備えた施設だった。そして最初に手掛けたことは「子供の面倒を見ること」と「親の教育」だったという。それは幼児グループを作り、その親たちとのつながりを持つという形で進められた。

幼児グループに来ていた子供たちは汚れた体を洗ってもらい、愛泉ホームの職員と一緒に遊んでいるうちに集団生活も体で覚え、手や顔を洗うことも自然に身につけていった。子供たちが変わっていくのを親の方が見習うことさえ多かったようである。この幼児グループは1973年に終止符を打ったのだが、その母親たちはその後も「友交会」という会をつくり、おしゃべりや旅行を楽しんでいた。

やがて5年が過ぎたころ、当時の愛泉ホーム職員が、「どうせ集まって楽しむなら、人の役に立つことをしながら楽しんだらどうか」と友交会のメンバーに持ち掛けた。そして相談の結果、母親たちなら誰でも何等かの形でかかわることのできる“食事づくり”を生かしていこうということになり、具体的には職員から提起された「一人暮らし老人のための給食サービス活動」が実施されることになったのである。

1980年の国勢調査によると、中村地区には201人の独居老人が生活している。その内65歳以上のお年寄りは2141人で、これは人口比11.1%になり、他の地区に比べるとかなり高い率（横浜市6.2%南区9.2%）である。

この地区の北西の境を為す中村川の向こう側には、日雇い労働者の多い町中区寿町がある。ドヤといわれる簡易宿泊所に寝泊まりしながら働いていた労働者た

ちは、現役を退き、静かに余生を送りたいと考えた時、中村地区に移ってくる人が多いという。住んでいる人の人柄も義理人情に厚く、食糧品も手をかけずに食べられる煮物、焼き物などが豊富で、しかも値段も手頃だ。それに寝間着のまま通りを歩いても、変人扱いするような町の目はない。身寄りのない老人にとってはとても住みやすい地域なのだ。そのためおのずと独居老人の数が増える。

こうした老人は中村地区内14カ所の簡易宿泊所などに住み、生活保護を受給しながら暮らしていることが多い。中村地区内非保護世帯462のうち、高齢者世帯は190（41.4%）にも昇り、40人の老人が現在寝たきりの生活をしている。独居老人たちの多くは生活や健康問題への不安をかかえながら、孤独で寂しい毎日を送っているのである。

愛泉ホームの職員はそんな地域の状態をとらえ、独居老人の生活を改善するひとつの方法として、給食サービスを考えていた。心のこもった手作りの料理を食べながら、老人同士や地域のひとたちとのつながりができれば、閉じこもりがち

中村の街

愛泉ホームのある中村地区は、前面を中村川が流れ、背後に山を背負っている。その中村川にかかる三吉橋の袂には、今でも横浜で唯一の芝居小屋、三吉演芸場が常設している。小さいけれど、川沿いの幟旗に吹く風に下町情緒を感じる光景だ。

川沿いにはいくつかのドヤ（簡易宿泊所）が並び、奥へ入ると狭い路地が縦横に延びている。路地に面して小さな家がぎっしりと並んでいるが、庭のある家などは見当たらず、塀のある家でさえ非常にめずらしい。隣との間は隙間もないほどピッタリくっついている。トタン張りの木造住宅が並ぶ中で、所々に新築して間もないと思われる白塗りの現代風な二階屋があるのを見ると、この街もこうやって少しずつ変わっていくのだろうと思う。

路上では、あまり車が進入してこないせいか、子供たちがキャッチボールをして遊んでいる。玄関先に丸椅子を出して、夕涼みをしているお年寄りも何人かいる。老人の多い街だと聞いていたが、なるほど、公園にも商店街にも道端にも老人がいる。公園で子供と老人が遊んでいる。道端でおばあちゃん同士がおしゃべりをして、傍らを自転車に乗った主婦たちが買物に行き交う。

商店街の店を覗いてみると、なかにはしゃれたブティックもあるが、食糧品を売る店が圧倒的に多く、しかも全体的に安いようだ。物価の安い街は所々にあるものだが、ここもそんな街のひとつなのだろう。そんな中でも目立つのは、出来合いの商品を、しかも比較的安く売る店が多いことだ。揚げたてのコロッケから天ぷら、焼き魚、煮もの……そのまますぐ食卓に並べられるものが、あちらの店でもこち

な独居老人の生活が少しでも開かれ、生活の中に楽しみやメリハリができるのではないかと考えたからだ。

しかし職員がどんなにすばらしいアイデアを持っていたとしても、地域福祉は住民相互の主體的なかわりあいの中で育まれていくものであるから、その担い手が現れない限り、それは絵に書いた餅に過ぎない。愛泉ホームの職員は、地域の人々と日常的な人間関係をつくり、お互いに信頼しあう中で、様々なアイデアを地域の人々に提示していった。

友交会のお母さんたちも愛泉ホームの職員を信頼していた。彼女たちは“老人給食サービス”というアイデアに、即座に賛同した。「子供のことでお世話になった私たちが、それを私たちのできる形でお返するのは当たり前」という発想がこの人たちの中に、ごく自然に息づいているからである。これを愛泉ホームの職員は「義理人情に厚く、助けあわなければ生きていけない下町の気風」という言葉で表す。こうして今年10周年を迎える老人給食会は動き出すのである。

らの店でも売られている。単身世帯が多いためだろうか。所得を増やすために働きに出ている主婦が多いためだろうか。どちらも理由のひとつに違いないが、街の人は「中村の街は食べ物大切に作るからね」と言う。

中村町1丁目から坂を登り、山の手へと歩いて行く。そこは坂の下の街とは全く違う様相をしていた。立派な門構えをした近代的な家が点在し、明らかに高級なイメージを持っている。

山の上から横浜の街を見渡すと、遠くに横浜駅西口の天理ビル、狩場の清掃工場の煙突が見える。晴れた日には池袋の高層ビルも見えるという。近くには、大学病院が大きな構えを見せ、その手前が中村の街だ。所々に学校やアパートなどの鉄筋コンクリート造りの建物や公園が点在する外は、ほとんどがトタン屋根の小さな家々をぎっしりと詰め込んだ街並である。街の中を歩くよりも上から見渡した方が密集している様子がよくわかる。ひとたび火事でも起これば、あっという間にこの街を燃やし尽くすのは簡単なことではないかと思われた。

山の手の高級住宅街をしばらく歩き、中村と反対側へほんの少し下りてみると、かつての火葬場の煙突が見えてくる。雑草が高々と生い茂る中に、突然、いつ建てたのかと思うほど古く、黒ずんだ木造の長屋が数棟現れた。一目で貧しさを感じさせた。小道を挟んで反対側には、今にも壊れそうな門構えの家が何軒か在る。住んでいる人がいるのだろうかと思いたくなるが、物干し場に生活の臭いがする。この地区にも、山を越えて愛泉ホームの老人給食会に参加しているお年寄りがいるという。その先に、米軍住宅の広大な緑の敷地が広がっているのが、なんと対照的だ。

(3)老人昼食会の現在

愛泉ホームは中村町のちょうど中程の3丁目に位置する。会に登録している老人たちは毎月第二、第四木曜日正午少し前になると、三々五々愛泉ホームの講堂に集まってくる。中には、小一時間かけて通ってくる人もいる。

受付は“田中さん”というメンバーのおじいさんがやってでている。田中さんは老人昼食会が始まったところからのメンバーで、5年程前から“お世話係”を引き受けている人である。会場の設営、受付、誕生日プレゼントの準備、プリントの配布等、昼食会当日の仕事だけでなく、休んだお年寄りへのプレゼントやプリント配りも引き受けている。病気がちで不安な生活を強いられている独居老人にとって、同じ仲間の訪問は心強く、うれしいものに違いない。

その田中さんが脳血栓で倒れ、入院した。だが田中さんによって受付を手伝おうとするお年寄りは出て来ない。1ヵ月程してまた顔を出した田中さんは顔色も悪く、フラフラしていた。それでもやはり受付の椅子に座り、みんなが食事を始めると、残り物を持ち帰るためのパックとビニール袋を配り始める。一緒に食事をしているボランティアが代わるからと言っても、田中さんはヨタヨタしながら会場の中を歩き続ける。それが田中さんらしさなのである。

世話好きな人はどこにでもいるものだが、時としてその行為は誤解を招いたり、その誤解が中傷を生むことさえある。田中さんもこの町の外では親切な行為が災いしたこともあると言う。しかしここでは、田中さんの自然に親切にできる面を素直に受け入れ、それを感謝する人間関係が可能になっている。しかし同時に田中さんの他者を思う行為が行き届き過ぎているために、他の人が“あそこまではできない”と思ってしまうのが現状なのかもしれない。老人の場合はなおさらだろう。

昼食会は始まると30分程で済んでしまう。そしてほとんどの人が黙々と食事をする。何人か話をしている人がいるが、まるで演説でもしているようで、その場を楽しむとか仲間と歓談するとかという雰囲気はあまり見られない。始めて参加したボランティアが気を



使って、懸命にお年寄りに話しかけても、心を開こうとする気配は無い。その目が“余計なことはするな”と語っているように拒絶している。

しかし、足が痛くて夕飯を作るのが億劫だからと、残り物を大事そうに詰めている人に対しては、自分が手をつけなかった物を差し出し“汚くないよ”と言葉少なに言っている光景もある。また中にはすごく明るい人もいる。そしてそんな人が耳の聞こえない人だったり、口の



きけない人だったりということを知って驚かされたりもする。自分の背負ってきた生活や歴史に、ズカズカと土足で入り込んでくれるなというかたくなさと同時に、心を開きたい、話せる相手が欲しいという願いや、同じような人生の中にある他者への思いやりが伝わってくる。

そんなお年寄りでも愛泉ホームの職員や友交会のメンバーに接する時の態度は全く違う。心を開ける人がそばにいてくれる安心感からか、言葉もはずみ顔も輝く。長い間に培われた信頼関係と、地域の中でいつでも顔を合わせ声を掛け合える親近感が、生活まるごとの信頼を生み出しているのだと思う。

(4)老人給食活動を担う人々

ア. 継続する力

この活動が始まってから10年間、ずっと支え続けてきたメンバーが今でも4人いる。4人とも50代前半で同年代なのだが、性格や動き方は全く違っている。

滝口さんは小料理屋のおかみさん。低い声でゆっくりとしゃべり、その言葉は人を説得する重みを持つ。怒ることはほとんどない。料理に味を付けたり、仕上げをすることが多い。しかし新しい方法には非常に好奇心を表し、また、他の人のやり方を大切にす。

磯さんはドヤの管理人さん。いつも水場にいる。米を研ぎ、お湯を用意し、洗い物をし続ける。小柄な体が水場で動き始めると、その動きがダイナミックで大

きく見える。「ここは私にまかせない」と体が語っている。

毎週必ず出席しているのに「先週いたっけ」とよく言われてしまうくらい目立たない小沢さん。いつもニコニコ笑っている。愛泉ホームの調理場は狭い。その中で真夏に80食分の揚げ物をするのは非常に大変な作業だ。でもそんなイヤな仕事を黙ってかってでる。顔中汗だらけになりながら油に向かい続ける。

そして会長の根岸さん。太くて大きな体から人の良さが溢れている。“おせっかい” “でしゃばり” “いいかげん” ...いろいろ言う人もいるけれど、「彼女がいたからこの会は10年も続いた」とメンバーは口々に言う。その存在感は誰もが認めている。彼女の動き方は他の3人とは少し違い、いろいろな仕事を手伝いながら、何をしようかと戸惑っている人に方法を指示したり、元気のない人には声をかけたりしている。全体を見渡すことや、その場の状況をつかむことにとても長けている。



まるっきり違う個性を持った4人が自分自身を表現しながら、自分の役割や居場所を見つけ出し、10年間も一緒に活動してきた。そしてこのことは、かかわる期間の長短こそあれ、他のすべてのメンバーに言えることだ。小さな違いや大きな違いはあるけれども、歯車がかみ合い、グループは動き続けている。

また、例えば会長の根岸さんひとりを見ても、大胆さと気配り、厳しさとかかわいらしさ、強さともろさ、男っぽさと女っぽさ、熱心さといいかげんさなどが、その時々表情を変えて現れてくる。メンバー一人ひとりが、個々人の中にある両



面性をも含めて、人間の持つ多様性や個性を柔軟に受け入れているから、活動が継続し続けるのである。

なぜ受け入れることができるのか。それは、メンバーがその場を必要としているからだろう。しかしその必要の仕方は、皆それぞれ違っている。そのため気持ちのすれ違いもしばしば体験するが、それでも活動をやめない。それは何と云ってもその場が楽しいし、基本的には仲間が大好きだし、参加することで様々な新しい発見があるからだ。

彼女たちは何回かの失敗を繰り返しながら、楽しみ方、人とのかわり方、自然な動き方を体に染み込ませてきた。他者を悪者にした、疑ったり、遠慮したりすることより、自分で判断し、他者を信じ、寄り添い合ったほうが楽しいということに気づいているからである。ここでは一人ひとりの個性が生きている。

イ. 学び合い, 育ち合い

友交会のメンバーは、掃除婦、スナックのママ、養護学校送迎バスの介護者、一流企業のサラリーマン婦人等多種多様だが、ほとんどの人が仕事を持っている。それも生活を支えるためにどうしてもしなければならない仕事の人が多い。日雇いの人もいれば、休日にはアルバイトまでして働いている人もいる。もちろん有給休暇が豊富にある人などはほとんどいない。

そんな彼女たちは自分たちのしている活動を「生活の一部であり、楽しみなのだ」と言う。だから無理がない。自分の生活のパターンの中で、可能な形で取り組んでいる。最初から最後までいる人、途中で一回家に帰りまた戻ってくる人、午前中だけで帰る人など様々だ。しかしそれぞれの人のやり方に誰も文句はつけ

ない。どんな方法であろうともその人が来るということを楽しむ。

そんなに忙しい生活をしている人たちなのに、PTAや町内会の活動にも積極的に参加する。給食活動をするようになって人の噂でなく生の情報を自分の耳で受信することの大切さや、人とかかわりのおもしろさを知ったからだという。

友交会のメンバーの場合、理論的で系統だった学びはあまり得意ではない。そのため市民としての自治意識や地域を変革していこうとする意識も自覚的に表現されることは極めて少なく、きわだった活動の広がりや深まりも見られない。しかし野菜を切り、おぜんを整えながら語り合う子育て論、老人との接し方、地域のあり方などの話の中に、いつもキラリと光るものがある。

楽しみながら、自分の耳で情報を受信し、自分の言葉で語り合うということが10年間の歴史の中で、自分の場所と方法を持ち、それぞれの人の方法をも受容する人と人との関係のしかたを知り、ズバリといやなことを言われてもまた次回にはにこやかに顔を見せる人たちへと成長させているといえる。

また愛泉ホームには福祉教育の活動のフィールドという位置づけがあるため、多くの学生が実習にやってくる。保健婦さんや学校の先生との接触もあるし、マスコミの取材もある。そうした外部の人たちとかかわりのたびに「なぜこの活動を始め、なぜ続けているのか」「この活動の意義をどう考えるか」などを自問し、説明することを強いられる。

自ら求めたものではないが、こうしたことの積み重ねは自分の考えや生き方の整理になり、お互いの思いや要求を知ることでもでき、次の活動や他者とかかわりへの違う視点の導入につながっている。学び合いや育ち合いは活動の中に、意図していなくても着実に行われていることがわかる。

ウ. 中村地区老人給食運営委員会と地域の人々

この老人昼食会は当初から、地域の中で独居老人と最も接触の多かった民生委員協議会の人たち、調理ボランティア（友交会）、愛泉ホーム職員、給食利用老人の四者で構成する「中村地区老人給食運営委員会」という組織により、運営が続けられてきた。多くの人々がそれぞれの立場で独居老人やこの昼食会にかかわるため、組織を明確にしておいた方が継続しやすいだろうと考えたからである。

ところが現実には形だけが先行し、実態と遊離することの方が多かったようだ。

だからこそ、この運営委員会の存在が、そこにかかわる一人ひとりに老人給食活動の意義、方向、真の担い手は、といった問題提起をし続けてきたようである。そして今日、ぎくしゃくする面は見られながらも、名実共に四者の協働で担われる活動へ実体化の方向を模索し始めているのである。

組織はできあがってしまうと人間から離れ、一人ひとりの個性や方法をつぶしてしまうということが、しばしば見受けられる。しかしこの活動を最も自分のものとして支えている友交会のメンバーは、時に組織を無視することはあっても、組織にしばられることはなかった。それは彼女たちが組織人として生きる率の高い男性に比べて、自由な発想や行動の可能な女性の集まりだということ、また日雇いやパートなどの仕事をしながら、一人の力の重みや大切さを痛感している人たちだからかもしれない。そして愛泉ホームの職員も、組織が名前だけで宙に浮いている時があっても、そのうち動き出すに違いないとゆったり構えていることが多い。愛泉ホームにかかわる人々は、活動の活発化と継続のしやすさのために組織を作り、その組織を利用し、しかも組織に縛られない方法を知っている。

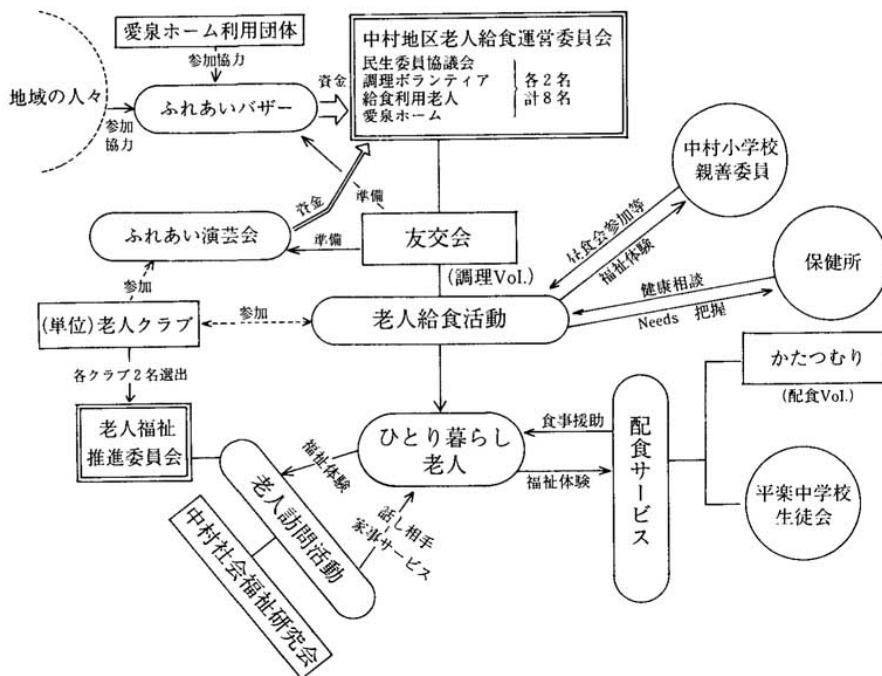
しかし中村地区老人給食運営委員会は、活動が地域の中に広がる時の情報媒体として、ひとつの力になった。それは資金の面で顕著に現れている。活動に必要な経費のうち最も大きな比重を占める食事の材料費は、現在では一食につき420円かかる。そのうち150円を参加するお年寄りに負担してもらい、不足分については、前述した「ふれあいバザー」の収益金で大半を賄っている。その他にも連合町内会からの助成金や、愛泉ホームを会場として活動している町内会婦人部の体操教室参加者から一回の会費に上乘せされた寄付がある。また地域の中で行われた廃品回収の収益を持ってきてくれる人もいる。そうやってきたのは老人給食運営委員会の存在が大きいという。

この組織では年に一度、地域の町内会長さんや福祉推進委員の方々、それに南区内で同じように老人給食活動を行っているグループなどを招いて、「試食会」を開いている。こうしたことがきっかけになって民生委員さんや町内会を通して老人給食活動についての情報が提供されるため、地域の人々の中に「自分なりに何か手伝える」という気持ちが少しずつではあるが芽生えてくるようだ。「ふれあいバザー」も品物を提供する人、準備を手伝う人、当日参加する人など一人ひとりが自分のできることを探してかかわるといふようになってきた。今年のバザ

一参加者は前述したボランティア 120 数人、買い手は 1,000 人を超えた。そして「試食会」や「ふれあいバザー」の活動自体が独り暮らしのお年寄りのことを知るきっかけにもなっている。

(5)老人給食活動の広がり

老人給食活動の広がりは、田中さんに代表されるように、受け手であった老人が担い手に変わっていったこと、友交会のメンバーが他の活動にもかかわるようになったこと、地域の人たちの力で活動が担われ支えられる部分ができきたことなどの中に見ることができるが、さらに最近では小・中学校との連携や大学生のボランティア活動という形でも広がり始めている。下の図は老人給食活動の広がりの様子を現したものである。



ア. 中村小学校とのつながり

愛泉ホームの職員が意図する子供とお年寄りの回路づくりには、二つの方法がある。ひとつは愛泉ホームへ足を運んでくる子供たちの自発的な活動を長い時間をかけて援助し、見守り、子供たち自身がお年寄りの所へ行きたいと言い出すのを待つ方法である。もちろんただ漠然と待つのではなく、中村地区の独居老人の様子や、老人ホームなどの施設でのお年寄りの実態など、様々な角度からの情報を提供しながら待つのである。

もうひとつは、学校との連携をはかるという方法である。現在ではまだ子供たちが学校を母校として地域で活動するという事に積極的に動き出す学校は数少ない。そういう現状を踏まえながら、福祉的視点や地域活動の大切さに気づいて欲しいとの願いを持って、何度も学校に足を運ぶ。

中村小学校の場合は、校長先生が老人昼食会に参加し、お年寄りと食事を共にするという体験をきっかけに、子供とお年寄りとの小さな橋がかかった。

愛泉ホームの活動のひとつに中村小学校の児童を対象とした学童保育活動がある。中村小学校の校長先生はその運営協議会のメンバーであった。子供の地域活動の主旨と方法を言葉で説明して理解してもらうことの難しさを感じていた愛泉ホームでは、実際に活動の様子を目で見、体で感じてもらおうと思い、1983年度の学童保育運営協議会を老人昼食会の日に設定し、会議終了後、委員とお年寄りとの会食会を持ったのである。校長先生も肌でその活動のすばらしさや大切さを知り、以後愛泉ホームと中村小学校との組織的なかわりあいが始まった。

イ. 平楽中学校の老人配食サービス

給食活動を続ける中で愛泉ホームの職員がいつも気掛かりに思っていたことは、昼食会への参加を楽しみにしていたお年寄りが、ある日を境に姿を見せなくなってしまったということだった。そこで家を探ねてみると、案の定病気で床に就いていることが多い。足が痛くて通えないという人もいる。

そこで1985年1月、家庭訪問をしながら老人昼食会参加者の健康問題や食生活についての聞き取り調査を実施した。その結果、有病率89%とほとんどの老人が何等かの病気を持ち、通院しているということ、また食事は一度作ったものを3～4回にわけて食べているということなどがわかった。配食についても尋ねたと

ころ、病気等で毎日必要なはずの人でさえも、週2～3回希望が71%で最も多かった。しかも食事にはあまりお金をかけられないと多くの人が語っていた。

それ以後愛泉ホームの職員は地域の人々に情報提供するときに、配食サービスの担い手の必要性をも訴えるようになったのである。

中村小学校と同じように、地区内にある平楽中学校とも連携をはかることに勤めていた愛泉ホームでは、登校拒否をしているのに愛泉ホームには顔を出していたK君との対応という具体的な事例を持って、教師とのつながりを強めていった。校長先生とK君の進路について話し合う機会を持った時にも中学生が地域で活動することの意義をK君の変化の様子を織り交ぜながら話すことで理解を得ようと努力したのである。

愛泉ホームの職員の熱意で、いま中学生と老人との橋も掛けられ始めている。平楽中学校のベルマーク集計委員会の生徒たちが今年（1986年）の2月から、時期を決めてではあるが、配食サービスのボランティアを担ってきている。

ウ．中村社会福祉研究会

愛泉ホームを拠点に地域での実践を主として活動をしている大学生のサークルに「中村社会福祉研究会」がある。1985年6月に結成されたばかりだが、週一回の実践と月一回の報告会を中心にした研究会が定例化している。このサークルのメンバーは14人、「あそびのキャラバン隊」という愛称を持つ子供部会と、老人訪問活動部会に分かれている。

老人訪問活動は毎週土曜日の午後、二人ずつのペアを組み、老人昼食会に参加しているお年寄りの家を訪問する。給食活動の手伝いをしたり、昼食会でお年寄りと会食したりしていた学生たちが“自分たちだからこそできること”を探して始めたのがこの活動だ。

最初は近所の人を気にしたり、余計なお世話だと言ってなかなか受け入れてくれなかったお年寄りも、学生が調理ボランティアとして動いている姿を見たり、断られてもこりずに何度も足を運んでくる熱心さに、今では安心して心を開くようになってきた。もちろんどうしても訪問されるのはいやだというお年寄りもまだまだ多い。現在では老人昼食会の登録者63人中28人の家を訪問している。

この活動からも解るように、愛泉ホームにかかわる人たちは決して無理をしな

い。その時に自分のできる範囲のこと、相手の受け入れることだけをする。だから発展の速度は非常に遅い。たたかれたり批判し合ったりすることが少ないから、がむしゃらな学びも見られない。もっと新しい方向を目指して突き破っていくようなバイタリティやダイナミックさが欲しいと感じることもある。

しかしあせらず、ゆっくりと、無理せず、しかも決して止まらず、着実に長い歩みの中で前進し、変化していく愛泉ホームとそこにかかわる人々の姿は、発展を急ぎ、非合理的なものは切り捨てていく現代社会にあっては、やはり一つの方法の提示になっているとは言えないだろうか。

(6) 地域と共に変わってきた愛泉ホーム

ア. 施設の始まりと現在



設立以来24年間、時代の勢いに押し流されたり逆らったりしながらも、愛泉ホームはセツルメントハウスとして住民と共に歩むということを模索し続け、様々な活動を生み出しながらその努力を行ってきた。しかし住民と共に歩むホームの視点や方法は、開館当初と今とはかなり異なっている。

開館当初の愛泉ホームは、当時の人々にとって「住民のための建物という意識は全くなく、税金のかたまり、税金の無駄遣い、我々住民に何をしようとしているのだといった意識の方が強く、4階建ての威圧感だけ」(『コミュニティと社会福祉 10年のあゆみ』)があったという。そのため、浮浪者や酔っ払いが館内で暴れることも度々の事だったようである。

それでもそれから20年、高度経済成長の陰にいた人々のための厚生施設であった愛泉ホームは、たくさんの人に利用された。さまざまな出会いも生み出されて

きた。その間、町の状況も住民の要求も少しずつ変化し、今では経済的貧困もかなり少なくなった。住民は最近では安価で利用できる施設を必ずしも必要とはしない。そこで開館当初の目的は十分に果たしたとして、理髪店は「おもちゃの図書館」になり、浴場は陶芸室となって「ふれあいと創造のフロア」と命名された。最後まで残っていた食堂も1986年3月に廃止され、その後は配食サービスの調理室とボランティアの談話室に変身した。現在、愛泉ホームは姿を変えながら「地域福祉」の拠点になるべく動き始めている。

イ．職員

「施設は人なり」という言葉を良く耳にする。愛泉ホームの職員を見ていると、この言葉は真実だと感じる。

住民は生活の中で様々な欲求を持ち、それを満たすために動いたり、活動を展開したりする。しかし、自分の力だけでは解決できない事もある。職員は、地域の人たちとのふれあいを通して、そんな人々の生活欲求、活動欲求、学習欲求等を把握し、目に見える形になるよう援助する。なかでも自分ひとりでは解決できないことや弱い立場にある人の自己実現の欲求に対しては積極的な援助を行う。

愛泉ホームでは、最近では地域全体を対象とする調査をあまりしないという。地域調査では量的欲求をつかむことはできるし、どこにどんなサービスが必要か地図を描くことはできるが、今は量としてのサービスの時代から、ひとりの欲求を大切に、その人の可能性を追及する活動に援助することが求められる時代へと変わってきていると、地域の人々のありようを捉えているからだ。そこで地域調査をする代わりに、できる限り頻繁に地域に入る。そして肌で感じ合う信頼関係を作りながら、一人ひとりの思いや生き方を、生活の実態を知っていく。

平楽中学校へ通っているK君という少年がいる。彼は中学2年の頃から登校拒否をし始め、学校へはなかなか行かれなかったが、愛泉ホームが好きで学校へ行かなくても愛泉ホームには度々顔を出していた。高校生の音楽サークル「サザンクロス」や中学生のサークル「つみき」のメンバーでもあった。愛泉ホームの職員は親や教師と何度も話し合いの機会を持った。そしてK君がここを自分の居場所だと感じているなら、無理に学校へ行かせようとするのではなく、自分がしたいことを見つけれられるように援助することが大切なのではないかと感じ、考える

ようになっていた。

そこでK君の来る日の午前中、担当の職員はかかりきりでK君の学習の面倒を見、それと同時に学童保育活動などへの参加の機会も作り、さまざまな人と人との関係を学べるように配慮した。非常に多くの時間をひとりの少年のために費やすことになった。しかし担当の職員はできる限りの努力をし、まわりの職員もそれぞれに担当者を応援した。それだけではなく「サザンクロス」の「メンバー」やOBの青年たちも彼のために話し合いを何度も行い、家庭教師をかってでたり、愛泉ホームの職員に相談を持ちかけたりしながらK君とかかわり続けた。K君は少しずつ変化を見せ始め、印刷などの作業をしたり、学童保育の子供たちのおにいちやんになったりしながら、愛泉ホームの職員の手伝いまでするようになった。

自分でもやればできるという自信は、彼の生活や行動を変えた。長い時間がかかっている。今、K君は夜間中学校に通い、「卒業したら、昼間はバイク店に勤めながら、夜間の工業高校へ行きたい」と言っている。彼なりに自分の進路と生活のリズムを自分の手でつかみ始めているようだ。

<愛泉ホームのボランティア活動>

対象	活動名	活動内容	ボランティア層	活動日
乳児・児童生徒	あそびのキャラバン隊 子ども室 学童保育 児童室 英語クラブ	遊びの指導 〃 小学1～3年の保育補助 保育補助 英語学習指導	学生 学生・婦人 学生・勤労青年 学生 成人・婦人・学生	第2日曜 月～土曜 月～土午後 月～土曜 火・金 夜
障害児・者	幼児訓練会 でんでん虫クラブ 作業訓練会「りん」 手話「つばみ」 手話「希望」 ふれあいと創造活動 「木馬」	療育 遊びの指導 作業の指導(陶芸・工作) 手話 手話 陶芸指導 おもちゃの貸し出し	成人・婦人 学生・勤労青年 成人・婦人 婦人 勤労青年 成人 婦人	火 午前 土 午後 第2日曜 月 午前 金 夜 月・金 火曜
老人	老人訪問活動 老人書道クラブ 老人給食サービス	独居老人の訪問 書道指導 独居老人への昼食づくり	学生 婦人 婦人	土曜 水・木午前 第2木・土
一般成人	夜間健康相談 卓球クラブ ダンス研究会 「すずめ」 「かたつむり」 きり絵教室	健康相談 卓球 ダンス指導 手芸講習 配食サービス きり絵指導	医師・看護(教務・学生) 成人 成人・婦人 婦人 婦人 成人	第1月 夜 火・土 夜 金 夜 随時 月・金昼食 月 夜
	特別行事	ふれあいバザー キャンプ 車イスハイキング 愛泉ホーム祭り 子ども市	老人・成人 婦人・勤労青年 学生 子ども・老人	6月 7月 6月 10月 11月 5月

そうしたK君の変化や職員のかかわりかたを地域の人たちは見つめている。そしてひとりのために全力を尽くす愛泉ホームの方法とそこの職員への信頼は、より深まってゆく。“人が生きる”ということに真正面から取り組み、そのとき最も良いと思う方法を選び、実践していく。それがひとりの人間の心を動かし、地域に根ざす実践になっている。

職員は愛泉ホームを“地域の見える窓”にしたいという。愛泉ホームにすれば中村地区の様子がわかる。そして人と人との出会いがあり、活動が生まれる。そんな場であってほしいと願う。だから中村の町の中へできるかぎり多く出かけて行く。足で目で耳で口で、からだ全体で情報を集めて来る。人とのつながりも施設の中だけでなく、町の中で生まれ、広げられていくことが多い。

こうして集められた情報は、愛泉ホームを利用する人たちと職員との知恵と協力で形あるものにされ、いのちが吹き込まれていく。そしてまた一つの小さな活動が動き出す。そのひとつに「おもちゃの図書館」という活動がある。

子供たちはその発達段階に応じて、様々なおもちゃと接する。おもちゃは子供の発達と学習にとって、欠くことのできない道具のひとつだ。特に障害を持った

子にとっては、ひとつの学習は長い時間を要するが、獲得したことの意味は大きい。しかし障害児の助けになるようなおもちゃは数や種類も限られ、しかも非常に高額だ。そこで「おもちゃの図書館」が生まれた。毎週火曜日10時少し前「ボランティアグループ木馬」のメンバーが集まってくる。おもちゃの貸し出しを受け持っているお母さんたちだ。彼女たちは、職員と協力しながらおもちゃと遊びの相談にも応ずる。



ここには300点のおもちゃがある。その半数の150点は製作を担当する中川さんの手作りだ。定年退職をした中川さんは昔の技術を生かして、毎日のように愛泉ホームへ来ておもちゃの研究と製作にいそしむ。中川さんにとって愛泉ホームは老後に自分の好きなことのできる場であり、それが人の役にたっていることによって、より強く生きる力を見出し得る場になっていると言える。サークル木馬のお母さん、中川さん、障害児とその親、そして地域の子供たち、おもちゃの図書館を拠点とした地域の人々のつながりは、少しずつ輪を広げていっている。

職員はこの活動に際し次のような役割を果たしている。

人々におもちゃの図書館のイメージを伝えることで、人々の新しい活動のきっかけづくりをする。

ボランティアの発掘

場の提供

活動の整理・普遍化・形としての情報発信

活動は継続されるだけでも十分な情報を発信していると言えるのだが、その情報がより明確に、より多くの人に受信されるよう援助するのも職員の役割だと考えている。そこで活動を職員の立場で整理し、提示しなおしてみる。これが「形としての情報発信」なのである。これは活動を担っている人々の新たな気づきへの援助にもつながり、また愛泉ホームで行われている活動が特殊な地域の特殊な活動ではなく、いつでも、どこでも、だれでもできるというように普遍化していくための動きとして、職員の役割としては大きな意味を持つ。

職員はいつも中村地区の人々の中にいる。そのかわり方はその時々住民の状況により異なる。動き方、つながり方が解らないで戸惑っている人たちには、その方法がみつかるように援助をし、自らの方法を見いだして動き始めている人たちには、活動の広がりや深まりのために新しい視点を投げ掛けたり、いろいろな情報を提供したりする。このグループは自立しているからと言って、離れきってしまうことはない。その人たちが必要を感じたときにいつでも対応できるように、信頼関係をつくり続ける努力をする。

それぞれのグループ、それぞれの人の状況に沿って多様なかわりをし続けている。そうした関係の中で、職員は鍛えられ、変わっていく。常に地域の人々と共に学び続ける愛泉ホームの職員は、柔軟なところを持っている。

(7)歩みは遅いけれど

老人昼食会に参加し、ごく自然に人のお世話をし続ける田中さん。たった一人で一日中おもちゃを作り続ける中川さん。二人とも世間では“変わり者”というレッテルを貼られるかも知れない。でも愛泉ホームでは、二人の個性が十分に発揮できている。そこには“人が生きていかれる力”が息づいている。

夜間中学に通い始めたK君、たった一人のために多くの時間を裂く職員、そのK君と職員のかかわりを見て自分の生き方を見つめ直す地域の人たち。そこには“人を育てる力”もある。

老人給食活動を担う友交会のお母さんや地域の人々、ひとり暮らしのお年寄りの家を訪問する学生、子供たち、そして昼食会に参加するお年寄り。そのつながりの目は少しずつ綾をなし始めている。

「中村は人間を大切にする町」「生きていきやすい町」中村地区に住む友交会の人たちは、自分の町をそう評価する。かつて中村地区は「スラム街」のイメージが強く「特に若い娘たちは、早く中村地区という名前から離れた」(『愛泉ホーム物語』)と思っていたという。そんな中村地区の人たちが地域の福祉の高まりのために努力する愛泉ホームの職員の動機づけに、「お世話になったのだからお返しするのは当たり前」と自然に活動を開始し、その中で確実に自分の場、方法、人とのつながり方、自己表現の仕方、運営のノウハウ等をつかんでいく。施設もそこに働く職員もそうした地域の人々とのかかわりによって変わってきた。

受け手が担い手になり、育ちあいが繰り返され、他の人への広がりも見られる。歩みは遅々として遅いが、人々の動きは“老人昼食会”“おもちゃの図書館”という形となり、中村地区らしい文化となって継承されている。

愛泉ホームにかかわる人々のつながり合いが中村地区にいのちを吹き込んでいく。“人間を大切にする町”を創る力がそこにはある。



「まいおか水と緑の会」

自然に親しむ仲間たち

国鉄戸塚駅の東、約2キロの地に広がる横浜市戸塚区舞岡地区。宅地造成の波が急速に押し寄せ、小ぎれいな住宅や、気のきいた商店がにわかに数を増しつつある。昨年（1985年）3月には市営地下鉄が舞岡まで延伸され、2年後には戸塚駅に接続される予定だ。

そうした典型的な新興住宅地域の一つである「舞岡台」の一角の二階家に、白いペンキ地に黒い字で書かれた「まいおか水と緑の会」の看板が見える。一見して素人が書いたとわかるその看板は、家の前を作業着でたむろする若者たちの姿とともに、サラリーマン族のベッドタウンであるこの周囲の雰囲気とは、何か異質なものを漂わせている。

しかし、会の事務局となっているその地から100メートルばかり離れた「舞岡谷戸」に一歩足を踏み入ると、新興住宅地域のたたずまいとは全く異質の風景が展開される。小川が流れ、ネザサや竹が群生し、耳を澄ますとホトトギスのさえずりが聞こえてくる。さらに分け入ると、低地には田んぼが広がり、丘陵地の斜面の所々に灌木が生え、丘の上には畑作の畝が見える。この風景 丘陵地帯の低地に広がる水田、斜面地に広がる雑木林、丘の上に点在する畑 こそ、かつて武蔵や相模の国の至る所に息づき、横浜から鎌倉にかけて「谷戸」と呼ばれた農的風景の典型的な姿である。

「まいおか水と緑の会」は、今では残り少なくなってきたこの谷戸を舞台に、この地を市民が自然と親しみ、農作業を体験できる公園にすべく活動している市民グループである。以下、この会の動きをレポートしながら地域教育力とは何かを考えてみたい。



(1) 農的自然を取り戻す

ア．コナラ・クヌギなどの植林

4月初旬のある晴れた昼下がり、いつもは閑静な舞岡谷戸の丘陵地に、珍しく大勢の人々が群がっていた。手に手にスコップや鎌を持ち、下草を刈ったり、土を掘ったり、どの人も忙しそうに動き回っている。「舞岡谷戸に再び雑木林を」と願う人たちにより、植林が行われているのだ。主婦や若者たちに混じって、小学生が100人ばかりいる。お年寄りの姿もみえる。どの顔にも春の陽ざしがさんさんと降りそそぎ、汗が光って見える。しかし、その表情はいかにも清々しそうだ。

傾斜地を一面に覆っていたネザサやクズが刈り取られると、1メートル間隔くらいに穴を掘り、そこにコナラ、クヌギ、オオシマザクラの若芽を植えこむ。以前、この地域の自然植生について神奈川県林業試験場の技師を招いて学習会を行ったところ、横浜周辺の雑木林で最も一般的な樹種が、コナラ、クヌギ、オオシマザクラであったからだ。

「一つの穴に3本一緒に植えるんだよ。植え終わったら土をまたかぶせておいで。」



会のメンバーの一人、O氏が小学生たちに声をかけを慣れない手つきながらも、小学生たちは実に楽しそう。聞けば、舞岡から地下鉄で3つ目の上大岡から来たという。そういえば大人たちも、この近くに住んでいる人の参加は意外に少なく、ほとんどの人が電車やバス、またはマイカーで来た人たちだ。やはり身近な所に、これだけの豊かな自然が残っている場所は横浜ではもう少ないからだろうか。否、たとえ残っていたとしても、その自然を市民が自由に利用できるような状態になっていなければ、舞岡谷戸の場合とは違って気軽に近づくことはできない。だから、自然とのふれあいを本当に進めていこうというのであれば、身近に利用できる地域の自然を、これからは積極的に確保（保全・再生）していく必要がある。地域教育力を高めていくための秘訣は、案外こんなところにもあるのかもしれない。

イ．野草料理、田んぼ起こし

4月末のゴールデンウィークに入ると、人出は一段と増えてくる。やはり先生に引率されて来る小学生の数が多く、まるでピクニックのようなにぎわいだ。近所から網を持って水辺の生き物を求めにやって来た親子づれの姿も目立つ。前回植林した場所に行ってみると、そこが木を植えた場所であることを示す「植林中」と書かれた白い札が立てられていた。

下草刈りが一段落すると、たった今ここで採れたばかりの野草を材料に、即席の天ぷら料理が始まった。

「こんな葉っぱ、食えるのかよー」

「結構うまいよ。食ってみたら？」

たちまち谷戸一帯に歓声がこだまし、天ぷら油の匂いが、ほのかに新緑の谷間に漂う。目を田んぼの方に転じると、若者が二人、膝上まで泥につきりながら、せっせと田んぼ起こしに励んでいる。昨年、一番大きな田んぼを復元開墾



した横浜市大の学生で、今年はまだ一枚の田んぼを開墾しようと頑張っている最中とのことであった。2メートルにも伸びたアシの地上部を刈り取り、水路を巡らして水を抜き、えんぴ（先のとがったスコップのような農具）で地面をスライスしてアシの地下茎を細断し、鍬で耕起した後、畦をつくって水を張り、浮いた地下茎を除去してやっと田んぼが復元（実質的には開墾）されるという田んぼ起こしのプロセスは、正に泥との格闘以外の何物でもない。しかし、そんなハードな作業にもかかわらず、どこか“遊び”のような余裕が感じられるのも、この会の目的が稲作自体にあるのではなく、自然との豊かなつきあい、農的文化の再生を目指そうとするエコロジー運動にあるからなのであろう。

ウ．田植、水辺の生きもの

6月下旬の日曜日、会の通信（「森から田んぼから」と題され、毎月1回発行）の表現を借りれば、「まいおかの会が、泥との格闘を愛する皆様に贈るビッグイベント、田植」が行われた。薄日のさす絶好の田植日和であることも手伝って、その日は小学生を中心に午前200人、午後300人、計500人の参加があった。昨年と比べると参加者は200人も増えたそうだ。全員裸足で田んぼに入り、会のメンバーが張る綱に沿って苗を植える。苗は農家から分けてもらった物を自前で育てたものだ。始めて田んぼに入る子供が、ぬるつとした足裏の感触に「気持ち悪い！」と叫ぶ。ぬかるみに足をとられて転ぶ子もいる。それでもすぐに慣れて、田んぼの広さに比べて参加者の圧倒的に多い舞岡の田植は、たちまち終わってしまう。



しまう。多くの子供が「もっとやりたかったなあ」と残念そう。

田んぼの周りの水路では、子供や親子連れがザリガニ、ドジョウ、タイコウチ、オタマジャクシなどの捕獲に夢中になっている。通常、谷戸の田んぼは水路を作らないのだが、ここでは水辺の生物を育てたいということから、あえて水路を張り巡らせてある。生命系の循環に害を及ぼすため、農薬は一切使わず、稲作は全て自然農法（有機農法）だ。田んぼの畦道も普通の田よりは遙かに広くとってある。子供たちの生物観察（採取）活動の一助になればとの配慮からだ。

このように、谷戸の中に秘められたさまざまな魅力を見つけ出し、それを自分のものだけにせず、多くの人たちと一緒に楽しもうとするのがこの会の特徴だ。だからこそ、多くの人々がこの会の提供するさまざまな自然との“ふれあいイベント”に参加するのであろう。しかも参加した人々は自然とのふれあいを楽しみながらも、知らず知らずのうちに、自然と人間との共存の大切さ、人間にとって、なくてはならない存在としての自然のすばらしさを実感として体験していく。

初夏の遅い日ざしが西に沈むと、谷戸にはホテル見物の人々が三々五々集まって来た。かつて横浜近辺の谷戸には至るところで見られたというホテルであるが、宅地開発の嵐の中で今ではすっかり少なくなってしまった。しかし、開発ラッシュから身を守ってきたここ舞岡谷戸は、今でも昔と変わらないホテルの宝庫となっている。

青白い、何かロマンの世界に誘い込むような、あの独特の光を眺めていると、改めて自然の恵みの豊かさ、自然の摂理の巧みさに感嘆するとともに、自然とのかかわりの中で、人間は大きく、豊かに育つものなのだということをしみじみ痛感させられる。

（２）会のあゆみ

ア．「舞岡谷戸展」の開催

「まいおか水と緑の会」の事務局長、十文字修さんが今の会の活動を始めるきっかけとなったのは、大学時代のある日、柏尾川で偶然みかけたボラの大群であったという。戸塚に生まれ、柏尾川はいつも見慣れた川であったが、まさかボラが泳いでいるとは思ってもみなかったようだ。1981年の秋のことである。

その強烈な原体験から、「真の豊かさとは何か」を考えはじめた十文字さんは、とりあえず柏尾川のクリーン作戦を開始するとともに、そのころ旗挙げした「よこはまかわを考える会」に入会する。そうした中で柏尾川水系の水源調査を行ううちに偶然みつけ出したのが、今の活動の舞台となっている舞岡谷戸であった。以来、十文字さんは急速に谷戸の魅力にとりつかれるようになる。早速、自ら発行していたミニコミ紙「かしおかわら版」に舞岡谷戸の存在と、谷戸を舞台にした新しい公園づくりを提唱。ミニコミ紙が朝日新聞紙上に紹介されたことなどから同志が増え、1983年の夏には横浜市戸塚地区センターで「舞岡谷戸展」の開催にこぎつけた。谷戸の模型や農具などを展示し、市民の手による新しい公園づくりを訴えたこの催しは好評を博し、9月には正式に「まいおか水と緑の会」が発足する。

イ．谷戸の公園づくりに立ち上がる

十文字さんたちが舞岡谷戸に注目したのは、言うまでもなく、そこが都心地域としては極めて豊富な農的自然が残された地域であったからである。そしてもうひとつの理由は、60ヘクタールに及ぶ舞岡谷戸の面積の3分の1を横浜市が所有し、そこに公園づくりが計画されていることを知ったからである。「この自然の宝庫を噴水やグラウンドといった、ありきたりの公園には絶対させたくない」と考えた十文字さんたちは、会の発足直後「舞岡谷戸を自然と親しみ、農作業を体験できる公園に」と訴えた要望書を横浜市に提出。直ちに署名運動を開始し、やがて集まった3000名の署名は会の活動を勇気づけることになった。

市への要望書に盛られた要点は次の6点であるが、それらはいずれもその後の会の活動の基本的なテーマとなっている。

自然と人間との交流の中でつくられてきた“横浜の原風景”谷戸景観を後代に伝えることのできる公園に。

淡水生物、野鳥、昆虫など身近な小動物の生息環境を保全する。

植樹や園路整備等に当たっては、農業と調和した景観に。

湧き水やせせらぎを保全し、親しみやすい自然の水辺をつくる。

水田を実習田として残し、休耕田の一部を復元し、市民による農業の場とする。

ウ．市の土地使用許可、公益信託の適用

市への要望活動と並行して、会では谷戸の清掃活動や植生調査、田んぼづくりの実習を兼ねた援農活動など、自然公園づくりの基礎となる地道な活動に取り組み、次第に共感の輪を広げていった。公園の青写真についても、会員同士で徹底的に議論を重ねた結果、会の描く公園像は市の方針と基本的に一致し、市職員が会のメンバーとして参加してくるケースも増えてきた。

こうした中、1984年10月には、横浜市から舞岡谷戸の公園予定地の一部、2.8ヘクタールについて「水田復元と稲作及び雑木林の育成」が正式に許可された。12月には、自然の保護・育成・研究活動にたいして資金援助を行っている公益信託「富士フィルム・グリーンファンド」（各称F G F）から、会の活動実績が評価され、基金の適用が決定されることになる。こうして、「自治体の土地を舞台に、民間企業出資の公益信託の資金を用い、市民が公園づくりを行うという全国でも稀な試み」（十文字修「鍬を握った新住民」＜環境文化＞No68）が開始された。

横浜市との申合せにより、公園づくりの中心が水田と雑木林に決まったことから、その年も押し詰まった12月8日、90人が参集して“田んぼ開き”が行われた。以後半年間、会の活動は水田の復元作業に集中することになる。当時、F G Fからの支援で資金的に豊かになった会では、機械力の導入による水田復元の話が会員の間からしばしば持ち上がったという。しかし、「我々のようなグループがなぜ機械力まで使って市の土地を開墾する必要があるのか」という市民グループ・自然愛護グループとしての原点への認識と、復元作業を手伝う仲間が次第に増えてきたことが幸いして、田植の時期までには、すべて人力で約1反（10アール）の土地を7枚の田んぼに仕上げることに成功する。

エ．谷戸文化の保全・再生・創造

会の主力メンバーは、十文字さんを含めて、県や市の職員と教師、それに横浜市大の学生たちであるが、当然のことながら会社員や主婦もいる。何といっても男性会員の多いのがこの会の特色だ。会員は、形式的には年会費1000円を支払った者（約120人）とされているが、会費を払ったということよりも、会の活動に参加したり、会に手紙をくれたりする人を会員と考えたいと、十文字さんは話し

ている。

会の活動の様子や会からのメッセージは、前述した会通信「森から田んぼから」に掲載され、会員などに伝達される。今のところ事務局からの情報提供が中心となっはいるが、イラスト入り、手作りの会通信は、毎回ほのぼのとした暖かさが伝わってきて、ミニコミ紙としての特色、持ち味をいかに発揮している。やがて、会通信を媒介とした会員相互の交流も活発に行われるようになるに違いない。

会発足以降、活動を推進するためのチームとして、雑木林チーム、水田チーム、生物観察チーム、農芸チーム、映像チーム、広報チームの六つが設けられ、谷戸の「自然とふれあう」「自然を学ぶ」「農を体験する」「文化を継承する」「魅力を広く知らせる」という活動に取り組んでいる。活動内容は、当初の水田づくり、雑木林づくりから、昨年は「全国ホタルシンポジウム」を共催し、幼虫の放流を行うなど、活動領域の拡大が図られている。

“谷戸の三悪”と呼ばれる田んぼのアシ、雑木林のクズ、丘のネザサも、この会の人たちの手にかかると、アシはヨシズに、クズはクズ粉やクズ布に、ネザサは土びん敷というように、それぞれの“更正法”が生み出されてしまう。ここらあたりが、自然との共存をベースに踏まえたつきあい方、楽しみ方を絶えず工夫しているこの会の面目躍如たるところだ。最近では炭焼きを始め、ナメコ、シイタケ、ソバの栽培、そして和紙づくりにまで手を伸ばし、タニシ料理の楽しみ方までも研究している。将来は、こうしたものの中から“舞岡谷戸の特産品”といったようなものを作りたいという。更に風力発電にも関心を示し、いつかは水車を使って、谷戸でとれた米の精米をしたいなど、谷戸文化の新たな保全・再生・創造に向けて、会の活動は一層広がっていきそうだ。

(3) まいおかの事例から学ぶこと

ア．地域教育力の活性化

このように、地域に残された貴重な教育的資源ともいべき谷戸を舞台に、その保全・再生・創造を通して自然とのふれあいを核とした新しい人間関係、地域づくりが、今舞岡の地で始まっている。そこで、今後この運動を更に確かなものにしていくためには、谷戸の近くに住んでいるいわゆる“地域住民”の人々との

かかわりを一層深めていくことが是非とも必要だろう。

これまでの地域の人たちとのかかわりは、どちらかといえば、谷戸で農業を営んでいる農家の人たちとのつきあいが中心であった。農業のやり方についてはズブの素人が多い会のメンバーは、援農活動を通して農作業のイロハを学んだという。また、会の活動に参加する人が増えてくれば、思わぬところで農家の人たちの仕事の邪魔になるケースも当然予想されるので、会のメンバーは農家の人たちから嫌われることがないように最善の努力を続けてきたようだ。そうした努力の結果、今では谷戸で耕作している7, 8軒の農家との関係は良好で、中には会の顧問のような存在になっている農家もあるという。問題は新興住宅地の人たちとのかかわりだが、会の方でも自治会に掛け合っただけで広報紙に会の記事を載せてもらったり、イベントの案内を回覧板で回してもらったりなど、PRの手をいくつか打ってはきた。しかし、“新住民”の人たちの反応は鈍く、その多くは舞岡に背を向けているのが現状だ。身近にせつかく豊かな自然がありながら、住民の人たちの多くは自然とのつきあいにあまり積極的ではない。「自然の楽しみ方を知らない人が多いからだろう。」と十文字さんはその理由を分析する。

確かに、最近の都会に住む人々には、生の自然とのふれあいという“原体験”を持たない人が多くいる。そういう人々にとっては、たとえ身近に豊かな自然があっても、その自然とふれあい、そこからさまざまな学びを深める可能性は少ない。つまり、「豊かな自然」という教育的機能を発揮し得る存在が身近にあっても、それが“地域教育力”としての力を発揮するためには、その力を引き出し、その力を高め、周囲にそれを伝えていくための営みが是非必要だ。「まいおか水と緑の会」は、正にそうした意味で舞岡谷戸に眠っている潜在的な教育力を引き出し、その力を高め、周囲にそれを伝えていくという“地域教育力活性化”の役割を果たしていると言えよう。

ところで十文字さんは、いつの日か舞岡の自治会の中に「田んぼ部」や「農芸部」などのグループが、「勝手連」みたいに誕生することが夢だという。そうしたグループが地域の中に次々と誕生し、各グループが相互に個性を発揮し合いながら谷戸とのかかわりを持つようになれば、そこからさまざまな人間関係が生まれ、水と緑をテーマにした「まいおか谷戸まつり」といったような真の意味での“ふるさとまつり”が盛大に行われるようなことになるかもしれない。

イ．「地域」概念の問い直し

しかし、今のところ舞岡谷戸にかかわりを持っている人たちは、バスや電車に乗って来る人が多く、近くの人と比較的少ない。このように、谷戸とのかかわりを持つようとする人たちが必ずしも近くに住んでいる人々ではないという事実は、私たちにとって「地域」とは何かという問題を改めて考えさせる。一般的に言えば、「地域」とはそこに住む人たちが協働して、新しい生活と文化をつくり出すところと言えるのだろうが、舞岡のような動きを見ていると、そうした「地域」としての空間は、かなり広いものになっていくようだ。つまり、どんな人にとっても、自分が住んでいる場所は紛れもなく「地域」なのだろうが、たとえ今住んでいる場所と多少離れていても、自己充実や仲間づくりの活動に携わることのできる場所であれば、その地はその人にとって「地域」といえるのではないだろうか。少なくとも「地域教育力」といった場合の「地域」を考えてみると、その場合の「地域」とは、人々がさまざまな関係を有している、かなり広がりのある生活領域、活動領域を考えていく必要があるだろう。

ウ．地域活動への男性参加

もう一つ、「まいおか水と緑の会」の特徴は、女性よりも男性が中心となっている点である。このことは、従来、女性を中心に展開されてきた地域活動、市民運動の将来を考えていくうえで、重要な鍵を内包しているように思われる。いうまでもなく男性（とりわけサラリーマン男性）は、女性に比べると「地域」への関心が乏しく、ひたすら“働き蜂”に徹することをもって良しとしてきた。しかし今、そうした“企業戦士”的生き方が問い直され、本当の豊かさを求めて、地域にジックリと目を据えはじめた男たちが、徐々にではあるが、各地に生まれてきている。舞岡の仲間たちが、言わばそうした先駆派の一員であることは言うまでもない。

世の男性たちの多くが、こうした新しい動きに刺激されて、現在の企業・組織を中心とした仕事中心の生活を振り返り、「何が本当の意味で人間的な生き方なのか」という問い直しの中から、自らの地域に目を向けるような日が来たとしたら、その時こそ地域には新たなエネルギーが注ぎ込まれ、地域教育力は飛躍的に高まることになるに違いない。

かつて私たちにとって、「地域」と「ふるさと」とは同義であった。しかし、大規模な国土開発、都市化、産業化等による地域の分断は、ふるさととしての地域を次々に切り崩していった。今改めて、「ふるさと」の良さが見直され、「地域」の持つ意味が問い直されている。こうしたとき、ここ舞岡の地で行われている“小さな試み”は、人間にとって自然とは何か、地域やふるさととは何かといった文明史的な問いを投げかける“大きな実験”ではないのだろうかと思うのである。



舞岡谷戸

私たちは、第2章において、地域社会になんらかの影響力（教育力）を与えている または、与える可能性のある 四つの活動事例を詳細に追ってみた。その結果明らかになったことは、活動の形態にきまりきったものはないということである。なぜなら自主的活動とは、文字どおり一人ひとりの主体性が基礎となった活動であり、これらの個人の集まったグループにも当然それぞれの個性があるからである。つまり、メンバーと環境にあったそれぞれの活動形態があり、しかも絶えず変化しているのである。

しかし、それぞれの活動をいくつかの側面から眺めてみると、そこには少なからず多様性の中の共通項とでもいえる点を見い出すこともできた。もちろん細部に違いはあり、そのままの形で他のグループが自らの活動にとりいれることは困難であろうが、少なくとも活動の停滞を防ぎ、発展、継続させる上での十分なヒントになることは可能だろう。

以下、「組織」、「拠点」、「情報」、「活動資金」という四つの側面から共通項をひろい出すとともに、あわせてこれに対応すべき行政の視点を提示したい。

1．組織

まず、メンバーの参加形態に共通点が見られる。四つのグループともメンバー一人ひとりが自分ができるときに、できること（得意なこと）を分担している。自主的な活動であるなら、個性を活かした役割分担がある方が自然だし、なにより無理がなく、楽しそうである。一人ひとりが、自発的に自分のできることを見つけることが大切で、そのような関係が続く中で、自然に自分の得意な事柄を他のメンバーに伝えたり、また、不得意な分野にも手を出してみようという気持ちになるのではないだろうか。

これに対し、公平という観点から、何をするにも全てのメンバーが同様に活動するというグループは、一時的に活発な姿を見せることはあっても、長続きしない傾向にあるように思える。自治会や町内会活動の実態はさまざまだが、一般的には、個人の自発性より公平の意識が強すぎるのも、活動停滞の要因かもしれない。

次に、活動内容について考えてみよう。「キビタスの会」などに見られるように、メンバーの成長（生活環境等）に応じて、生活感覚の中から見つけた問題に

取り組んでいるグループの活動は、活発であり長続きしている。メンバーの成長に応じて活動内容を変えらるゝことは、当たり前のように思えるが、大きな目標（価値観）のところできっかり、しかもゆるやかに合意がなされていないと、一度組織がかたまってしまふと意外と困難なものである。

行政の声がかかりで組織されるグループは、ある程度短期的な目標達成を目指すものが多く、一概には言えないが、メンバー構成や活動内容に縛りが多すぎ、かえってグループの活性をそいでいることがまもある。市民が望むときに、その成長と環境に応じた、画一的でない援助の在り方を考えねばならない。

最後に、活動の発展及び継続という点から見た場合、グループがどのような形態を採るにしろ、メンバー一人ひとりの自発性の集合体であること、そして、グループの活動自体が、自己表現の場、楽しみの場であることが、なによりも大切なのではないだろうか。

2. 拠点（施設等）

日常的に活動できる場、拠点（施設等）は、活動が発展、継続するためのキープポイントとなることがある。現に、「キビタスの会」は“キビタスの家”を初めとする種々の拠点づくりに自らとりくみ、あるいは、協力することによって、その活動の飛躍的な発展と継続につなげていき、「まいおか水と緑の会」では、横浜市と協力し“舞岡谷戸”を自分たちの目標を実践する場とし、かつ大きなスケールの表現の場ともすることによって、人とのつながりを広げることによって役立っている。また、茅ヶ崎市立小和田公民館や神奈川県横浜愛泉ホームでは、公共施設という特徴を活かした職員の適切な対応も伴って、着実な実績をあげている。

しかし、自前の拠点を用意できる恵まれたグループはほとんどない。個々人の負担には限度があり、拠点探しに疲れ、しりすぼみになるグループや、いま一步の発展ができないグループも多い。

さまざまな行政分野が種々の施設を建設し、十分とは言えないまでも確かにグループの利用できる場は増えてきている。しかし、利用時間や形態には、まだまだ制約も多く、なによりもそれぞれの施設が個々の目的を強調しすぎるあまり、市民の生活を分断し、自由な活動を妨げているきらいがある。もちろん、各施設の専門性を認めることにはやぶさかでないが、個々具体的に各施設を点検してみると、同様の内容のものも多い。行政の分野を超えた、グループの活動拠点専門の施設の建設を考えてみてほしいだろう。

また、小和田公民館もその例であるが、施設建設に際し、計画段階から住民が

加わったものと、行政の計画のみが先行したものとでは、完成後の利用実態に差があるようである。当然のことではあるが、施設建設にあたって、行政は、単に住民参加を保障するだけでなく、施設の内容によっては、住民の建設要望が熟すのをまつことも必要のように思われる。

このように考えてみると、学校など既存施設の開放も含めて、施設建設を専門に調整・検討する第三者機関のようなものがあったとしてもよいかもしれない。

さらに、地域型（エリア型）の施設の必要性と同じように、ターミナル型（非エリア型）の施設の必要性は、もっと考慮されてよいのではないだろうか。現に、大書店や民間のカルチャーセンターなどは、大きなターミナルビルの中にあるものが多く、交通手段の利便性から多くの人に利用されている。行政の施設建設にも、ターミナルビルのワンフロアを借りきる程度のことになされれば、男性の参加や、さまざまな地域の人々の交流にも役立つとともに、建設費やその後の運営経費を比較した場合に、むしろ効率的なのではないだろうか。

最後に、拠点というとハードの施設を考えがちだが、「まいおか水と緑の会」の例や、野球場がさまざまなイベントに利用されていることにも見られるように、野外のフィールドも立派な拠点である。“舞岡谷戸”には、自然を活かした公園づくりという目的があるが、現在ある遊休地などは、目的を特定しない自由なスペースとしてそのまま市民に活用させることも考えてみたい。

3. 情報

「必要な情報の入手方法がわからない。」自主活動グループからよく聞かされる言葉である。ひと口に情報といっても、施設、催し、講師といった基礎的なものから、活動ノウハウ、資金づくり、PRの方法といったことまで、多種多様である。ここでは、便宜的に前者を一次情報、後者を二次情報としてみる。

まず、一次情報であるが、これは比較的活動の初歩的段階での要望と考えられる。これらの情報は、実は捜せばいくらでもあるのであって、むしろそれらの中から何を選んだらよいかわからないという方が正確かもしれない。

行政は、既存の民間機関とも十分な連携をとって、迅速かつ適切な情報提供に努めればよい。この際、コンピュータ等の発達普及を考えれば、ハードの施設など必要なく、むしろ誰にでもできそうで実はかなり困難な、情報の収集・加工・整理・提供といった業務を扱う専門職員の採用、養成が急務である。たとえば図書館や司書などが情報という幅広い視野からその業務を再編成してみるのも面白いかもしれない。

次に、二次情報であるが、これは非常に困難である。なぜなら余りストックがないことと、現に継続しているグループを見てもわかるように、きまりきった形がなく、メンバーと環境とにあったそれぞれの形があるのみだからだ。これら二次情報の収集については、活動の試行錯誤の中でつかんでいくしかない。四つのグループにおいても、新たな活動をはじめるとき、皆で関連する文献を読んだり、講師を招いて学習会を開いたり、先行するグループの活動を実地に体験するなどの方法を採り、そこで得た知識を試行錯誤を経て自分たちの活動に合うように手を加えることによって現在に至っている。つまり、広い意味での学習と活動の積み重ねの中でしか活かした二次情報は得られないのである。

ここで行政に考えられることは、さまざまなグループが、互いの活動の現場を日常的に見ることのできる場を設けることである。二次情報は、既に加工作されたペーパーや口伝えではなく、Face to Faceの形をとらなければ、なかなか身につかないためである。この際、行政は、例えば教育・福祉・文化等といった行政の便宜的な分類にこだわることなく、さまざまなグループをとりこんだ形態を考えたい。

最後に、情報は、本来発信しているところへは自然に集まってくるものである。活動通信の発行やさまざまな催しへの参加などは、地味なようで最も着実な手段のように思える。

4 . 活動資金

活動資金という問題は、これまでややもすると見落とされがちであった。趣味のグループなどはひとまず置くとして、各種ボランティアグループさえ、手弁当でという意識が強かった。しかし、身銭をきっての活動には自ずと限界がある。まして、ボランティア活動の現場の中で、どうしても手を貸さざるを得ないような場合、ある程度のことはお金がないからではすまされない。熱意だけでは活動の停滞は防ぎきれないし、ましてや拡大は思うにまかせない。

最近では、さまざまなグループが試行錯誤の後、活動資金の必要性に気づき、そのための取り組みを見せている。最も基本的なのが、メンバーによる会費の徴収と受益者負担の導入であるが、これらには余り多くを望めそうにない。ただし、自分たちの活動に責任を持つという意味は大きい。

次に、目的に賛同する人々や企業等から資金を募るということも行われている。この形態には、基金という形で、行政がなんらかの形で加わっているものもある。目的が明確で、大規模な活動が必要なものには適しているだろう。

一般的なグループに最もふさわしいのは、活動の一環として行うバザーなどであろうか。具体的には、リサイクル運動のバザー、身障者の作品の販売、老人給食の有料試食会などが挙げられる。これらは、活動に対する理解を深めることにもつながっている。

さらに、最近では、企業がさまざまな市民活動への補助も行うようになっている。「まいおか水と緑の会」がこの例である。

また、行政も各種の補助金を出している。しかし、市民の活動は、行政の側の福祉や教育や文化活動といったジャンルを超えて行われているのが一般的で、その点が行政と活動グループとの関係をぎくしゃくさせている面が見られる。今後は、行政と各種のグループとの接点をどのあたりに求めるかが課題であろう。いずれにせよ、それぞれのグループによって、必要な資金の多寡には差があるが、活動のための経済的裏づけを当初から考え、そのための努力をすることが大切で、特に活動の一環として資金を集める方法が最も自然なように思える。

まだまだたくさんの方の方法があるだろうし、また、新たなアイデアも生まれるだろう。行政は、これらのアイデアをうまく伝える媒体となる必要がある。

現代、私たちに必要とされる「豊かな地域社会」とは何だろうか。また、それを実現するために必要と考えられるものには、どのようなものがあるのだろうか。私たちは、この研究の中から、従来の“地域社会”とは別の、現代の私たちにこそふさわしい地域について考え、その答えを見つけようとしてきた。そして、それは“ひとりを大切にしたい”地域であり、一人ひとりが主体者として“生活をまらるががえ”した人生を歩める地域であると考えた。四つのグループを紹介した意味も、私たちの考える豊かな地域社会の担い手が、そこには既に芽生えていると考えたからである。さらに、そういう地域社会にこそ、子供も大人も、青年も老人も、そして障害者も、一人ひとりが成長し、共に学び、共に育まれていく土壌が、つまりは地域教育力の顕在化している社会があると考えたからである。

1. 学習 問い、考え、創り出す

1985年3月、パリで開催された「ユネスコ第4回世界成人教育会議」の終わりに当たり、“学習権”と名づけられた宣言が採択された。それは、次のような冒頭で始まっている。

学習権の承認は、いまや、これまで以上に、人類にとって、重要な課題となっている。学習権とは、
読み、書く権利であり、
問いかけ、熟慮する権利であり、
想像し、つくり出す権利であり、
自分の住む世界を読みとり、歴史をつくる権利であり、
教育の機会を手にする権利であり、
個人と集団の持てる力を伸ばす権利である。

この宣言の背景には、現在、私たちが直面し、克服していかなばならない数多くの、基本的でそして困難な問題解決への願いがこめられているのではないだろうか。そこには健康を享受するための学習というような生活に基本的なものから、人類全体が、戦争をさけ平和に生きることを学び、おたがいに理解しあおうというものまでを広く包摂している。そしてこの学習する権利の承認を求める声は、

私たちがこれまでに小和田公民館やキピタスの会で見えてきた市民たちの学習への意欲、一人ひとりが生活の主体者として自覚を持ち、育みあい、しっかりとした目で社会を見つめかかわっていこうとする姿ともつながっているのである。

人間の本質としての学習

学習の意義を純粹につきつめていくと、それは、人間の本質に根ざした、人間として成長するために必要不可欠なものといえるのではないだろうか。

生まれたばかりの赤ん坊が、最初に接触する、自分を囲む文化との交流でさえも、既に一人の人間の本質として用意されていた何ものかによっているような気にさえさせられる。子供にとっての遊びも、学習そのものである。想像力を自由に駆使し、目の前にあるものなら何でも小さな手で触れ、いじくりまわし、遊びの世界に浸っているとき、子供は生き生きと成長し続けている。大人であっても、学習を自分のものとして体験したときには、“地球がまるごと見えてきた！”というような自分自身の成長の自覚を伴った感動を生むものである。

学習という、人間の本質に根ざした知的探究なしには、人間としての生き生きとした喜びも、文化の担い手としての人類の歴史さえも、ありえなかったのではないだろうか。赤ん坊から大人まで、この人間の本質に根ざした学習の意味を、私たちはまず確認すべきであろう。

主体者としての学習

現代の私たちをとりまく、複雑で膨大で困難な多くの問題。公害、原発、軍縮、宇宙戦争、そして子供の自殺。それらは、毎日の私たちの生活とはどこか無関係な世界で起きている事件のようにさえみえるときもある。しかし、どの一つをとってみても、間違いなく私たち一人ひとりが解決し克服していかなければならない、私たちの生存そのものを脅かす問題ばかりである。いつかは自分自身の悲しみの種となるかもしれない。これらの問題を解決すべき生活者としての私たちの主体性を支えるものこそ“学習”であると考えてるのである。原発問題に、核軍縮問題に、素手で挑戦するわけにはいかない。一人ひとりが、自分の生活を足元から見つめなおし、一人の生活者として、地域の中で、社会全体のことを、地球全体のことを考え、小さな学習を積み重ねていったときに、おそらく、科学者や研究者の中からは生まれてこなかったような優れた思想が、一人ひとりの市民や住民の中から生み出されてくるのではないだろうか。小さな地域の中での学習が、自分の住む世界を読みとり、歴史をつくり出す思想を生み出すのではないだろう

か。そういう意味で学習する権利は、主体者として生活する私たちにとって基本的権利と言えるのである。

学習から活動へ

人間の本質としての学習、主体者として生きることを支えるものとしての学習。人間の未完成性を前提にして、完成への過程としての学習の必要性とその意義について考えてきた。学習すること自体、より豊かな地域の創造に向けての活動の一つと考えられるが、個人と集団の持てる力をより伸ばし、発展させるために、学習は、それを契機とした活動へと発展していく。自分の住む地域、世界を、もっと住みよく豊かなものとするためのさまざまな市民や住民たちによる活動は、さらに学習を必要とし、そして豊かな地域社会実現へ向けての活動へと展開されていく。私たちのまわりの市民・住民たちの動きの中にも、そのささやかではあるが着実な歩みを見ることができる。

2. 活動 拡がる、つながる、暮らしをつくる

人々が日々の暮らしの中で感じる疑問や不安、或いは「こうあったらよい」と思うこと、そして他の人々への共感など、「もっとよく知りたい」「学びたい」と思う気持ちが学習に結びつき、自分自身の心の底から納得の行く形での学びであったとき、人々はそのことを実現させるために具体的な動きへと一歩を踏み出していくのではないだろうか。

これまで見てきた四つの活動には、さまざまな形であれ、活動の中に学習があり、人々のかかわりを通しての学び合いがあり、それが活動の継続や拡がりにつながっている。活動が生活と密接に結びつき、自分たちの身の丈に合った形で行われている。生活に結びついた活動は、その形を限定することなく、人々のさまざまな動きに合わせ、教育・福祉・文化・消費・環境などへと自在に拡がり、福祉活動とか、文化活動とかなどとくっつけてしまうことができない豊かさをもっている。例えば、「キピタスの会」では、障害児・者の人々にかかわる活動、一人暮らしの老人にかかわる活動と共に、子供たちのための文庫活動、地域の歴史の掘り起こし、コンサートなどの手づくりの文化をつくる活動も同時に行っており、活動を通して多くの人々との出会いや新たな課題の発見がある。また、そうした中で地域の活動のつなぎ手の重要性を認識し、地域がより豊かに動いていく方策として福祉活動にかぎらない「ボランティアセンター」を提起している。小和田公民館に集まる人々も、文庫活動や消費者運動、教育にかかわる活動など幅広く

行い、学習や活動を通じて、生活からの発想を市政に反映させる必要性を認識し、地方自治体の議員を誕生させるなど、その動きはダイナミックである。また、子供たちに地域の歴史や自然を伝え、地域をつくっているさまざまな人々の暮らしを伝え、子供と地域や大人とのかかわりも深めようとしている。

「キビタスの会」の簡さんは、「学習のない活動はどうしても停滞しがちで、逆に活動のない学習も頭でっかちの“おりこうさん”になってしまう傾向があります。活動の展開にとって学習はとても大切です」、さらに「皆が健康で住みやすい地域をつくるために必要なことをやりたい。人々が心豊かに生きることは大切だから映画会や音楽会などもやってきた。鶴見の歴史や文化の伝承・保存・発掘などにも関わってきたが、今後は地域に住む人々同士が文化を伝え合うことも進めていきたい。例えば、朝鮮語や中国語なども在日の外国人の方々から学ぶ場をつくることも考えている」と述べている。

市民として具体的な活動を行っている人々は、自らの活動に枠をはめることなく、必要なこと、大事なこと、そして人々のかかわりがより豊かに、より楽しくなる方向に動いていくことで、活動自体に拡がりをもたせ、他の活動グループや人々との新しい出会いとネットワークをつくっていると言える。だから、その活動は人々の暮らしをトータルに豊かにしていく方向で動いていくことになるのだろう。例えば、障害者の方の送迎ボランティアをする人が、送迎と言うことから出発して、車椅子を家から出すために障害となる玄関の敷居などの段差、歩道の真中であって通せんぼの電柱、道路を横切るために使えない横断歩道橋、駅の階段などで一人では車椅子を上げられずに困っていても見て見ぬふりをする大多数の人々など、いろいろなことに気づき、「ノーマライゼーション」ということが社会に定着するために多くの課題があることを知る。それらの課題は、福祉に止まらず、建物のつくりや道路の在り方、また人々の心の問題にまで及んでおり、行政がその責任として解決すべきものや、人々が互いにボランティアな力を寄せ合うことで解決できることがあるだろう。そして、行政など公的な対応と市民たちのボランティアな動きがかみ合うことで、画一的でない血の通ったより人間的な解決が可能となるのではないだろうか。人々の動きが周囲に影響を与え、新たなボランティアな動きの芽を育てているのではないだろうか。

また、新たな課題への取り組みは、活動をダイナミックにさせる原動力となっているといえる。「キビタスの会」が拠点を自前で持つことに成功したり、「常民学舎」の会員の一人が地方自治体の議員になったり、「まいおか水と緑の会」が多額な活動資金を企業による公益信託から得ることができたり、ということを

活動の始まりの段階で誰が想像できただろうか。

多様な人々が共に動き地域をつくっていくとき、大切なのはそのメンバーの思いを柔らかくつなぎ、それぞれの創意や発想を大事にし、その責任において行ういろいろな活動がゆるやかにつながりながら継続していくという形態である。例えば、「まいおか水と緑の会」では、会員は自然を豊かに・稲作など自然とつき合う・谷戸文化を伝承するといった多様な立場から参加しており、各人の得意分野・好きな分野で動くという形で協働している。また、神奈川県横浜愛泉ホームの「友交会」の人々は一人ひとりの動きを、自然な流れの中で分担している。皆が等分に分担というのは、一見よさそうであるが、人にはそれぞれ個性があり、得手、不得手があるのだから、こうしたやり方は悪平等に陥り易く、活動をも重苦しくつまらないものにしてしまいがちである。自分がそうしたいからやっている、やった方が気持ちが良いからやる、やれることをやれる範囲で、というのが活動の原則であるようだ。そのうえで必要なことはやるということが、“責任”ということだろう。

こうした活動を担っている人々は、活動を通じて、自分自身を見すえ、他の人々の存在を確認し、それぞれの思いに我が身を引き寄せて共感しあえる人々の関係を創っているのではないだろうか。それぞれの活動事例に見られる人々のかわりは、人の心を開かせてくれる暖かさをもっている。この暖かさが、人々を活動へと向かわせる原動力かも知れない。そして、この暖かさは、福祉を豊かにと願い、文化を豊かにと願う心でもある。

地域教育力顕在化のために（提言）

人々が自己の生活において、それぞれの個性を發揮しながら支えあって生きる中に、地域を耕し、新しい地域を創造する姿やかかわり方を見いだそうとする私たちは、次の視点を基本に踏まえつつ、提言を行う。

1．“ひとり”を大切にする。

現代社会においては、ひとりの人間のその時の状態、欲求、生きかたが、組織や集団の在り方や進む方向の中で見失われてしまうことが多い。そして集団の在り方に個人をあわせていくといった傾向も見られる。

しかし組織や集団が個人に先行するのではなく、個人がまず先にあるという見方をしたい。「ひとりの人が生きる力を自らのものにする」という視点を大切にしたい。かかわりをつくることで、より人間的なつながりを生み出し、それが全体にも影響を及ぼすことになると考えるからである。

また先天性重度障害児、寝たきりの老人や痴呆性老人等、一見して社会の中で役割を担い得ないように思われがちな人であっても、その人たちの一つ一つの生が切り捨てられることなく大切にされるということも欠かせない。社会的に弱い立場にある人や自ら他者とかかわることのできない人々が、より良い他者とかかわりを持てるかどうかは、その社会が何を大切にし、どういう方向に進もうとしているかを映し出す鏡であると言える。「ひとりを大切にする」と言った時、自ら他者とかかわり得ない人々の存在を捨象することはできない。

“ひとり”が大切にされ、それぞれの個性が生かされ、それが全体に反映されていくことで地域にいのちがみなぎるような方策が多様に展開されることが必要なのである。

2．体験のネットワーク

地域とは何か、地域とどうかかわったらよいのかを自己に問う時、抽象的に地域を云々するのではなく、自分の生き方や生活の仕方にまず目を向けて見るとい

うのが出発点だろうと思う。自分の内面に目を向けることにより、ひとりでは生きていられない自己の弱さに気付き、人とのかかわりの楽しさ、素晴らしさを知ようになるからである。それを他者に伝え、思いを分かち合うところに、ひとつのつながりが生まれるのである。そしてそうしたつながりが網の目のようになっていくことが、地域教育力が顕在化している状態だと考える。

そのために自分を見つめること、自分の生きてきた体験や現在の生活の中で感じ、考え、学び、動いてきたことなどを表現し伝え合えるような場や機会を生み出そうとしている人々への支援方策が様々な形で用意されることが必要である。

3 , 地域の動きに柔軟な対応を

地域は行政が創るものではなく、人々の創意工夫と協力によって創られていくものであり、人々の動きと共に絶えず変化しているものである。行政はそうした動いている人々や地域に対して柔軟な対応をすることが大切である。そのためには、画一的、単一的な行政対応を見直すと共に、住民の地域づくりの動きに対して、役割と立場を異にするパートナーとしての認識と協働が望まれる。

そのためにも、人々が生活の中で課題を発見し生活をまるごと問い直すような学習や活動を自らの力で展開できるようになるための支援方策や、現実に活動を展開している人々の学習や活動がより広がり深まっていくための支援方策を、資金、拠点、講座等多方面から検討することが大切である。

以上のような視点を具体化していく方策として、次のことを提言したい。

- 1 , 自分史ライブラリー
- 2 , 育ち合い学級
- 3 , サークル団地
- 4 , 生と死の教育 (デス・エデュケーション)
- 5 , 街を楽しくする遊び場づくり

自分史ライブラリー

1．自分史のすすめ

自分史は生活実感や個人の認識から発した、生き方、思想の表現であり、その人なりの社会、歴史認識である。それは自分史を記す本人にとっては、かけがえない“生きた証”であり、ひとつひとつがずっしりとした手ごたえと重みを持っている。だからこそ小和田公民館に集う人々は自分史を書くことにより様々なものとのかかわりの中で生きている自分が見えてきたのであり、そしてありのままの自分を表現しながらも一歩踏み出した生き方をしたいと願う自分、他者とのかかわりが深まっている自分を知っていたのだと思われる。

また小和田では文字を使って書き表された個人の思いや体験を、集団の中で読み合い語り合ってきた。そうした行為が自分の体験を客観化したり、他者の体験の共感や自己の生が他者の生との関係の中に存在するという認識を可能にしたのである。自分史は抽象化され体系化された歴史と同一線上にあるものというよりは、そうした歴史のすきまにしみこんでいく流れる水のような役割を持つ。

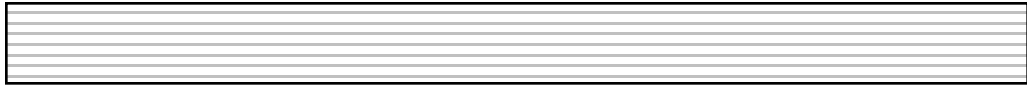
しかし自分史は、書く人も読む人も今を生きる存在である以上、思い込みやひとりよがりを免れることはできない。そのためそこには自己確認と反省が繰り返され、それが継続した自己教育と相互教育の営みになっていくことが期待される。

自分史を綴ることは、自己を見つめ体験を伝えあい主体的に生きていくために極めて有効な方法なのである。行政は多くの人々が自分史を書き始め自分史に触れるきっかけとなるよう、多様な機会を設定することが必要である。

2．自分史ライブラリーの設置

自分史は大人同士のヨコのつながりの中で書かれるだけではなく、子供の書いたものが大人を動かし、お年寄りからの聞き取りで書かれたものが子供たちに受け継がれていくというものもある。それは世代間のつながりを生み出し、世代を越えた活動や語り合いにも大きな役割を果たす。そうした自分史がさらに多くの人々の中に浸透していくために、自分史ライブラリーの設置を提言する。

グループや教室で書かれた自分史がメンバーの間で読まれ、話し合われるだけ



でなく、自分史ライブラリーに置かれたものを手にすることにより、多くの人々が層をなすように自分史を綴り始めるきっかけになる。様々な人の手により綴られた自分史がひとつにまとめられて地域史が作られていく。次の世代、また次の世代へと継承されていく。自分史ライブラリーは縦横に人々の関係が紡ぎ出される可能性を持っている。

3．自分史ライブラリーのかたち

自分史ライブラリーはその機能の違いから二つの形が考えられる。

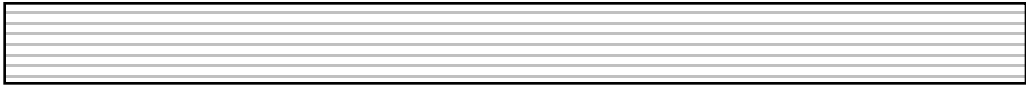
まず自分史の持つ性格から「誰もがいつでも触れられ、気軽にかかわれる場」であることが必要であろう。そのためには「公民館、地域図書館等の中に、自分史の収集コーナーを設ける」「学校図書館の中に生徒、教師、地域住民の自分史、地域生活史を保存する」などというように、身近な施設や図書室の中にコーナーのような形で設置されることが望ましい。

また地域の中で日常的に綴られた自分史が体系的に集積、保存され、それをもとに民衆史や地域史の研究等が行われたり、永続的なものとしての利用や学習が可能になるために、県域あるいは市町村域といった広域に自分史ライブラリーが設置されることも大切であると考え。その時の自分史ライブラリーは専門館として新設することが望ましいが、既存の施設、例えば図書館、文化資料館等の中のワン・フロアをそれに充てることも可能であろう。

4．自分史を書く場（例）

【学級・講座の中で】

- ・ 例えば昭和史を振り返る手掛かりとして自分史を書くというように、自分史を綴るということと、歴史学習（昭和史等）、平和学習等が相互に影響しあいながら、展開されていくようにする。それは同一講座の中で循環する方法もあるし、二つ以上の別の学級や講座を、自己のなかで統合させる



というものでも良いと思う。

- ・ 高齢者学級の中で、高齢者自身の生きがいを探すためと、あすへ残すひとこととして綴る。また文章教室などの課題としても良い素材になる。
- ・ 講座通信の中に、講座への期待、参加の動機、自己紹介等を参加者の自分史という形で掲載していく。またオリエンテーション、講義、話し合い等のプログラムの中に参加者相互の発表の機会を持つのも一つの方法である。
- ・ 講座が終了する時に文集、報告書などを作成し、なぜ自分がその講座に参加するようになったのかを含めて自分史という形でまとめてみる。
- ・ 自分史講座の開設

テ　　マ	内　　　　容
なぜ自分史か	自分史を書くとは・70年代後半の自分史隆盛の理由
自分史の書き方	履歴　　年表　　文章
表現の仕方	文章・聞き書き・詩・短歌・俳句・唄・イラスト
自分史の課題	歴史学習との関連の中で書く自分史
自分史の可能性	自分史　　地域史　　・　本として出版

【学校教育の中で】

- ・ 地域の大人が教室で子供たちに自分史を語り、それを元に話し合い、作文、家族からの聞き取り等へと授業を広げていく。
- ・ 子供たちの生活や、体験の中から書かれたものを文集にまとめ、地域学習へと発展させたり、大人たちの子育てへの見つめ直しのきっかけとする。
- ・ 青年期に入った若者（中学・高校生）が、親の生活や友達との関係を見つめながら自分史を綴ってみる。それにより自分自身や他者の痛みやいらだちを知り、共感的関係が生まれるということも期待できる。
- ・ 卒業時の作文や論文として自分史を書く。

【地域の中に場を】

- ・ お年寄りが自己の生活体験や地域の移り変わり、昔の遊び今の遊び、伝え残したい文化、民話、昔話等を地域の子ども会などで語ったりする機会を作る。例えば「高齢者の社会参加登録」といった方法もある。またお年寄りの話の聞き書きや、高齢者自身の筆により、冊子にまとめてみる。

育ちあい学級

1．主体的な市民が育つ契機として

人々の暮らし方が家庭だけ、職場だけといった単一的なものから、もうひとつの居場所を求める方向へと移りつつある今日、生涯学習への欲求も高まりを見せ様々な学習や活動の方法が展開されてきている。

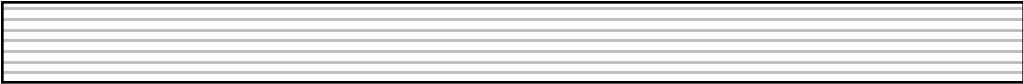
そうした中でも特に、自己の生活や生き方から出てくる課題や問題を学ぼうとする心を大切にする学習が広がっていくことは、新しい地域を創出する主体的な市民が育つための契機となるものであると考える。

そのため行政は自らの力を最大限発揮しながらボランティア活動や学習活動を行っている人々の、生活者の視点を持った自主企画のプログラムに対して積極的な支援を行うよう提言する。また同時に寝たきり老人や乳飲み子を抱えながらもなお学びたいと願う人たちや、一日の大半を組織の中で過ごし、学習やボランティア活動への意欲はあっても物理的に制約されることの多い勤労者の学習が可能になるよう、意識啓発や環境整備を行っていくことも必要であろう。

2．育ちあい学級とは

育ちあい学級とは人々のかかわりあいの中で継続的な育ちあいが可能になるよう配慮された学習活動であり、「私・暮らし・そして地域」等を発見できるような視点が含まれているもののことを言う。その形としては県や市町村が実施する学級、講座や、学習グループが行うものまで様々なものが考えられる。系統だった講座として設定されるものばかりではなく、単発的であったり、講座形式をとってなかったりと、それぞれの状況に応じて展開のされかたは多様であって良いと考える。

テーマにも限定はない。しかし、生活の中での一人ひとりの不安や疑問を解いていくきっかけとなるようなものがテーマとして設定されると、育ちあい学級の視点と直接結びつき、自己の生活を問い直すきっかけになりやすいと思う。そのため「老いと地域」「親の子育て、地域の子育て」、「家族、その新しい芽生えを考える（夫、仲間と共に子を産む）」、「福祉？教育？文化？生活はそれを切り



離せない」などのような課題が設定されたり、自主的な学習や活動から生まれた課題を学ぶ場であったりすることが望ましい。

また育ちあい学級に参加する人たちは、テーマ設定を始めとする講座の企画から運営までを自分たちで行ったり、時には講師や問題提起者としての役割を担うという具合に、公的機関などが主催したもので単に「お客さん」として参加するだけではなく、自分にあった方法で主体的にかかわれるようにしていきたい。参加者同士の話し合いによっては連れてきた子供の面倒を見る役割を引き受けるということも考えられる。そうすることによって、「共に楽しめる」「一人ひとりの生活の仕方を大切にする」「ひとりで抱えこまないで支えあう」というようなことがそのかわりの中から学べるに違いない。

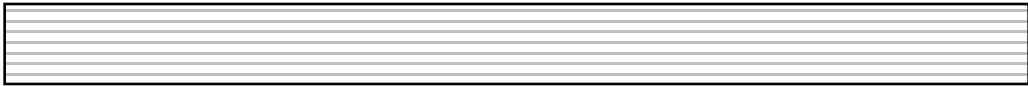
育ちあい学級とは自由（Free）で、柔軟（Flexible）で、その時のメンバーに最も良くあった（Fit）学習の場だと言える。

3．育ちあい学級の形

育ちあい学級の形に、定形はない。しかし単に講義を聞き、それについて話し合うだけでなく、また学びの場を限られた部屋の中に限定してしまわずに、自由に柔軟に、場を広げ、からだを充分に使いながら学ぶ。それもその時の参加者の状況にフィットした形で行えれば素晴らしいと思う。

その方法としては、参加者がからだで感じたことをもとに考える「ワークショップ」、講座の中で他の活動を体験する機会である「フィールド・ワーク」、参加者が自己の体験を伝えあう場「井戸端懇談会」等の要素が織り込まれていることが望ましい。

また「書く」「まとめる」「広げる」という要素も大切にしたい。そして書くということから、「横町瓦版」「山手通信」と言われるような情報紙が生まれたり、「市民がつくる地域白書」「町子供白書」「お母さんが作った高校要覧」のように形のあるものが創られる芽が育つような支援も必要だと考える。そうしたことが学習から活動へのつながりや、活動が継続していくための足掛かりを生み出すのである。



4．特に学びにくい人のために

この学級は、子育てや介護をしながらもなお学びたいと願う人々が参加できるというところに特色を持つ。それはそうした状況にある人ほど、他の人々との学びあいや育ちあいを求めているのではないかと考えるからである。そのため誰もが参加しやすい環境の整備が必要になってくる。具体的には乳幼児のための保育の場や保育者の確保がひとつとして考えられる。これはすでに母親学級等では実施されているが他の学級・講座でも参加者の必要に応じて準備されるよう柔軟な対応が望まれている。またお年寄りを介護している人に対しては、まずそうした立場にある人が外に出て学習するということが「当然のこと」となるような社会的風潮を生み出すような啓発が必要であろう。その上でショートステイやボランティア派遣等のシステム、あるいは地域の人々の支えあいのネットワークができているということが大きな助けになると思われる。

しかしこれらのことは学級・講座を主催する側や行政がいつもお膳立てをしてしまうのではなく、参加者自身がその方法を探したり、その時の当事者でない人もそれを自己の問題として考えたりできるような講座の運営、職員の対応の仕方が大切なのであり、そうした一つ一つの問題を解決していくために参加者同士が、また職員が学び合うこと自体が育ちあい学級の中身になっていくのである。

5．学びあい、育ちあう職員

育ちあい学級に職員がかかわるとき、その職員はまずなによりも地域に住む人々の抱えている課題に対して敏感であり、地域の人々の中に入り込み、その動きを知り、より豊かな生き方を求める活動への援助を行う人でありたい。また多様な活動がつながっていくためのコーディネーター的役割も果たしたい。

例えば困っている人やグループの人々に対しては、人や活動に関する情報提供を行おう。それが学びの深まりや、活動が楽しく豊かになることへの援助になるのである。ひとりのため、ひとつの活動のための動きが、結果として活動の結び合い、広がりあいを生み出すに違いない。

サークル団地

1．地域の寸法にあった拠点を

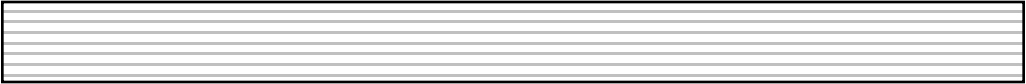
高度情報化社会の進行の中で、人々は広範多岐に渡る多くの情報を手にいれることもでき、それを広い視野に立って整理し、自己の生活の中に生かしていくことも可能になってくる。また在宅勤務、在宅ショッピング等が普及すればする程“Face to Face”のつながりを求めるのではないかとも思われる。こうした動向を踏まえると、人々が日常的に学び、活動し、交流しあえる拠点の設置が必要とされるようになるであろう。

拠点のありようについては、規模や目的の違い、職員の有無、運営主体の違い等様々であるが、基本的には「地域の寸法にあった」ものであることが望まれる。それは言い換えれば、地域住民の要求や活動の実態にみあって設置されるということであり、地域住民と共に変わっていく柔軟性を有しているということである。そうした点を踏まえながら、ここではこれからの社会に求められるであろうひとつの形として、ターミナル型拠点「サークル団地」の設置を提言する。

2．サークル団地とは

サークル団地は、ターミナル等交通至便な場所に設置されている。そして例えば「まいおか水と緑の会」のように単位行政区や一市町村を越えた広域からの人々の集まりや、行政の個別領域を越えた活動を展開している人々の活動を支援することに特色がある。ターミナルに設置されることで広域から人々が集まってくるため、ユニークな活動やダイナミックな活動も期待できるし、大きな動きにつながっていく可能性も秘めている。またグループ活動やボランティア活動が難しいといわれる勤労者や青年層もターミナルなら活動を起こしやすいと思われる。

サークル団地の設置については、例えば駅舎やプラットホームの上に図書館などと併設して造るとか、新築、増改築が予定されているターミナルビルのワンフロアを借り切る、民間と協働して店舗・マンション等の上層部に設置するという方法が考えられる。また交通至便な場所に設置されていることの多い官庁の庁舎に、夜間や休日に利用できるような施設を併設することも検討する必要がある。



2. サークル団地の機能

交通至便な場所に設置された種々なサークル活動の拠点となる団地形式のネットワーク・スペースである。「たまり場」「クラブ室」のような部屋がいくつかあり、一部屋を6団体程で共有し、それぞれが工夫しながら使っていくようにする。綿密な使用規則等は作らず、利用するグループ間の話し合いの余地を残しておくことが大切である。そうしたことがきっかけになりメンバー同士の日常的なかかわり合い、情報交換や活動の広がりも自然にできてくると思われる。

サークル団地の機能としては、次のようなことが考えられる。

【人々の“たまり場”】

誰もが伸び伸びと語り合え、ピアノ、ギターなどの楽器を自由に弾きながら、時には見知らぬ者同士が心を合わせて歌うこともある。簡単な飲み物や食べ物は自分たちで自由に作れるよう、水道や湯沸かし場を付設したカウンターもある。クラブ室以外の各スペースの仕切りは低く、解放的になっている。

ひとりで来ても、目的がなくても、居心地の良い雰囲気を持っている。

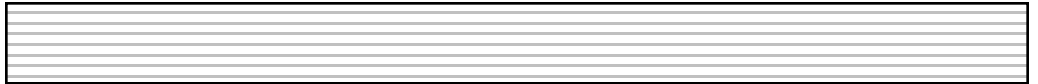
【情報発信の場】

資料の作成、印刷等が可能であり、個人やサークルが発信したい情報（依頼、募集、P・R等）を記すことができる大きな伝言板が設置されている。一つの壁面全部が伝言板になっていたり、階段や踊り場も一面掲示版として使えるという具合にダイナミックなものが良い。そこには例えば「教えたい人」と「学びたい人」が情報を発信し合ったりリサイクル交換の場として使用するなど、それぞれの主体性と責任に基づいて情報が交換できるような伝言システムも備えられている。

また発信したい情報が受け止められる情報交換の核として、機関紙等が発行されることも望ましい。

【情報交換の場】

福祉活動、自然保護活動、町づくり、PTA、青少年活動など活動形態、内容、



目的が違う多様なグループ・団体の活動の資料が集められ、会報、活動通信等各種ミニコミも絶えず展示され、閲覧できるようになっている。またそうした情報について誰でも自由に調べる事ができる。

【情報集積の場】

サークル、ボランティア、指導者等の登録がなされ、名簿の作成も行われている。また発信され、交換される情報が系統だてて整理されている。

それを担う人は初めから配置されているよりは、サークル間の話し合いと必要から生み出されてくるほうが良いと考える。

【共同活動の場】

個々のサークルの活動が広がり深まっていくために、またサークル相互のネットワークが可能になるために、共同活動が柔軟に展開されることが大切である。その形としては、イベント、サークル間交流会、サークル団地運営委員会などが考えられる。

共同活動が可能になるためには、それぞれが自由であるということ、お互いを認め合っていること、積極的な情報発信、情報交流が絶えずなされていること等が欠かせない。

サークル団地は人々の学習や活動にとって基本的な機能を備えた、これからの社会にふさわしい拠点である。行政はサークル団地を利用する人々の主体的な活動に条件整備という形で積極的に支援していくことが必要である。

生と死の教育（デス・エデュケーション）

1．生涯学習の中に「生と死の教育」を

愛する人たちに看取られてその生を閉じたいと思うなら、それが可能になるような生き方が問われるとよく言われる。死に方はその人の生き方と深い関係を持っているのである。その意味で「愛泉ホーム」や「キビタスの会」の事例は、人々が自然に認め合い支え合って生きていく姿を見せてくれている。

しかし病院死が増加している現代社会では殆どの人にとって死はますます遠いもの、見えにくいものになり、死を目の当たりにすることは少なくなってしまう。だがもう一方で死の定義の問題、延命医療への疑問など、人間らしく生きるということと人の死をめぐる問題を見直そうとする人々の動きが見られ始めているというのが現状であろう。そうした中でひとりでも多くの人々が生と死を統合されたものとして考えることのできるよう、生涯学習の中で「生と死の教育（デス・エデュケーション）」の機会が設定されることを提言する。

それは高齢化社会に移行しつつある日本において、やがては老いていく一人ひとりが死を恐れることなく迎え入れる精神力を養うために、また自然な死を迎えようとする高齢者が孤独のうちに死んでいくことがないためにも大きな意味をもっている。

「生と死の教育」を通じて人は弱く限りある自己を見つめる機会を持てるだろう。そして他者と支えあって生きていかざるを得ない存在であるということを知る。そうした機会を持つことで人は他者と傷みを分かちあい、共に生きるということ、現在の生を受け入れながらより良いものにしていくということ、自らのものとしていくのではないだろうか。

2．生と死の教育とは

「生と死の教育」は普通デス・エデュケーションと呼ばれる。デス・エデュケーションは「生きる」「いのち」「死ぬ」ということを他者とのかかわりの中でトータルに考えながら、いかに生きるかを自己のものとしていくために行うものである。その領域としては哲学、宗教、医学、福祉教育、平和教育、芸術、その

他学校教育の中で取り上げられる多くのものを包括し、「生きる」ということや「いのち」がテーマになるものならいかなる分野でも行うことができる。デス・エデュケーションとは「生を見つめる時、死を切り捨てない」「死に焦点を当て直して、生を見つめる」ということなのである。

人間の一生の中で最も弱い部分、見たくない部分に焦点を当てるということは、障害者、老人、生活困窮者などの社会的弱者に光を当てて社会のありようを考えろということに通じると思う。デス・エデュケーションは「生活と学習の統合」「他者との共生」を一人ひとりが自己のものとする時の有効な一方法であると考えろ。

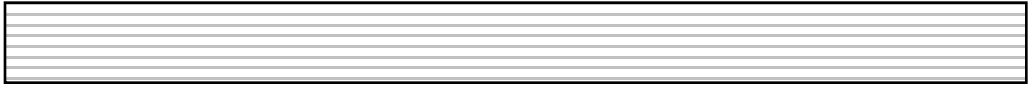
その目的とテーマとしては次のようなものが上げられる。

【目的】

- ・ 死を見つめ、死を思うことで、現在の自己の生を受け入れつつ、その生をより良いものにしていこうとする心を培うために
- ・ 生と死は全く別のものではないということを知るために
- ・ 様々な危機的状況に対応していける個を確立するために
- ・ 死の定義の問題、延命医療への疑問等の中で、主体的に医療にかかわり、自分で死に方を決定できるようになるために
- ・ 他者の死を身近に体験したり、死に臨む人々の傷みを知ること、やさしさや思いやりといった共感能力を養うために
- ・ 危機的状況にある人へのより良いかかわりや、援助の方法を知るために

【テーマ】（例）

- ・ 死ぬとき本当に必要なものは
- ・ 永遠の生命とは ・ 安楽死 死の定義
- ・ ホスピス運動（ターミナル・ケア）の意味と実際
- ・ 生活の中での小さな死（挫折 失恋） ・ 睡眠も小さな死
- ・ “ 老い ” を生きる
- ・ 悲しみを背負う誕生（先天性重度障害児と共に）
- ・ 戦争により大量死（核戦争）
- ・ 事故（ボランティア活動と事故）



- ・ 自殺（いじめによる自殺）
- ・ 殺傷（浮浪者殺傷・子供が人を殺す）

3．生と死の教育の方法

学校で子供たちとこの学習に取り組む時の方法としては、

- ・ 死を直視した文学作品を教材に取り入れる。
- ・ 戦争、原爆などでの人間の生と死を取り上げる。
- ・ 枯れた植物から生み出される新しい生命の循環や、動物の命をもらって生きている人間の生き方などを体験的に学習する。
- ・ 飼育体験学習の際、昆虫等の死をきちんと見つめる。
- ・ 生活の中での死との出会いの体験を文章等で発表したり、話し合ったりする機会をつくる。
- ・ 死にかかわる仕事に従事する人や火葬場、墓場などへの見方を歴史的、地理的に学ぶ。
- ・ 障害者や老人等、日常的に接する機会の少ない人たちと、積極的に交流する機会を持つ。

等があげられるが、子供たちの中に死への恐怖感が先立ち心を閉ざしてしまうことのないよう、一人ひとりの発達にみあった形で無理なく自然に学べるような配慮が必要である。日ごろから教師と生徒が心を開き合う関係を培うということが大切になってくる。

講座、学級等で大人が学びあう時は言葉の定義を知ったり生と死について認識したりするというのではなく、死を見つめることで、生きることのすばらしさや楽しく強く生きる方法を体中で感じられるような体験をしたい。それは、講義を聞くという方法だけでは難しい。そこでフィルム・フォーラム、自由討論、シンポジウム、ワーク・ショップ、ロール・プレーイング等参加者が積極的にかかわり、自己を表現できるような方法を多様に盛り込むことが大切だと考える。

また単独の講座を設定するのみならず、文学講座、芸術講座、教育講座などのプログラムの中に、その視点を取り入れるという方法も考えられる。

街を楽しくする遊び場づくり

1. 市民の発意による遊び場づくり

「まいおか水と緑の会」の例にも見られるように、人々が生活の中に楽しさや美しさを発見しようとして、街、遊び、遊び場等を見つめ直し、街を楽しいものにしていくために自らの手で遊び場を作りだそうとする動きが各所に見られ始めている。遊び場は、路地裏などの小さなすきまから街の中の大きな公園まで、そこにかかわる人々の自発性、創造性によって創られ運営されることでいのちが吹き込まれ、子供はもちろんのこと、大人にとっても楽しい広場になり、多層の人々のつながり合いも期待でき、そしてそれを契機に街が動き始める可能性さえ秘めているということを、それらの人々の活動は教えてくれている。それは本来“あそび”というものが人々に夢を見る心や、生活をゆとりある豊かなものにしていこうとする生き方を思い返させるはたらきをもっているからである。

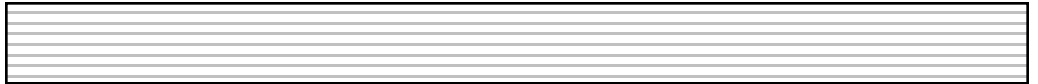
遊びと労働、家庭と職場、生活と学習などさまざまなものが個別化され、人と人の関係もギクシャクしている今日状況の中で、切り離されたものが統合され、他者との共生がなされるための糸口として、人々が自由で柔軟にそして楽しみながらかかわれるであろう「遊び」に視点をあてて糸を紡ぎ直してみることは重要なことだと考える。

行政はこのような機能や役割を持つ遊び場の企画、運営、管理等が生活を豊かにし街を楽しくしていこうと願う人々の発意に基づいて行われるよう、人々と協働していくことが必要である。そして幅広く、豊かな人々のかかわりができるような支援を行うことが期待されている。

2. 街を遊び場に

公園などのように遊び場としての目的や機能を持つ場だけでなく、街全体を遊び場にしてしまおうとする人々の視野の広さや発想の豊かさを大切にしたい。たとえば川や道路さえも「危険」「迷惑」などという常識を飛び越えて、現在でも遊び場になりうるのである。

汚く危険な川は蓋をしてしまおう、近寄るまいと消極的に考える人が多い中で、



「汚い川でも楽しんじゃおう」という発想をした時、そのためにも川をきれいにしようという動きもおのずと現れてくるに違いない。危険な遊びだからと禁止していたものも、道路が歩行者天国のように時間を区切って遊び場になることで、可能になることもあるだろう。そうした試みの中で人々は冒険と安全、自由と責任、公と私などについても考えるようになるのである。人々が生活の中で感じた必要や柔軟な発想をいつも大切にしていきたい。

3．子どもの遊び環境基準の策定

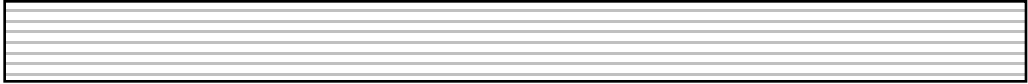
子供にとっては本来遊びは学びであり、生活であり、その成長に欠くことのできないものである。また国連の「児童権利宣言」第七条にも“子どもの遊ぶ権利”がうたわれている。そうしたことから見て子供の世界を保障する遊び環境基準の策定を行うということが必要であると考え。遊び環境基準はハードな部分での遊び場の質や量の問題はもちろんのこと、子供自身の生活時間との関係や、その場を保障する人々の在り方をも含めて考えられねばならないと思う。

そのためにはまず遊び場の実態調査をし、そのうえで個別化し、分断されて貧弱になった遊び場を連続、総合の視点で捉え返し、関係づけられる方策を人々と共に検討することも行いたい。例えば環境デザイン研究所が1985年11月に発表した「こどもの遊び環境マスタープラン策定計画」の中に見られる「遊び道ネットワーク」の整備などはそのひとつの方法だと考えられる。

4．遊び場調査の方法

地域のどこにどのような遊び場があり、どのような人が利用し、その人たちは何を感じているか、またそこに住む人々はどのような遊び場が欲しいと思っているのかというようなことを、直接足を使って歩き、肌で感じ、ひざを突き合わせて話を聞くといった方法での調査を行いたい。

「ワークショップ」「コミュニティ・カルテ」「地域マップ・遊び場マップ」



等の手法は、自分の目や足を使って街を見つめ直し、街の人たちに直接話を聞くことがその基本にある。そのため体験を通して感じることや多くの人とつながることも可能になり、遊び場づくりの観点から街全体を見直すこともでき、有効な手法だと考える。行政が調査を行う時にもこの方法を試みると同時により多くの人がこれらの方法を知ることができるよう、研修や啓発資料など様々な機会をとらえて呈示していくことが大切である。

5 . 遊び環境のネットワーク化への支援

県内には様々な遊び場づくりをしている人たちがいる。コミュニティ・パークを創ろうとしている人、自宅を開放して文庫や子供広場を実施している人、遊びのキャラバン隊のように町中に遊び場を探し求め、格好の場所を探しあてるとそこを遊び場にしてしまう人・・・そういう多様な活動が行政とかかわろうとすると、自然保護、文化、児童福祉等と分断されてしまうことも多い。しかし人々が他者とのかかわりの中でその生活を豊かにしていこうとする活動は、様々な要素が網の目のようになり合い、単一の領域に押し込んでしまうことは難しい。活動が生活に近づけば近づく程、たくさんの領域とかかわりができてくるものである。そこで行政は複合的で多様な要素が絡み合った遊び場づくりの動きに単一組織だけにかかわるのではなく、遊び場づくりの視点に基づいた関係セクションのネットワーク化や、事業の統合、再編成がなされることが必要だと考える。

また子供の遊ぶ権利を保障しようとする遊び場づくりの動きはそれ自体多様な要素を持ってはいるが、他の活動とネットワーキングすることで益々豊かで幅のある活動へと広がっていくと思われる。そうした遊び場づくりの活動のネットワーキングへの行政の枠を越えた柔軟な支援が期待されている。

参 考 文 献

- ・新しい公共サービスの供給方式 市民によるネットワーク社会をめざして
昭和58年度研究チーム 1984年 9月 神奈川県自治総合研究センター
- ・地域社会と住民運動 自治を担う住民運動
昭和59年度研究チーム 1985年 9月 神奈川県自治総合研究センター
- ・市民は地域社会を設計する
季刊自治体学研究 28号 1986年春 神奈川県自治総合研究センター
- ・キビタス 10周年記念会報 1986年 4月 キビタスの会
- ・キビタス 会報 創刊号 1980年 4月 キビタスの会
- 第2号 1981年 4月 キビタスの会
- ・学習がつくりだすボランティア活動 キビタスの会
「地域をつくるII 福祉の心を住民の手で」所収
越智昇他編 1982年 3月 神奈川県社会福祉協議会・神奈川県ボランティアセンタ
- ・地球がまるごと見えてきた！
茅ヶ崎常民学舎編 1985年 8月 径書房
- ・「学習」の頹廃に抗する社会教育実践 神奈川県茅ヶ崎市における地域に根ざす社会
教育実践の展開
疋田容子 東京都立大学大学院人文科学研究科 1985年 7月 修士論文
- ・学習観の形成と社会教育実践 同上 1986年 1月 修士論文補論
- ・自分史 それぞれの書き方とまとめ方
鈴木政子 1986年 7月 日本エディターズスクール出版
- ・施設づくり運動から地域づくり運動へ 地域の教育と文化の主体をつくる
西山正子 1979年12月 月刊社会教育
- ・地域の活力のおとろえと再生のなかで 今、社会教育職員の任務と課題を思う
鈴木敏治 1980年 2月 月刊社会教育
- ・公民館づくり運動と職員の役割 神奈川県茅ヶ崎市
西山正子、渡辺保子、鈴木敏治 1980年11月 月刊社会教育
- ・わが公民館における保育
鈴木敏治 1981年12月 月刊社会教育
- ・職員と市民の間をこえる社会教育実践 大人の成長を模索しつつ
鈴木敏治 1982年 8月 月刊社会教育

- ・住民のたまり場としての公民館づくり
西山正子 1982年 9月 月刊社会教育
- ・生活者として学ぶ茅ヶ崎常民学舎
高月雅子 1984年 1月 月刊社会教育
- ・茅ヶ崎市立小和田公民館 教育講座 文集 茅ヶ崎市立小和田公民館
「あゆむ」、「すすむ」、「白い道」
- ・同上 教育講座 講座通信 茅ヶ崎市立小和田公民館
「あゆむ」、「すすむ」
- ・コミュニティと社会福祉 10年のあゆみ
昭和47年10月 神奈川県愛泉ホーム
- ・愛泉ホーム物語、人と人 心と心
徳地久夫 昭和47年11月 神奈川県愛泉ホーム
- ・まちのなかで 地域福祉の実践
横浜愛泉ホーム地域福祉研究会 昭和61年 2月 横浜愛泉ホーム地域福祉研究会
- ・地域教育社会学序説
矢野峻 昭和56年 6月 東洋館出版社
- ・地域と教育
松原治郎・鐘ヶ江晴彦 昭和56年12月 第一法規出版
- ・現代社会における地域と教育
矢野峻・岩永久次編 昭和56年 9月 東洋館出版社
- ・地域開発と教育の理論
国民教育研究所 環境と教育研究会編 1985年 3月 大明堂
- ・地域と教育 現代のエスプリNo184
鐘ヶ江晴彦編・解説 1982年11月 至文堂
- ・地域からの教育づくり
野本三吉編 1981年 7月 筑摩書房
- ・子どもを育て自分を育てる 国立市公民館「保育室だより」の実践
国立市公民館保育室運営会議編 1985年11月 未来社
- ・改訂社会教育ハンドブック
社会教育推進全国協議会編 1984年 2月 エイデル研究所
- ・市民文化は可能か
松下圭一 1985年 4月 岩波書店

- ・ Fourth International Conference on Adult Education FINAL REPORT
 Unesco March 1985 Unesco
- ・ 学習権宣言 第四回ユネスコ国際成人教育会議の宣言
 藤田秀雄 1985年12月 月刊社会教育
- ・ ユネスコ第四回世界成人会議
 諸岡和房 1985年10月 社会教育
- ・ コミュニティの社会設計
 奥田道大・大森彌・越智昇ほか 1982年1月 有斐閣
- ・ 地域をたがやす コミュニティづくりとワーカーの役割
 金坂直仁 1979年6月 全国社会福祉協議会
- ・ 地域からの発想 事例にみる戸塚のまちづくり
 横浜市戸塚区役所市民課地域振興係編 1985年3月 戸塚区
- ・ 都市を拓く 中野区まちづくり白書
 中野区企画部企画課 1982年3月 中野区
- ・ まち1986 地域の活力と行政
 地域社会研究会 昭和61年3月 横浜市都市科学研究室
- ・ キャンパス都市 川崎の創造
 第2次川崎市文化問題懇談会 昭和61年3月 川崎市文化室
- ・ 生と死の教育
 樋口和彦・平山正実編 1985年11月 創元社
- ・ やすらかな死のために
 若林一美 1982年6月 現代出版
- ・ メメント・モリ
 藤原新也 1983年2月 情報センター出版局
- ・ 生命かがやく日のために
 斎藤茂男編著 1985年9月 共同通信社
- ・ いのちに触れる 生と性と死の授業
 鳥山敏子 1985年12月 太郎次郎社
- ・ 生きる場の哲学 共感からの出発
 花崎皐平 1981年2月 岩波書店
- ・ 柳田国男 日本の名著
 神島二郎編 1984年12月 中央公論社

あとがき

「地域教育力」、この言葉を知る人は少ないと思う。「地域教育力」という言葉自体がまず、この調査研究にあたって問題となった。社会教育の分野にかかわる人たちにとっては違和感を感じさせない言葉なのだろうが、一般的にはなじみのないものであろう。それ程に限られた一定の層に用いられている言葉、社会教育という枠の中でつかわれるこの言葉は、市民の感覚からは離れたものになりがちである。市民の感覚、生活者の感覚から引き出される言葉でなければならない。また、言葉がそうならなくてはならない。学者・研究者、そして公務員がこの言葉を狭く閉じ込めてはいないだろうか。市民の感覚、生活者の感覚は、自由に広がる自在性を持っている。考え方を言葉の呪縛から離さなければならない。

「地域」もまた、論者によって使い方はまちまちである。地域は一律ではない。それぞれの地域がそれぞれの人々それぞれの団体によって形成されている。この「地域」を知るには何よりも私たち一人ひとりが動くことが必要だろう。それが「自治」にもつながる。

こういう状況の中で私たちは焦点の絞りに多くの時間を取らねばならなかった。問題は山のようにある。議論は広範多岐にわたった。例えば、地域には青少年指導員、体育指導員、民生委員などさまざまな役割を担っている人たちが動いている。自治会・町内会といった組織がある。私たちの周囲で誰がこれらの活動を行っているか知る人は少ないのではないだろうか。これらについての調査はしていない。また、地域には外圧によって潰された、或いは自らの意志によってではなく消滅したグループがある。これらについても触れられなかった。これを調査することによって、地域にどのような力が存在し、動いているのかが鮮明になるとも思われる。私たちの今後の課題である。

一方、度々論議されたのが自治体職員の役割についてであった。自治体職員を地域活動の中にどう位置づけるかの問題は残されている。自治体職員自らが「自治」を体得しなければならぬという主張である。「自治」を体得しなければならぬという主張である。

「自治」は生やさしいものではない。「自治」は多くの人たちの悪戦苦闘の中から得られる。社会教育の分野でも、その他の分野でも日々多くの人々が努力している。一職員でしかない私たちも市民でもあり、市民とともに考えていかなければならない。

終局的には、「自治」とは、「国」とは、「自治体」とは、ということにつながる。それは私たちが「生活していく」ことを基礎にして論じられる必要がある。そこから「地球がまるごと見えて」くることへとつながらなければならないと思う。しかし、そこからまた、問いははじまる。課題は多く、広く、難しい。

私たちは四つのグループをあげた。これにはチーム員が分担して調査研究にあたり、執

筆もその担当者の考えで行った。時間の制約から十分な調査研究はできなかったが、そのためなどによって各グループの思想が誤ってとらえられているとしたら、それは全て当方の責任である。

最後に快く調査に協力して下さったグループの皆様、また、指導助言をいただいた次の方々に心から感謝します。

【調査に御協力いただいたグループ】

- | | | |
|--------------|----------------------|--------------|
| ・キビタスの会 | 横浜市鶴見区獅子ヶ谷995-16-204 | 045(574)2612 |
| ・神奈川県横浜愛泉ホーム | 横浜市南区中村町3-211 | 045(261)1074 |
| ・茅ヶ崎市立小和田公民館 | 茅ヶ崎市美住町6-20 | 0467(85)8755 |
| ・まいおか水と緑の会 | 横浜市戸塚区南舞岡4-48-15 | 045(824)5225 |

【指導助言をいただいた方々】

(敬称略)

- | | |
|---------|-------------------------------------|
| ・木下 勇 | こどもの遊びと街研究会 |
| ・十川 效 | 横須賀市立大矢部中学校PTA会長・横須賀市PTA協議会長(ともに当時) |
| ・古川 清治 | 障害児を普通学校へ・全国連絡会 |
| ・宮坂 廣作 | 東京大学教育学部教育行政学科教授 |
| ・諸節 トミエ | 藤沢市教育委員会社会教育部長 |

【「地域教育力の再検討」研究チーム】

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 五反田 能子 | 健康普及課(前青少年センター児童文化課) |
| 宇座 美代子 | 秦野保健所健康指導課 |
| 中村 正樹 | 横須賀三浦地区行政センター総務部経理課 |
| 福地 賢一 | 私学宗教課(前湘南地区行政センター総務部総務課) |
| 上原 稔 | 鎌倉市立岩瀬中学校(前教育庁少年自然の家三浦臨海学園) |
| 石田 静子 | 青少年総合研修センター調査研究課(サブリーダー) |
| 山成 健治 | 教育庁社会教育課(リーダー) |
| 斉藤 理恵子 | 横須賀市市民部青少年課 |
| 斎藤 哲夫 | 自治総合研究センター(コーディネーター) |